新科内科
版權論所
有章

邦國之富強在
於人民之健康
矣況事於濟生
者須携帶此書

熟讀玩味以建
起痾之業

明治十五年五月長崎森
書於濟生學舍

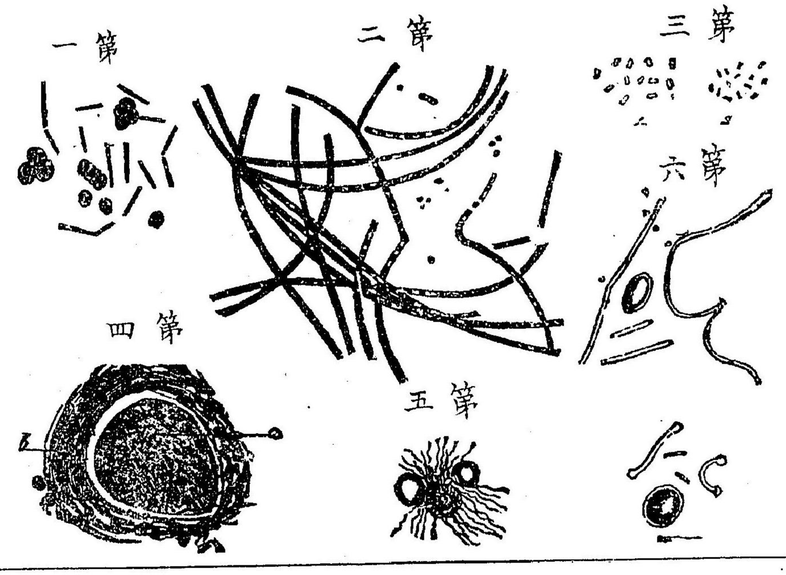
內科新論 第六冊目次

○延髓諸病 一
延髓出血 六
延髓及華魯里橋內脈管之阻塞症 七
急性延髓炎 九
慢性延髓炎 十
脊椎充血 廿七
脊椎膜出血 廿二
脊椎硬膜炎 廿八
脊椎薄膜炎 三十
急性脊髓炎 四十
慢性脊髓炎 四十
脊髓後柱硬結 五十七
脊髓側柱硬結 七十二

小兒麻痺　七十六
增進性筋萎縮　八十四
慢性肥大增進性筋萎縮　九十一
○腦脊髓諸病　九十四
腦脊髓增數硬結　百四
麻痺　狂
○神經系之微毒症　百十七
腦內微毒　百廿五
脊髓微毒
○腦脊髓神經諸病　百廿六
癲　癇　百四十七
幣斯垤利亞　百六十七
神經刺衝　百七十六
強　梗

震戰麻痺　百八十
舞踏病　百八十六
書痙　百九十四
強直（又破傷風）　百九十八
神經炎　二百七
神經萎縮　二百十二
第五對神經痛（三叉神經）　二百十三
坐骨神經痛　二百廿二
頸部後頭神經痛　二百廿一
頸部上膊神經痛　二百廿一
肋間神經痛　二百廿一
腰腹神經痛　二百廿一
顏筋痙攣　二百廿四
顏面麻痺　二百廿九

第六冊目次終



第一　癰腫ニ生スル黴菌ノ圖

第二　同黴菌ヲ醗酵中ニ繁殖シタル圖

第三　「チケンコレラ」ニ生スル小動物ノ圖

第四　結核ニ生スル桿狀黴菌ノ圖

第五　再帰熱ニ生スル糸狀黴菌ノ圖

第六　泥沼毒ニ生スル桿狀黴菌ノ圖

内科新論第六冊

病原論

○延髓諸病

○延髓出血

原名 ヒーモレージ HAEMORRHAGE.

延髓或ハ華魯里氏橋ニ於テ出血ヲ將來スルカ如キハ稀有ノ變症ナリ然リト雖ヒ其實際上ノ經驗ヲ報告シタルモノ一二ニ止マラサルナリ

出血ヲ誘起スル所ノ原因ハ腦出血ト異ナル𠀋ナシ故ニ眾粒狀動脈瘤及ヒ粥質變性ヲ以テ最モ重要ナルモノトス

基礎動脈ニ發スル所ノ巨大ナル動脈瘤ノ破綻ニ因テ延髓及ヒ其他ノ部位ニ出血ヲ將來スル𠀋アリ

第四室ノ床面ニ破綻スル所ノ出血ニ依テ上部ヨリ壓迫ヲ被ムリ延髓ヲ侵カス𠀋アリト雖ヒ斯ノ如キ變症ハ爰ニ論スヘキモノニアラサルヲ以テ專ハラ延髓或ヒハ華魯里氏橋ノ出血ノミヲ詳論スヘシ

通常破綻スル所ノ脈管ハ微細ナルヲ常トス故ニ發生スル所ノ血塊モ亦タ巨大ナルモノ鮮ナシト雖ドモ同時ニ數多ノ血塊ヲ現出スルヿ多シ

血塊ノ容積ハ豆大ヨリ橄欖實大ニ至ルノ差アリ然レドモ特リ延髓ノミナラス華魯里氏橋ニ波及スルモノ又タハ華魯里氏橋ニ出血スルモノニアリテハ稍々巨大ナルヿアリ

病理學會記事ニ於テ醫士「テー、エス、ダウセ」氏カ報告セシ一患者ノ如キハ華魯里氏橋ノ全部ニ充滿シテ左室ニ溢出スルノミナラス第四室内ニ流泄セリ其他「オールダ」氏ノ記載セシモノハ華魯里氏橋及ヒ第四室ヲ侵カシ終ニ右側ノ大腦脚ニ滲漏セリト云フ

徴候

出血多量ナルトキハ通常嘔吐ヲ發シ知覺脫失シテ全然筋力ノ弛緩ヲ起コスノミナラス反射的作用モ亦タ廢絶スヘシ呼吸幽微ニシテ不整トナリ且短小疾速ナルヲ常トス或ヒハ高調ナル鼾聲ヲ放ツヿアリ瞳孔不整ニシテ左右不等トナリ或ヒハ兩側共ニ縮小スルヿアリ終ニ一二時間乃至一二日ニシテ昏睡ニ因テ斃ル

電光中風ノ一種ニシテ延髓中痙攣ノ中樞若シクハ其近傍ニ於テ出血ヲ起スモノニアリテハ患者突然叫喚シテ全身ノ搐搦ヲ發シ昏睡狀ニ陷ヰリ數分時或ヒハ一二時間ニシテ死ヲ致スヘシ

本症ノ患者ハ皆ナ悉トク斯ノ如キ急劇ナル不幸ノ轉歸ヲ取ルモノニアラサルナリ

延髓或ヒハ華魯里氏橋ノ一側ニ於テ微細ナル血塊ヲ生スルトキハ通常卒中症ニ於テ現ハルヽカ如キ症候ヲ呈シ數時間若シクハ二三日ノ後感覺閉止シタルモノ漸々醒覺スルニ從テ反對側ノ運動知覺共ニ麻痺(半身不遂)ヲ起シ或ヒハ多少四肢共ニ麻痺スルヿアリ或ヒハ上肢ヲ侵カシテ截癱ヲ將來スルヿアリ然リト雖ドモ通常見ル所ノモノハ上肢及ヒ下肢共ニ知覺運動ノ兩機ヲ失スルモノナリ

腦内諸神經(第三對、第四對、第五對、第六對及ヒ第七對ノ諸神經ヲ云フ)ノ麻痺ヲ起スヿアリ又タ健側ノ軀幹ニ麻痺ヲ起シ腦内ノ神經ニアリテハ患側ニ麻痺ヲ來タスヿアリ

呼吸ノ中樞ニ近接スルヲ以テ呼吸ノ調節不整ニシテ徐長トナリ稍々困難ニシテ殆ント「チエーン、ストーク」氏ノ呼吸ニ類スヘシ

心臟ノ作用ヲ變スルヿ甚タシカラスト雖ドモ脈搏ハ頗フル頻數ニシテ不整ナルヿ多シ

有名ナル「ノートナーゲル」氏ノ發明ニ因テ痙攣ノ中樞ハ延髓ニアルヿヲ確定シタルカ故ニ通常現ハルヽ所ノ癲癇狀ノ搐搦ヲ以テ診斷上最モ重要ナル症候トス是故ニ前驅徴トシテ間代性ノ痙攣ヲ將來スルヿアリ

口蓋及ヒ咽頭諸筋ノ麻痺ニ因テ嚥下困難ヲ將來スルヿアリ又タ舌体ノ麻痺ニ因テ神經性ノ喑啞ヲ起コスヿアリ或ヒハ當初昏睡ノ症候ヲ發シ漸々醒覺スルモノニアリテハ偶

マ頑固ナル吃逆ヲ發スルヿアリ

尿中ニ蛋白質或ヒハ糖分ヲ現出スルヿアリ

經過、時期及轉歸

既ニ徴候ノ條下ニ於テ詳說シタルカ如ク華魯里氏橋或ヒハ延髓ニ於テ出血シタル徑路ヲ撿出スルヲ得ヘシ

死ヲ致スハ數分時間ニ過キサルヿアリ或ヒハ二三時間ヲ要スルアリ或ヒハ數日ヲ經テ斃ルヽヿアリ

前輩原因ノ條下ニ於テ記載シタルカ如キ障害ヲ被ムルモノニアリテハ回復ニ趨クモノ頗フル稀レナリ

偶マ一部ノ回復ヲ起コスヿアルトキハ出血部ヨリ下部ノ運動機ニ於テ萎縮性ノ變狀ヲ發スヘシ

腦神經ノ分布スル諸筋ニ麻痺ヲ起ストキハ數日ニシテ電氣性ノ収縮力ヲ失スルヿアリ

診斷

華魯里氏橋ノ出血ニ基因スル昏睡及ヒ感覺遲鈍症ト阿片又ハ亞爾個兒ノ中毒症トヲ鑑別スルヿ頗フル困難ナリトス何ントナレハ一方ニアリテ現出スルモ他ノ症ニ於テ敢如スルカ如キ症候ヲ撿出スルヿ能ハサルヲ以テナリ然リト雖モ病症ノ全体ニ於テ諸般ノ前驅症ヲ參照スルトキハ正確ナル診斷ヲ下タスニ於テ困難アルヿナシ

頭蓋内患側ニ於テ頭顱及ヒ眼球ノ變狀ヲ起コシ反對側ニ麻痺ヲ發スルカ如キハ腦出血ノ特徴ニシテ阿片或ヒハ亞爾個兒ノ中毒症ニ於テ見サル所ナリ

阿片或ヒハ亞爾個兒ノ中毒症ニ於テハ搐搦ヲ發スルヿ鮮ナシ雖モ延髓ノ出血ニアリテハ普通ノ症候タリ

出血症ニアリテハ屢々瞳孔ノ縮小ヲ見ルト雖モ阿片中毒ニ於テ曾テ見ルヿナシ

感覺閉止ノ期ニ於テ腦出血ト延髓或ヒハ華魯里氏橋ノ出血トヲ鑑別スルヿ頗フル困難ナルヿアリ而レモ延髓或ヒハ華魯里氏橋ニアリテハ搐搦、嘔吐及ヒ呼吸ノ變調ヲ呈スルヿ多シ爾後腦神經ヲ侵蝕スルトキハ麻痺ノ症候ヲ現出スヘシ假令ヘハ口蓋麻痺、嚥下困難、吃逆及ヒ排尿ノ變調ニ依テ容易ニ診斷スルヲ得ルカ如シ

治則

延髓或ヒハ華魯里氏橋出血ノ治法ハ腦出血ト異ナラサルヲ以テ讀者其條ヲ參觀スヘシ

○延髓及華魯里氏橋内脈管之阻塞症

本症ニ於テ侵カサルヽ所ノ脈管ハ脊椎動脈及ヒ基礎動脈ナリ阻塞ヲ將來スルモノハ血塞及ヒ栓塞ノ二種ナリ而シテ其病理上ノ結果ハ既ニ腦内阻塞症ノ條下ニ於テ詳説セリ

病原論及徴候

脊椎動脈ノ阻塞症ニ於テ直接ノ関係ヲ起スモノハ急劇ノ充血ニシテ感覺閉止スルモノアリ或ヒハ否ラサルモノアリ

舌体、口蓋、咽頭及ヒ喉頭諸筋ノ麻痺ヲ起コシ又タ顔面諸筋ノ萎弱ヲ發スヘシ

偶マ第三對(動眼神經)神經ノ分布スル所ノ眼窩諸筋及ヒ咀嚼筋モ亦タ麻痺ヲ起コスヿアリ而シテ呼吸及ヒ心臟ノ運動共ニ頗フル不整ナルモノ多シ

四肢ノ麻痺ヲ起スヿアリト雖ヒ通常左側ノ脊椎動脈ヲ阻塞スル多キカ故ニ半身不遂ヲ將來スルヲ以テ普通ノ症候トナセリ而シテ必發ノ症候ト見做スヿ能ハサルモ同一ノ部位ニ於テ知覺機能モ亦タ減少スルヿアリ

患部ニ於テ血液ヲ受容スルヿ能ハサルトキハ其官能ヲ制止スルカ爲メニ突然死ヲ致タスコトアリ又タ當初急劇ナル震盪症ヲ終ハルノ後萎弱ヲ起コシタル四肢ニ攣縮ヲ發シ終ニ梗強トナリ數年間依然トシテ治セサルコトアリ

基動礎脈ノ阻塞ニ因テ起ル所ノ症候ハ兩側ニ共ニ發現スヘシ而シテ舌咽頭神經及ヒ迷走神經ノ麻痺スルヲ以テ同時ニ急劇ナル呼吸困難及ヒ炭酸中毒ニ基因スル所ノ症候ヲ現出スヘシ

當初發スル所ノ症候ニ依テ斃レサルトキハ四肢ノ麻痺ヲ貽コスモノ多シ

本症ノ治則ハ腦内ノ脈管ヲ侵蝕スル所ノ他ノ諸症ト異ナルヿナシ

○急性延髓炎 原名 アキユート インフレメーション オフ メダルラ ACUTE INFLAMMATION OF MEDULLA.

病原論

延髓ノ炎症ニ因テ來ル所ノ變狀ハ腦質ノ炎症ト同一ナリ故ニ當初充血シテ蛋白質及ヒ纖維素ヲ混スル所ノ漿液狀ノ滲出物ヲ生シ白血球ノ轉移及ヒ赤血球ノ紫班ヲ現出シ神經元質ノ分裂ヲ將來スヘシ而シテ神經結締纖ノ變狀ハ細胞ノ增殖ニメ軟化ノ点ヲ生スルモノナリ

徴候

炎症ハ頗フル急劇ナル增進ヲ起コシ病初ノ徴候ノ如キハ突然劇烈ナル頭痛、眩暈、惡心及ヒ嘔吐ヲ發シ吃逆ノ症狀歇止スルヿナク嚥下頗フル困難ニシテ言語モ亦タ調節ヲ失スヘシ然リ而シテ毫モ卒中狀ノ症候及ヒ摘顫ヲ將來スルヿナシ

延髓ハ狹少ナル部位ニアリト雖ヒ頗フル重要ナル數多ノ中樞ヲ含蓄スルモノナリ故ニ

其症候モ亦タ一様ナラサルヲ知ルヘシ

肺胃神經ノ梜質ヲ蝕侵スルトキハ呼吸ヲ障害スルヿ甚タシク蒼身症及ヒ炭酸中毒ノ症狀ヲ呈シ心臟ノ作用不整ニシテ疾數微弱トナルヲ見ル

通常四肢ニ麻痺ヲ起スト雖モ輕重ノ度ニ至テハ一様ナラス故ニ半身不遂ヲ將來スルヿアリ或ヒハ四肢共ニ萎弱ヲ起コスヿアリ而レモ知覺機ヲ侵カスヿ甚タシカラサルナリ

諸筋ノ強直性痙攣又タハ搐搦ヲ發スルヿナシ

病機增進ノ度ハ頗フル疾速ナルヲ常トス故ニ嚥下困難ノ如キハ殆ント極度ニ達シテ全ク食物ヲ廢絶スルニ至ル而シテ呼吸ノ作用モ亦タ不整トナリ炭酸中毒ノ症狀增劇スルニ從テ昏睡ノ狀ニ陷リ終ニ呼吸ノ欲乏ニ因テ斃ル

診斷

實際上恐水病ト診定シタルモノニ於テ屢々急性延髓炎ナリシヿヲ發見スルヿ鮮ナカラサルナリ

延髓ノ炎症ト血塞及ヒ栓塞症トヲ鑑別スルヿ頗フル困難ナリ此諸症ハ延髓ニ屬スル所ノ重要ナル中樞機及ヒ神經ノ變調ニ基因スルヲ以テ共ニ同一ノ症候ヲ現出スト雖モ特リ延髓炎ニアリテハ脈管ノ阻塞ニ依テ起ル所ノ卒中狀ノ症候或ヒハ搐搦ヲ誘發スルヿナキヲ以テ診斷スヘシ

釋義

○慢性延髓炎 原名 コロニック インフレメーション オフ メダルラ CHRONIC INFLAMMTION OF MEDULLA.

本症ハ「トロシュー」氏ノ解釋ニ據テ舌唇喉頭麻痺ノ名義ヲ以テ通用スルモノ多シ故ニ此文字ハ其症候上最モ重要ナル点ヲ指命シタルモノヲ知ルヘシ

又タ「ダチン子」氏ハ舌唇軟口蓋諸筋ノ增進麻痺ト稱セリ而シテ「レーデン」氏ハ增進萎縮性ノ延髓麻痺ト號ツクルヲ以テ適當トナセリ

疾患ノ部位及ヒ本性ヲ詳明スル所ノ名義ハ慢性增進延髓麻痺ト稱スルニ若カス是レ即「ワツシマウス」氏ノ發論セシ所ニシテ「エルブ」氏ノ如キハ專ラ之レヲ應用セリ

原因

本症ノ原因ハ頗フル不明ナルモノトス

男女ヲ以テ比較スルトキハ男子ヲ侵カスヿ多ク又タ年齡ヲ以テ論スルトキハ老人ヲ襲フヿ多クシテ四十歲以下ノモノニ至テハ殆ント鮮ナシ

大家「ダチン子」氏ノ說ニ據レハ本症ノ原因トナスヘキモノハ寒冷頸部ノ打撲ニ因スル震盪、僂麻質斯、第三期黴毒及ヒ精神過勞ナリト云フ又タ「フレードレース」氏ノ如キハ屢々增進性筋萎縮症ヲ併發スルヿ多シト云フ

病理的解剖

肉眼ヲ以テ視ルトキハ唯タ外部ノ變狀ヲ呈スルニ過キサルナリ故ニ患部ヲ截斷スレハ變色シテ暈暗トナリ延髓ノ全体ニ於テ萎縮シタルヲ見ルヘシ或ヒハ健

態ニ比スレハ稍々硬軟ノ度ヲ異ニスルヿアルノミ

精密ナル診斷ヲ下タサント欲セハ必ラス顯微鏡上ノ檢査ニ依ラサルヘカラス

延髓ノ疾患ハ内眼ヲ以テ視ルヒハ頗フル不明ナリト雖ヒ患部ヨリ來ル所ノ神經（殊ニ舌下神經及ヒ顔面神經ヲ以テ最トス）ニ於テ著ルシキ變狀ヲ呈スルモノナリ

本症ニ於テ實驗家カ一般ニ信任スル所ノ變狀ハ腦内側室ノ中葉部ニ於テ神經節細胞ノ萎縮症及ヒ變質症ヲ誘起スルニアリ

患部ノ脈管膨大シテ空虛トナリ夥多ノ澱粉樣体其他舌下神經檢ノ細胞ト成形機充盛ニ因テ發生シタル神經結締織ノ過剩シタルモノ及ヒ色素トノ擬聚シタルモノヲ見ル而シテ固有ノ神經細胞ハ破壞シテ消滅スヘシ故ニ大ニ全体ノ容積ヲ減少スヘシ

神經ノ根基及ヒ神經幹モ亦タ甚タシク變狀ヲ呈シ其神經纖維ハ脂肪變質ヲ起コシ神經鞘ニハ硬結ヲ生スヘシ

舌下神經ノ檢質ニ於テハ其變狀最モ增進スルヲ見ルヘシ之レニ次クモノハ脊椎神經及ヒ迷走神經ナリ而シテ顔面神經及ヒ舌咽頭神經モ亦タ多少障碍ヲ被ムルモノ多シ加之ノミナラス「クラーク」氏ノ說ニ據レハ第五對神經ノ檢質モ侵カサルヽモノトナセリ

腦及ヒ脊髓ニモ同一ノ變狀ヲ起スモノ多シ「クラーク」氏カ實驗セシ一患者ノ如キハ脊

髓ノ全長ヲ侵カシ且增進性ノ筋萎縮症ヲ誘發セリト云ラ

徵候

病機侵襲ノ症狀頗フル隱微ナルモノトス故ニ當初後頭部ニ於テ頭痛ヲ感タヒ且眩暈ヲ起コシ嚥下セント欲スルヒハ將サニ絶息セントスルカ如キ感覺アリ之レニ加フルニ俄然言語ノ困難ヲ發スルモノナリ

聲音ヲ失スルヿナシト雖ヒ口蓋ノ麻痺ニ因テ鼻聲ヲ帶フルモノ多キノミナラス舌唇ノ諸筋ニ於テ其作用ヲ失スルカ爲メニ鎖口筋ノ發音機ヲ妨クルヲ以テ言語頗フル不明ナルヲ常トス

舌体ヲ突出スルヿ能ハサルノミナラス現然萎縮シタルヲ見ルヘシ

飲食ニ際シ咀嚼シタル食物ハ齒牙及ヒ頰部ノ近傍ニ凝集スルモ舌体ヲ以テ排除スルヿ能ハサルヲ以テ手指ヲ挿入シテ其作用ヲ扶クルニ至ル

唇筋弛垂シテ運動自在ナラサルヲ以テ患者常ニ流涎ヲ起コシ味感モ亦タ缺乏シ或ヒハ全然消失スルヿアリ

患者食物ヲ咀嚼スルモ之レヲ咽頭ニ輸送スルハ頗フル困難ナリ故ニ強ヒテ嚥下セントスルヒハ咬嚙及ヒ窒息狀ノ發作ヲ起コシ液体ノ如キハ鼻竅ヲ經テ逆流スヘシ

口蓋及ヒ咽頭部共ニ感覺減少スルヲ以テ其部ヲ刺戟スルモ反射的運動ヲ興起スルヿ能

ハサルモノナリ殊ニ軟口蓋ノ如キハ運動スルヿナク弛垂シテ口峽ヲ被包スルニ至ル

既ニ此期ニ達スルヿハ患者ノ症狀自ツカラ現然タリ假令ヘハ眼球以下顔面ノ諸筋悉ト

ク麻痺ヲ起コスノミナラス口唇モ亦タ然リ故ニ嗤笑及ヒ唾痰ニ際シテ筋肉ノ運動自在

ナラス容貌自ツカラ活潑ナラス言語ニ鼻聲ヲ帶ヒ唇音ヲ發スルヿ難ク嚥下ニ際シ哽氣(ムセヲ)

ヲ發シ易ク甚タシキハ鼻竅ヨリ逆流スルヿアリ既ニ斯ノ如キ症徵ヲ呈スルヿハ何人ト

雖モ其診斷ヲ誤マルヿナカルヘシ

患者ノ知力才能共ニ依然トシテ變スルヿナク又タ病前ニ比スレハ感動ヲ起シ易キカ如

キ症徵ヲ呈スルヿナク自ツカラ其症狀ヲ悟ルモノハ稀ナルモノトス

增進性ト稱スルモノニアリテハ前ニ記スル所ノ諸症候共ニ益々增惡シ言語不明ニシテ

嚥下益々困難トナリ唾液ノ性狀粘膠ニシテ其量ヲ增加シ患者手巾ヲ以テ屢々之レヲ拭

除スヘシ又タ症ニヨリテハ最モ恐ルヘキ症狀ヲ發スルヿアリ

病機蔓延シテ肺胃神經檢ニ波及スルヿハ喉頭諸筋ノ麻痺ヲ起コシ聲音幽微ニシテ粗糙

トナリ忽チ失聲スルヿアリ呼吸筋ノ作用モ亦タ頗フル微弱ニシテ肺臟ノ瘀鬱ヲ營マヿ

能ハス常ニ呼吸困難ヲ覺エ且咽喉ニ粘液ノ凝塊ヲ生スルヿハ窒息狀ノ發作ヲ將來シ噴

嚏、咳嗽或ヒハ嚥下セント欲スルヿ若シクハ喉頭ニ食物ノ箝入スルヿアルヿハ亦タ同一

ノ發作ヲ來タスヘシ同時ニ心臟ノ作用不整ニノ微弱トナリ且心臟部ニ壓重ヲ覺ユヘシ

此期ニアリテハ患者苦悶ニ耐エスシテ真ニ憐レムヘキ症狀ヲ現出スルモノ多シ

精神常ニ爽明ナルモ嚥下困難ナルカ爲メニ生力虛脫スルヿ甚タシク消化機ノ如キハ敢

テ障碍ヲ被ムルヿナキヲ以テ患者常ニ飢餓ニ因シムモノナリ

此期ニ於テ俄然心臟ノ虛脫ヲ致スヿアリ或ヒハ異物ノ停滯ニ因テ肺炎ヲ發スルヿアリ

或ヒハ益々飢餓ノ症狀增進スルヿアリ

知覺ハ脫失スルヿナキヲ常トス當初電氣性ノ收縮力ヲ減スルト雖モ忽チニシテ「エル

ブ」氏カ稱スル所ノ變質性ノ反應ヲ呈スヘシ

病機增進シテ萎縮症ヲ發スルヿハ電氣性ノ收縮力ヲ脫失スルヿアリ

脊髓ニ於テ同一ノ變質ヲ起コシ增進性ノ筋萎縮ヲ現出スルヿ鮮ナカラス

軀幹及ヒ四肢ノ諸筋ニ麻痺ヲ起コシ攣縮ヲ併發スルモ萎縮症ヲ見サルヿアリ是レ恐ラ

クハ併發症ニ基因スルモノナラン

經過、時期及轉歸

本症ノ經過ハ增進性ニ來ルモノナリ故ニ病初ノ徵候頗フル輕

微ナルモ漸々增進シテ恐ルヘキ症狀ヲ呈スルモノ多シ

偶マ中途ニシテ病機增進ノ度ヲ歇止スルヿアリト雖モ暫時ニシテ再ヒ增劇スヘシ

本症ノ轉歸ハ五歳以下ノ小兒ニアリテハ不幸ナリトス

僥倖ナルモノニアリテハ續發症ノ爲メニ本病ノ機ヲ轉換スルヿアリ而シテ續發症ハ多ク肺炎ナリ其外併發スル所ノ諸症ハ增進性筋萎縮又タハ脊椎ニ於テ同一ノ病機ヲ起コシ且筋肉ニ於テモ亦タ然リ故ニ疾患ノ部位ヲ異ニスト雖ヒ其病機ニ至テハ共ニ同一ナルモノト見做スヘシ

診斷

延髓ノ疾患ハ其部位ニ據テ特殊ナル官能上ノ變調ヲ現出スルカ故ニ他ノ局處諸病ト誤認スルヿ鮮ナシ

增進性延髓麻痺ト誤診スヘキモノハ脈管ノ阻塞症、急性延髓炎及ヒ囊腫ナリ

脈管ノ阻塞症及ヒ延髓炎ニアリテハ突然急劇ナル症候ヲ呈シ間マ卒中症ニ類スト雖ヒ增進性延髓麻痺ニアリテハ斯ノ如キ症候ヲ現出スルヿナシ

延髓及ヒ畢魯里氏橋ノ囊腫ニアリテハ諸症候共ニ漸々增進スルモノナリ故ニ當初刺戟ノ徵候ヲ呈シ尋テ抑壓ノ症狀ニ陷ルモノナリ然レヒ延髓麻痺ニ於テハ病初ノ症候不明ナリト雖ヒ刺戟ノ徵ナク直チニ抑壓ノ症狀ヲ現出スヘシ

囊腫ニ於テ硬腦膜靜脈竇ヲ壓排スルカ爲メニ網膜靜脈ノ廓大ヲ起コシ眼瞼浮腫及ヒ顔面靜脈ノ緊張ヲ來スヘシ是レ即チ延髓麻痺ニ於テ見サル所ノ徵候ナリ

治則

英國ノ大家「チードル」氏ハ多量ノ沃度加里ヲ投シテ全治シタルモノヲ報告セリ而レヒ其患者ハ必ラス黴毒性護膜腫ニ基因セシモノナラン何ントナレハ沃度加里ハ本症ノ病機增進ヲ制止スルノ効力ナキヲ以テナリ

電氣療法ハ最モ効驗ヲ現ハスモノヽ如シ其方法タルヤ固定シテ用フルキハ顳顬骨乳頭突起ノ部ニ發電基ヲ措キ感傳基ヲ反對側ノ部ニ置クヘシ而シテ口唇、舌体及ヒ口峽ニ接シ屢々持長スヘシ

電氣力ノ強弱ハ患者ノ症狀ニヨリ輕微ノ眩暈ヲ起コシ且微弱ナル光線ヲ發スルヲ以テ程度トスヘシ

電氣療法ニ次クモノハ水治法（冷水浴、又ハ發汗劑ヲ投シテ皮膚ノ機能ヲ催進スルヲ云フ）ナリ又タ冷水ニ蘸シタル布巾ヲ取リ毎夜頸圍ヲ捲縛シ且毎日五分時間項窩ニ温溜法ヲ施コスヘシ而レトモ海綿ヲ温湯ニ浸シ數分時間頸後部ニ貼スルヲ良トス

水治法ヲ用フルキハ毎日芥子泥ヲ用ヒテ以テ其効力ヲ助クヘシ

以上ノ諸法ヲ施コスモ効驗ナキキハ内服藥ヲ投スルモ徒勞ニ屬スルモノ多シ

近今本症ニ於テ格魯爾金ヲ内用スルモノ頗フル多シ又タ重格魯爾化水銀モ同一ノ効驗アリ

金及水銀ノ塩類ヲ稱用スルハ結締組織ノ過剰ヲ制止スルノ効力ニ基因スルモノヽ如シ

鉛其他ノ鑛屬モ亦タ同一ノ症候ヲ呈シ微毒ニアリテハ同一ノ効驗アルカ故ニ增進性ノ延髓麻痺ニ於テモ病初ニ多量ノ沃度加里ヲ投スルヽハ必ラス其作用ヲ現ハスヘシ而ル後其効驗ニ因テ持長スルヲ良トス

病初ヨリ全身ノ營養ニ注目シテ病機增進ノ機ヲ遲延セシムルヲ勉ムヘシ

口蓋ノ麻痺ヲ將來スルヽハ液体ニ比スレハ泥軟ナル固形物ヲ嚥下スル丁容易ナルモノ多シ又タ嚥下頗フル困難ナルヽハ滋養液ヲ取リ直腸ヨリ注射スヘシ俗間ニ之レヲ滋養灌腸ト稱ス

動物ノ血液ヲ取リ纖維素ヲ除却シテ之レヲ注射スルモ可ナリ

○脊椎膜及脊髓諸病

○脊椎充血 原名 ハイペルミヤ HYPERAEMIA.

釋義

脊椎膜及ヒ脊髓ニ供給スル所ノ血液ハ同一ノ脈管ヨリ來ルカ故ニ充血ヲ起スヽハ同時ニ兩處ヲ侵カスモノ多シ

本症ノ條下ニ於テ記スル所ノモノハ特リ脊髓ノミナラス脊椎膜ノ充血モ亦タ含蓄スルモノト見做サヽルヘカラス

本症ニ於テ實性充血(即チ動脈充血)及ヒ虛性充血(靜脈充血)ノ二種アリ

原因

充血ハ炎症ノ初起ニ於テ來ルモノナリ而シテ天然痘、腸垤扶斯及ヒ間歇熱ニ於テ一原因トナルコトアリ

本症ハ脊椎ノ官能ヲ營爲スルノ際之レヲ衝動スル丁過激ナルカ爲メニ發スルモノナリ假令ヘハ起立若シクハ歩行經久ナルカ如キ又タハ房事過度ナルカ如キ皆ナ之レカ原因タラサルハナシ

又斯篤剌幾尼涅「ピクロトキシン」(植物類塩基ノ一種)硝酸亞彌兒及ヒ酒精暴飲ノ如キ脊髓ノ毒物ニ因テ充血ヲ將來スルコトアリ

痔血又タハ月經ノ如キ常習出血ヲ歇止スルトキハ脊椎ニ供給スル所ノ血量ヲ増加スヘシ
常ニ最モ多數ヲ占ムル所ノ原因ハ身体ヲ温煖ナラシメ發汗ノ狀ヲ呈スルモノ俄然寒冷
及ヒ濕潤ニ暴觸スルニアリ
創傷若シクハ震盪ニ因テ充血ヲ將来スルコトアリ
大家「バート」氏カ實驗セシ所ニ據レハ壓縮シタル稠密ノ空氣中ニ於テ燥作スル所ノ工
夫ハ脊髓管内ノ血液ニ於テ窒素ノ溶解及ヒ放散ニ因テ充血ヲ起スヿアリト云フ
虛性充血ハ心臟及肺臟ノ阻塞症、肝臟ノ硬結症又ハ腹部ノ囊腫ニ基因スルモノナリ

病理的解剖

實性充血ニアリテハ健体ニ於テ目擊スルヿ能ハサル所ノ微細ナル脈
管膨大シテ明亮トナルヘシ故ニ脊椎膜及ヒ脊髓共ニ現然充血ノ症狀ヲ呈スヘシ
患部ヲ截斷スルトキハ健態ニ比スレハ多量ノ血液ヲ流泄シ毛細管ノ破綻ニ基因スル所ノ
夥多ノ滲漏性血斑ヲ現出スヘシ
脊髓ハ其量ヲ増加シ且血液ヲ混スルカ爲メニ多少赤色ヲ有スルモノナリ
虛性充血ハ一層明亮ナル症狀ヲ現出スルモノナリ假令ヘハ靜脈管ノ緊張スルヿ甚シク
多少腫脹狀ヲ呈スルノミナラス其容積ヲ増加シ且夥多ノ接口枝ヲ有シ頗フル微細ナル
靜脈ト雖モ膨大スルカ爲メニ帶青色ニ變スルヲ見ル

虛性充血ニアリテハ膜下溢血ヲ將来シ且脊髓液モ亦タ稍々其量ヲ増加スヘシ

徵候

本症ニ於テ現ハルヽ所ノ徵候ニ數アリ一ハ刺戟ノ症狀ニシテ一ハ抑壓ノ
徵候ナリ
病初ノ症候ハ實性充血ニアリテハ急劇ニ来リ虛性充血ニ於テハ緩慢ナルヲ常トス
背部或ヒハ腰部ニ疼痛ヲ覺エ或ヒハ同時ニ背腰兩部ニ發シテ臀部及ヒ股部ニ感傳スヘ
シ而シテ運動及ヒ皮膚ノ麻擦ニ因テ増進スルヲ覺ユヘシ
疼痛ノ性狀ハ銳急ナラス多クハ遲鈍性ニシテ壓重ヲ帶フルモノナリ
屢々下肢ニ銳痛ヲ感シ且不快ナル震戦ヲ起スヿアリ加之ノミナラス下肢ノ皮膚ハ知覺
頗フル銳敏トナリ脊髓ノ反射機能モ亦タ稍々増進スルヲ見ルヘシ
全身ノ諸筋ハ壓迫ニ因テ疼痛ヲ起コシ易ク縱ヒ靜止スルノ時ト雖モ尚ホ鈍痛ヲ感スル
ヿアリ
電氣ノ収縮力ハ健態ニ比スレハ銳敏ナルモノトス
以上述フル所ノモノハ專ラ實性及ヒ虛性充血ノ刺衝期ニ於テ現ハルヽ所ノ徵候ナリ
既ニ此期ヲ過クルトキハ直チニ抑壓ノ症狀ニ陷ヰルモノナリ而レトモ實性症ニアリテハ稍
々急劇ナルモノトス

知覺減少シテ下肢ニ麻痺ヲ起コシ自ツカラ歩行ニ惰ウク運動機モ亦タ微弱トナルヘシ

經過、時期及轉歸

實性症ニアリテハ刺衝ノ期短少ニシテ二三時ニ過キス直チニ抑壓ノ症狀ニ陷ヰリ或ヒハ未タ刺衝期ノ終ハラサルニ當テ抑壓ノ症候ヲ呈シ殆ント混亂シタルカ如キモノヲ見ルヿアリ

實性ノ時期ハ二三時ニシテ終ハルモノアリ或ヒハ二三日ニ達スルヿアリ

本症ヲ誘起スル所ノ原因ヲ除却セサル𪜈ハ諸症候モ亦タ依然トシテ持續スベシ然レ𪜈脊椎炎ヲ誘起スルヿナク實性充血ハ持續スルヿ能ハサルモノナリ

抑壓ノ機ハ脈管ヨリ液体ノ流洩ヲ起シ血班ヲ現出スルト同ジニ來ルモノナリ爾後脊髓及ヒ神經幹ヲ栓塞スルカ爲メニ大ヒニ其官能ヲ抑壓スヘシ

本症ノ轉歸ハ其原因ヲ除却スル𪜈ハ四役スルヲ常トス否ラサレハ脊髓炎ヲ繼發スヘシ

虛性充血ハ發病ノ機緩慢ナルノミナラス諸症候ノ增進スルモ亦タ頗フル徐長ナリ故ニ實性症ノ如ク活潑ナル經過ヲ取ルヿナク其時期ハ原因ノ如何ニ因テ鑑定セサルヘカラス虛性症ハ屢々輕減シテ再ヒ增進スルカ如キ症狀ヲ呈スルカ故ニ其期時ノ如キ豫定スルヿ能ハサルモノ多シ

診斷

本症ハ諸徴候共ニ輕微ニシテ變換シ易キヲ以テ強劇ナル脊髓病ト鑑別スヘシ

脊髓炎ト異ナル所ハ熱症、劇痛、攣縮、麻痺若シクハ萎落ヲ發セサルニアリ

脊髓膜炎ハ熱症及ヒ強劇ナル刺衝及ヒ抑壓ノ症候ヲ呈スヘシ

脊髓出血ハ俄カニ急劇ナル症候ヲ頓發スルニアリ加之ノミナラス刺衝ノ症候ヲ呈スルヿナク直チニ抑壓ヲ將來スヘシ

貧血症ハ全身及ヒ局處共ニ抑壓ニ基因スル所ノ諸症候ヲ現出スヘシ

治則

背部ヲ下タニシテ仰臥スルヿヲ禁セサルヘカラス強壯ナル患者ニアリテハ脊椎部ニ吸角或ヒハ水蛭ヲ貼スヘシ

俄然皮膚ノ排泄ヲ歇止スルカ爲メニ來タルモノニアリテハ發汗ヲ促カスノ目的ヲ以テ「ピロカルピン」ヲ用フヘシ

實性充血ニアリテハ脊椎部ニ氷嚢ヲ用フルヲ良トス又タ有力ナル下劑ヲ投シテ血壓ヲ減スルノ策ヲ運ラスヘシ

諸症候共ニ依然トシテ退消セサル𪜈ハ毎日一回平流電氣ヲ通スヘシ

予ハ屢々毎四時間ニ脊椎部ニ温湯法ヲ用ヒテ偉効ヲ奏セリ

實性症ニ於テ有要ナル内服藥ハ毎二時ニ雙鸞菊根丁幾ニ滴宛ヲ投スルニアリ又タ抑壓

ノ症候益々増劇スルニ非レハ實芟多利斯浸ヲ用フヘシ

予ハ實性充血ニ於テハ「ゲレセミユーム」毎四時間ニ二滴宛ヲ投シ又タ虚性症ニアリテハ毎四時ニ麥奴流動越幾斯一瓦(四、〇〇ガラム)乃至二瓦(八、〇〇ガラム)ニ實芟多利斯ヲ伍用シテ屢々卓効ヲ奏セリ

何症タルヲ問ハス治術ヲ施コスニ當テハ必ラス先ツ其原因ヲ除却スルノ策ヲ忘ルヘカラサナリ

○脊椎膜出血 (スパイナル メニンジール ヒモレージ) SPINAL MENINGEAL HAEMORRHAGE.

病原論

脊髓ノ創傷及ヒ疾患、刺傷、擣劈或ヒハ牙関緊急ノ如キ強劇ナル筋ノ燥作ニ因スル脈管ノ破綻又タハ重大ナル物品ヲ擧揚スルカ如キ燥作ニ依リ或ヒハ血友病、壞血病、紫斑病、天然痘又ハ腸垤扶斯ノ如キ出血病若シクハ傳染病ノ經過中卒然出血ヲ將来スルコトアリ

通常最モ多ク見ル所ノ部位ハ脊椎膜ノ周圍ニアル所ノ結締組織ナリ而シテ出血ヲ構生シテ硬腦膜ヲ被包スルコトアリ或ヒハ散在シタル斑点ヲ現出スルコトアリ或ヒハ硬腦膜ノ一局部ニ瀰蔓スルコトアリ

硬腦膜ノ實質ニ於テ數多ノ膜下溢血ヲ生スヘシ又タ病機增進スルトキハ血塊ヲ以テ神經幹ヲ被包スルコトアリ

蜘蛛網膜下ノ空隙ニ於テ半ハ凝結シタル血液ヲ存シ腔内ノ全部ニ瀰蔓スルモノ多シ

軟腦膜ノ網絡或ヒハ蜘蛛網膜下結締織ニ於テ脊髓ヲ圍遶スル所ノ半凝体ノ暗黑ナル血液ヲ生シ縱徑ヲ取テ二三ノ脊髓骨ヲ侵カスコアリ

出血多量ナルトキハ脊髓ヲ壓迫シ血液ノ浸淫スル部位ハ赤色トナリ軟化シテ吸収セラルヽニ至ルコアリ

脊椎液モ亦タ赤色トナリ之レヲ精細ニ檢スルトキハ其内ニ血塊ノ浮遊スルヲ見ルヘシ

結締織ノ成形機元盛トナリ腦膜ト巨大ナル色素ノ沈着物トノ間ニ癒着ヲ起コシ終ニ出血ニ因テ諸種ノ變狀ヲ將来スヘシ

脊椎出血ハ屢々腦出血ヲ併發スルコトアリ或ヒハ當初腦出血ヲ起コシ血液ノ流洩ニ因テ脊髓管ニ波及スルコトアリ

徵候

通常頻發スルモノ多ク背部ニ劇痛ヲ發シ降下シテ下肢ニ波及スルヲ覺ユヘシ又患者忽ニシテ生力虚脱スヘシ

偶マ病初ノ症候稍々緩徐ナルモノニアリテハ疼痛、知覺異常及ヒ頭痛ヲ發シ漸々下肢

ノ衰弱スルヲ覺ユヘシ

又タ稀有ノ症ニアリテハ腦及ヒ脊髓ニ於テ同時ニ出血ヲ將來スルヿアリ此時ニアリテハ患者俄然感覺閉止シテ脊椎ノ諸症候ト共ニ失語及ヒ卒倒ヲ起コスヘシ

出血ニ基因スル所ノ直達ノ疾患ヲ退消スルノ後震盪或ハ卒中狀ノ症候ヲ將來スルハ出血ノ現存ニ依テ刺衝ヲ起ス所ノ正徵タルヲ知ルヘシ

血塊ノ部位ニ近接スル脊椎ニ於テ劇痛ヲ發シ殆ント脊椎ノ全長ニ渉ルモノアリ或ヒハ一二ノ脊椎骨ノ部位ヲ限局スルヿアリ尋テ脊髓管ヲ壓迫スル所ノ神經ノ徑路ニ沿フテ感傳スヘシ

下肢ニ於テハ脊椎ノ壓迫ニ基因スル所ノ諸徵ノ症候ヲ呈スヘシ即チ下肢震戰、熱痛又タハ知覺鈍麻ヲ起スヘシ

運動神經ヲ壓迫スルトキハ諸筋ノ刺戟ヲ起コシ攣縮、強直及ヒ痙攣ヲ發スヘシ或ハ震戰又タハ局處ノ強直性運動ノ如キ症候ヲ現出スルヿアリ

脊椎ノ諸筋ハ強直ヲ起コシ軀幹ヲ屈曲シ或ヒハ廻轉セントスルトキニ當テ疼痛ヲ感スルコト多シ

刺戟ノ症候退消スルトキハ忽チニシテ抑壓ノ症狀ニ陷ヰルモノ多シ

知覺鈍麻及蟻走狀ノ感覺ヲ起コシ觸覺モ亦タ減少シテ常ニ疼痛ヲ懲フルモノ多シ

筋肉萎弱トナリ虛脫ノ症狀ヲ呈スヘシ

脊椎ノ下部ニ出血ヲ起コストキハ膀胱及ヒ直腸ノ麻痺ヲ現出スルヿアリ故ニ症候學上ニ於テ斯ノ如キ患者ニアリテハ出血点ハ背椎以下ニアルヲ判知スルニ足ルモノトナセリ

腰椎ノ部殊ニ横膈膜ノ根脚ヲ侵カス所ノ部位ニ出血ヲ起ストキハ特殊ナル症狀ヲ現出スヘシ假令ヘハ後頭、肩胛及ヒ上膊ノ諸部ニ疼痛、痙攣及ヒ麻痺ヲ起コシ瞳孔散大シテ呼吸困難トナリ嚥下モ亦タ自在ナラス脈搏微弱ニシテ徐長トナルカ如シ

經過、時期及轉歸

本症ノ經過ハ出血ノ部位、大小及ヒ併發症ノ有無ニ因テ異ナルモノトス

通常初期(卒中期)ハ數時間ニシテ終ハリ刺衝期ハ二三日ニ達シ抑壓期ハ二三月間ナルモノ多シ

出血多量ニシテ腦内及ヒ頸椎ヲ侵カストキハ卒中狀ノ昏睡ニ因テ斃ルヽヿアリ而レモ頸椎ニノミ出血スルトキハ直ニ死ヲ致スヿアリ或ヒハ呼吸及ヒ心臟ニ於テ變調ヲ起コシ一二日ニシテ鬼籍ニ上ルヿアリ

脊椎及ヒ腰椎ニ於テ發スル所ノ普通ノ症ニアリテハ漸々血塊ノ吸収ヲ起コシテ治癒ニ

過クモノ多シ

刺衝期ニアリテハ多少反應性ノ炎症ヲ起コシ之レカ爲メニ却テ抑壓ノ症狀ヲ招クニ似タリ

脊椎出血ノ經過ハ一二月ニシテ終ハルヿアリ爾後大凡ソ二月間ノ時期ヲ費ヤサヽレハ全然健態ニ復セサルモノナリ

本症ノ豫后ハ病初ノ徴候暴劇ナルト出血ノ大量ナルト刺戟ノ症候ヲ呈スルコト頻回ナルト抑壓ノ症狀ノ強劇ナルトヲ以テ危篤ナリトス

診斷

脊椎出血ハ脊椎充血、脊髓膜炎、脊髓實質内出血及ヒ脊椎炎ト區別セサルヘカラス

脊椎充血ト異ナル所ハ俄然暴發スルニアリ

脊椎炎及ヒ脊椎膜炎トヲ鑑別スルニハ熱症ヲ發セサルノミナラス病初ノ徴候急劇ナルヲ以テ明亮ナリ又タ治術ヲ施スヒキハ効驗ヲ現ハスコト速カナリ

脊椎實質内ノ出血ハ刺衝ヲ起コスヿナク突然麻痺ヲ來タシ且知覺脫失ヲ現出スヘシ

治則

第一身体ヲ安靜ナラシメ側面或ヒハ前面ヲ下タニシテ仰臥セシムヘシ

劇痛ヲ發スルヒキハ莫爾比涅ノ皮下注射法ヲ施コスヘシ曾ニ疼痛ヲ緩解スルノミナラス

精神ノ苦悶ヲ鎮靜スルノ効アリ

出血ノ歇止セサルヒキハ多量ノ麥奴元(エルゴナン)ヲ皮下ニ注入スヘシ

患者強壯ニシテ多血質ナルヒキハ刺絡ヲ施コスヘシ然リト雖ヒ既ニ止血ノ効ヲ奏スルヒキハ放血ヲ要セサルナリ

吸収ヲ促カス爲メニ下劑及ヒ實芟多剎斯ヲ與ヒ又タ「ピロカルピン」ヲ注入スヘシ

「アンモニヤ」劑ヲ持長スルトキハ大ヒニ効驗ヲ現ハスコトアリ其法タルヤ毎日三回醋酸「アンモニヤ」水一食匕ニ炭酸「アンモニヤ」十瓦(〇、六〇グラム)ヲ溶解シテ内服セシムルニアリ

反動性ノ炎症ヲ發スルヒキハ毎日脊椎ニ平流電氣ヲ通シ或ヒハ温湯法ヲ施コスモ可ナリ

又タ一回二三時間脊椎部ニ包攝藥ヲ貼スルモ可ナリ

○脊椎硬膜炎（原名 インフラメーレヨン オフ スパイナル デユラ マ ダ INFLAMMATION OF SPINAL DURA MATER.）

脊椎硬膜炎ハ硬腦膜炎ト同一ノ病機ニ因テ來ルモノナリ故ニ其術語モ亦タ同一ルモノトス

釋義

本症ニ二種アリ一ハ外因性脊椎硬膜炎ト稱スルモノニシテ專ハラ外部ノ疾患及ヒ創傷ヲ併發シ一ハ內因性脊椎硬膜炎ト云ヒ普通ノ原因ニ依テ起ルモノナリ

內因性ノモノハ最モ重要ナル關係ヲ有スルカ故ニ爰ニ記スル所ノモノハ內因性ナリ

本症ノ病機ニ二種アリ一ハ肥大症ニ因テ起コリ一ハ漿膜ヲ發生スルニアリ

病原論及徵候

同時ニ寒冷及ヒ濕潤ニ暴露シ又タハ卑濕ナル住處ヲ占ムルカ如キハ肥大性硬膜炎ヲ誘起スル所ノ最モ重要ナル原因トナルヘシ

出血性ノモノハ硬腦膜ノ血腫ト同一ノ病機ニ基因スルモノナリ而シテ麻痺狂或ヒハ暴飲家ニ於テ發スルコト最モ多シ

肥大性ニアリテハ內面ニ於テ多量ノ滲出物ヲ生シ凝集シテ緻密ナル結締組織トナリ求心性ノ層積ヲ起コスヘシ而シテ各層ノ輪狀体ハ凝結シテ脊椎ノ實質ヲ侵カシ終ニ繼發性ノ脊椎炎ヲ將來スヘシ又タ同時ニ神經ノ根脚ヲ壓縮シテ萎縮症ヲ起サシムルモノ多シ故ニ其神經ノ分布スル諸筋モ亦タ萎縮症ヲ發セサルヲ得ス

出血性ニ於テモ亦タ膜狀ノ滲出物ヲ生シ皮下ノ組織ヨリ來ルヿアルハ「リントフース ク」氏カ證明セシ所ナリ而ノ此義膜ハ非薄ナル壁ヲ有スル所ノ巨大ナル脈管ヲ有スル ヿ夥多ナルヲ以テ多量ノ出血滲漏ヲ起ストキハ膜質ノ間隙ニ貯溜シテ囊腫狀ヲ呈スヘシ

頸椎ノ肥大性硬膜炎ハ博士「チャーコット」氏カ創メテ其部位ハ頸椎ニアルヿ多キ所以ヲ證明シテヨリ爾來數多ノ學士輩ハ論議スルコト頗フル熾カンナルニ至レリ

「チャーコット」氏ノ說ニ據レハ初起ニアリテハ刺衝ノ症候ヲ呈シ同時ニ膜狀滲出物ノ機ヲ起コスモノトナセリ

初期ニ於テ現ハルヽ所ノ症候ハ頭部、頸部、肩胛部及ヒ兩膊ニ劇痛ヲ發シテ歇止スルヿナク或ヒハ却テ增ス劇ルモノアリ加之ノミナラス胸腔ノ上部ニ於テ攣痛ノ感覺ヲ併發スルコトアリ

刺衝期ハ大抵二三月ノ間ニシテ終ハリ尋テ抑壓ノ症狀ニ陷ルモノナリ

抑壓ノ期ニ迫マルトキハ上肢ニ麻痺ヲ起コシ且攣縮ヲ覺エ尋テ諸筋ノ萎縮性變質ヲ將來スルトキハ感傳電氣ヲ通スルモ電氣性ノ收縮力ヲ起スヿナシ

爾後下肢ノ諸筋ニ於テモ亦タ同一ノ變狀ヲ現出スヘシ然リト雖ヒ此諸症候依然トシテ持久スルモノハ漸々輕快シテ終ニ全治スルモノ多シ

○脊髓薄膜炎 原名 レプトメニンギチス スピナリス LEPTOMENINGITIS SPINALIS.

釋義

本症ハ同時ニ蜘蛛網膜及ヒ軟膜ノ二層ヲ侵カス所ノ炎症ヲ斥ス何ントナレハ此二層ハ病理學上及ヒ臨床實驗ニ於テ判然區別スルコト能ハサルヲ以テナリ

本症ハ急性及ヒ慢性ノ二種アリ

原因

本症ハ專ハラ男子ヲ襲フ所ノ疾患ニシテ若年及ヒ成年ノ人ニ於テ發スルヲ常トス

諸般ノ抑壓性ノ感動及ヒ術生上ニ背戻スル所ノ不攝生ハ皆ナ其發生ヲ促カスモノトス殊ニ療癒性ノ惡液質ニ陷ヰリタルモノニ於テ發スルモノ多シ

身体溫煖ニシテ發汗ノ狀ヲ呈スルモノ俄然寒冷及ヒ濕潤ニ暴露スルカ如キハ最モ有力ナル感動ヲ起スモノナリ

脊椎骨ノ穿傷、創傷及ヒ疾患モ亦タ直接ノ原因タルハ素ヨリ論ヲ俟タス

又タ近接スル所ノ組織ヲ侵蝕スル疾患ニアリテハ其連接ニ因テ脊椎膜ニ蔓延スルコト鮮ナカラス故ニ腦ノ疾患ヨリ漸々降下シテ脊椎膜ニ達スルカ如キハ日常見ル所ノ例証ナリ

又タ暑熱ノ如キ急性傳染病ノ經過中ニ來ルヿアリ

病理的解剖

當初膜質ニ於テ強劇ナル充血ヲ起コシ處々ニ血斑ヲ生シ尋イテ多量ノ液体ヲ滲出シ腫脹シテ漿液ノ浸淫スルヲ見ルヘシ

又タ稍々膿狀ヲ帶フル所ノ纖維性滲出物ヲ滴出シ之レカ爲メニ脊髓液ハ赤色ヲ呈スヘシ加之ノミナラス細胞其他纖維素及ヒ膿汁ノ分解物ヲ混スルカ爲メニ稠厚ニシテ泥軟トナリ膜質内ニ膿球ノ滲入スルヲ見ル而シテ纖維素ヨリ成ル所ノ膜狀物ヲ以テ脊髓ノ全長ヲ被包スルニ至ルコトアリ

脊椎神經ノ根脚ノ如キハ厚膜狀物ヲ以テ被包スルカ爲メニ滲出液中ニ浸シタルモノヽ如シ故ニ末期ニ至ルトキハ腫脹シテ軟化ヲ起コシ其吸収ニ因テ多少侵蝕セラルモノトス

脊椎ノ實質ハ健全ナルヿナク膜質ヲ以テ被包セラルヽヿアリ或ヒハ軟化、充血及ヒ淳腫ノ如キ變狀ヲ呈スルコトアリ

慢性症ニアリテハ膜質ノ癒着、色素ノ沈着、液体蓄積其他脊椎ノ萎縮及ヒ硬結性ノ變質ヲ將來スヘシ

徵候

病初ノ徵候ハ寒戰ヲ以テ起ルモノアリ或ヒハ其症狀ナク体溫昇騰シテ全身違和、頭痛、惡心及ヒ便秘ヲ起コシ尿液酸性ニシテ濃厚トナルカ如キハ炎症ノ初起タルヲ知ルヘシ

局處ノ疼痛ヲ發シテ殊ニ脊椎ニ感傳シ易ク頗フル強劇ニシテ深在スルカ如ク且ツ腰部背部或ヒハ頸部ニ發シ易ク脊椎ニ梗直ヲ起コシ軀幹ヲ圍達スル所ノ帶狀ノ劇痛ヲ感シ下肢ニ向テ放射スルヲ覺ユヘシ

滲出物ニ因テ運動神經ニ刺衝ヲ起コシ之レカ爲メニ患部ノ諸筋ニ痙攣狀ノ收縮ヲ來タシ下肢直腸及ヒ膀胱ニ感傳シテ閉尿ヲ將來スルヿアリ此時ニアリテハ背椎ノ下端ヨリ上方ニ蔓延スルヿナク多クハ下方ニ侵淫スルモノナリ

頸椎ヲ侵カスモノニアリテハ或ヒハ軀幹及ヒ上肢ノ諸筋ニ波及スルヿアリ或ヒハ呼吸筋及ヒ頸後部ノ諸筋ヲ侵カスヿアリ

又タ頸部ノ脊髓管ニ炎症ヲ起スキハ呼吸困難、嚥下困難、呼吸徐長又タハ心臟ノ虛微ヲ將來スルコト鮮ナカラス

脊椎ノ棘狀突起ヲ打撲スルモ劇痛ヲ發スルヿ甚タシカラスト雖ヒ身体ヲ運動スルカ爲メニ脊椎ヲ屈曲スルニ際シ劇烈ナル苦悶ヲ感スヘシ

諸般ノ運動ニ際シ諸筋ノ痙攣ヲ起コシ益々增劇スルカ如キハ診斷上重要ナル症候トス

「チャーコット」氏ノ如キハ脊椎膜炎ト牙関緊急トヲ區別スルニ當テハ皮膚ノ刺戟ニ因テ此症候ヲ興起セサルヲ以テ主要ノ徵証トナセリ

斯ノ如キ運動機ノ變調ヲ將來スルノミナラス患部ノ諸筋ニ於テ知覺機亢盛及ヒ神經痛ヲ發スルヿアリ又タ呼吸筋ヲ侵カスキハ此期ニ於テ斃ルヽヿアリ其症狀タルヤ脈搏疾數ニシテ呼吸困難ノ症狀增劇シ終ニ假死ヲ將來スルモノナリ

又タ症ニヨリテハ急劇ナル諸症候退消シテ治癒ノ初期ニ達スルヿアリ而レヒ多クハ此期ニ於テ抑壓ノ症狀ニ陷ヰリ麻痺ヲ將來スヘシ

截癱ヲ發スルモ重症ニ陷ヰルヿナク麻痺シタル諸筋ニ於テ尚ホ幾分ノ收縮力ヲ存スルモノ多シ而シテ知覺過敏ノ症候ハ依然トシテ退消セサルモノナリ

麻痺症ニ因テ便秘及ヒ尿閉ヲ起コシ尋テ小便失禁スルヿアリ

反射的運動ハ廢絶スルヿ鮮ナク多少知覺減少スト雖ヒ全然脫失スルヿナク却テ知覺過敏ノ症候ヲ繼發スヘシ

部位ニヨリテハ諸筋ノ電氣性收縮力ヲ障碍セサルヿアリト雖ヒ被患ノ部ニ近接スルモノニアリテハ其力ヲ減少シ或ヒハ脫失スヘシ

「ロセンテール」氏ノ說ニ據レハ伸筋ニ於テ萎縮症ヲ發シ且電氣性收縮ヲ脫失スルヿ多シト云フ

本症ハ通常二樣ノ經過ヲ取ルモノナリ一ハ呼吸筋ニ於テ麻痺ノ症狀ヲ起コシ終ニ炭酸

中毒ニ因テ昏睡ニ陷リテ死スヘシ偶マ体温ノ昇隆スル丶非常ナルヲ見ル丶アリ

一ハ諸症候共ニ緩慢ニシテ外觀殆ント快復ニ趨クモノヽ如シト雖モ麻痺ノ症候益々蔓延シテ昏睡ヲ發シ尿ノ排泄自在ナラス終ニ虚脱ニ因テ斃ルヽモノナリ

病機蔓延シテ延髄ニ達スルヽハ頸椎ノ脊髄膜炎ヲ起スヽニ現ハル、所ノ呼吸及ヒ心臟ノ變調ヲ呈スルノミナラス言語ノ障碍、嘔吐、視力變狀又タハ譫語ノ如キ諸症候ヲ現出スヘシ

本症ニアリテハ特殊ナル熱症ヲ呈セスト雖モ初起ニ於テ劇熱ヲ發スヘシ然レ𪜈抑壓ノ期ニ達スルヽハ退消シテ偶マ瀕死ノ時ニ臨ンテ高度ヲ頓發スルコトアルノミ

食欲乏シテ体力ノ減衰スル丶甚タシク蕁痳ヲ發シ終ニ虚脱ニ因テ斃ルヽモノ多シ

慢性脊椎膜炎ハ急性症ノ劇烈ナラサルモノニ繼發スル丶多ク或ヒハ特發性ニ來タルコトアリ

本症ハ諸症候ノ發現及ヒ退消共ニ前ニ記スル所ト異ナル丶ナク唯タ緩慢ナル經過ヲ取ルノミ

膜質肥厚シテ色素ノ沈着ヲ起コシ豆ヒニ癒着スルノミナラス脊髄ノ實質ト密着スルコト鮮ナカラサルモノトス

結締組織ノ硬結性収縮ニ因テ壓迫ヲ起コシ之レカ爲メニ脊椎神經ノ根脚ニ萎縮症ヲ發スヘシ又タ脊椎ノ後根ヲ壓塞スルヽハ後柱ニ於テ變質ヲ起コスヘシ

脊髄ノ實質炎ヲ發スルヽハ終ニ脊髄ノ索狀体ヲ破壞スルニ至ル丶アリ

刺衝期ノ徵候ハ知覺變常、諸筋ノ挽直及ヒ痙攣ヲ發シ又タ其症候ニ隱顯ヲ起ス丶アリ

腰部ニ疼痛ヲ發シテ下肢ニ感傳シ殆ント僂麻質斯ニ類シ且知覺過敏ノ症候ヲ誘起ストヽ雖モ急性症ノ如ク激烈ナラサルヲ常トス

截癱ノ症候ヲ徐發シ當初強劇ナル疲勞ノ感覺ヲ起コシ漸々衰耗シテ身体ノ上部ヨリ始マリ足蹠ニ至ルマテ知覺鈍麻、震戦及ヒ知覺脱失ヲ發スヘシ

萎弱ノ症候ハ下肢ノ諸筋ヲ侵カスノミナラス直腸及ヒ膀脱ニ波及シ終ニ上肢ヲ襲フニ至ルヘシ且兩側共ニ同一ノ症候ヲ呈スヘシ而シテ其増進ノ機ニ至テハ頗フル不整ニシテ暫時遲滯シテ再ヒ増進スルカ如シ

經過、時期及轉歸

急劇ナルモノニアリテハ數時間或ヒハ數日ニシテ斃ルヽモノ多シ斯ノ如キ症ニ於テ諸症候ノ侵淫ニ依テ頸部ノ疾患ヲ併發シ之レニ從テ心臟及ヒ肺臟ノ衰耗ヲ將來スルニ因ルモノナリ

通常ノ劇症ハ二三週日間持續スヘシ而シテ其轉歸ハ二樣アリ一ハ一二週日ニシテ呼吸

困難及ヒ心臟ノ衰耗ヲ起コシ炭酸中毒ノ爲メニ昏睡ニ陷リテ斃ルヽニアリ

一ハ二週日乃至四週日ニシテ漸々虛脫ヲ起コシ終ニ再ヒ起タヽサルニ至ル

偶マ劇症ニ罹ルモ幸ヒニシテ回復ノ轉歸ヲ取ルコトアリ此時ニアリテハ刺衝期ノ諸症候將サニ退消セントスルニ當テ稍々弛緩ノ症狀ヲ呈シ截癱ヲ將來スルコトナク漸々輕快スト雖ヒ頗フル緩慢ナルヲ以テ二三月ノ時日ヲ費ヤサヽレハ全然健態ニ復スルコトナシ

僥倖ナルモノニアリテハ數日間刺衝ノ症候ヲ呈シ忽チ輕快ニ趨キ終ニ回復スルコトアリ又タ脫汗或ヒハ利尿ヲ起コシ或ハ鼻血、月經、痔血ノ如キ排泄ニ因テ分利スルモノ鮮ナカラス斯ノ如キ症ニ於テハ全治スルコト頗フル迅速ナリ

滲出物多量ナル時ハ回復スルヿ緩慢ニシテ久シク麻痺或ヒハ跛行ヲ貽コスモノアリ

回復ノ後ニ至ルモ永遠一肢ノ不遂ヲ貽コシ或ヒハ一局部ノ諸筋ヲ侵カスヿアリ

診斷

牙關緊急ト脊椎膜炎トヲ鑑別スルニハ左ノ諸徵ニ據ラサルヘカラス

牙關緊急ニアリテハ突然齒牙ノ緊急ヲ以テ起ルノミナラス稀有ノ疾患ナリトス然レ𪜈脊椎膜炎ニ於テハ末期ニアラサレハ其症候ヲ呈スルヿナシ

病笑ハ牙關緊急ノ特徵トス又タ痙攣ノ如キモ調節ヲ失スルコトナク反射的ノ原因ニ依

テ刺戟ヲ起コスヘシ而レ𪜈脊髓膜炎ニアリテハ痙攣ノ症狀ヲ呈スルヿナク唯タ運動ニ際シ增劇スルヿアルノミ

牙關緊急ニ於テハ瞳孔ノ變症、頭蓋內神經ノ變狀、譫語又タハ熱症ヲ發スルヿナシト雖𪜈脊髓膜炎ニアリテハ悉トク其諸徵候ヲ現出スヘシ殊ニ創傷ノ如キ病歷ヲ有スルモノニ於テハ容易ニ診斷スルヲ得ヘシ

脊髓炎ニ於テハ背部ニ疼痛ヲ起コシ知覺過敏、筋肉梗直ヲ起スヿナク患部ニ截癱及ヒ知覺脫失ヲ將來スヘシ

「ロセンテール」氏ハ筋電氣ノ作用ニ於テ其神經ノ收縮力及ヒ知覺機ノ減少スルヿ甚タシキノミナラス脊髓膜炎ニアリテハ全ク脫失スルモノトナセリ

腸垤扶斯ト異ナル所ハ体溫ノ度昇隆スルコト甚タシカラス又タ刺戟ノ症候ヲ呈スルヲ以テ鑑別スヘシ加之ノミナラス腸垤扶斯ニアリテハ下痢及ヒ感覺閉止ノ症候ヲ現出スヘシ

治則

暗室內ニ仰臥セシメ勉メテ身体ヲ安靜ナラシムヘシ

刺衝機ニアリテハ脊椎部ニ水蛭或ヒハ吸角ヲ貼シ放血ノ量ハ患者ノ体質ニ因テ斟酌スヘシ

脊椎部ニ氷嚢ヲ用ヒテ佯効ヲ奏スルヿアリト雖モ最モ注意セサルヘカラス

予ハ他ノ局處療法ニ比スレハ脊椎部ニ蒸湯法ヲ施コシ或ヒハ温湯ニ浸シタル海綿ヲ以テ屢々温浴法ヲ用フルヲ以テ優レリトス

最モ有効ナル内服藥ハ雙鬚菊根丁幾二滴ニ無臭阿片丁幾五滴乃至十滴ヲ加ヒ更ニ麥奴流越幾斯十五滴乃至二十滴ヲ伍シ刺衝期ニ於テ毎二時ニ反復セシムルニアリ

疼痛激烈ナルヒハ莫爾比涅ノ皮下注射法ヲ施スヘシ

本症ニ於テ最モ主要ナル藥劑ハ阿片ノ右ニ出ルモノナシ殊ニ刺衝期ニアリテハ飲クヘカラサルモノナリ

抑壓ノ症狀ヲ將來スルヒハ幾尼涅三瓦（〇、一八ガラム）ニ莨菪越幾斯四分ノ一瓦（〇、〇五ガラム）ヲ加ヒ毎四時ニ投スヘシ

回復ノ機ニ臨ンテ諸筋ノ麻痺ヲ治コスヒハ感傳電氣又タハ平流電氣ヲ通スルヒハ大ヒニ効驗アリ

電氣流通ハ脊椎及ヒ脊椎神經幹ニ感傳セシムヘシ

急性ノ諸症候退消スルヒハ麻痺シタル諸筋ニ「ストリキニーネ」ヲ注射スルモ可ナリ

麻痺シタル諸筋ニ塗擦藥ヲ用フルヒハ大ヒニ効力ヲ顯ハスヿアリ

刺衝期ニ際シ既ニ吸角或ヒハ水蛭ヲ貼スルノ後芥子泥ヲ用ヒテ輕微ノ刺戟ヲ起コサシムルヲ要ス其用法タルヤ一日二回方四寸ノ芥子泥ヲ後頭部ヨリ薦骨部ノ間ニ於テ輕微ノ赤色ヲ呈スルヒハ直チニ除却スヘシ

抑壓期ニアリテハ脊椎部ニ遊走發泡ヲ用フルコト最モ緊要タリ

誤ツテ強刷ナル反對刺衝法ヲ施コスヒハ蓐瘡ヲ發スルノ恐レアルヲ以テ最モ戒心セサルヘカラサルナリ

慢性脊椎膜炎及ヒ頸部ノ脊椎硬膜ノ治法ニ於テ脊椎管ヨリ沈着物ヲ除却スルニハ沃度加里ノ右ニ出ツルモノナシ

沃度加里ハ常ニ大量ヲ用ヒサルヘカラス

○急性脊髓炎　原名 アキユート マイリチス ACUTE MYELITIS.

急性脊髓炎トハ同時ニ脊髓ノ諸組織ヲ侵カス所ノ炎症ヲ云フ故ニ更ニ之レヲ細別シテ脊髓實質炎及脊椎質間炎ト稱スルコトアリ然リト雖ヒ急性症ニアリテハ判然之レヲ鑑別スルヿ能ハサルモノトス

原因

本症ハ婦人ニ比スレハ男子ニ多ク又タ大人ニ比スレハ壯者及ヒ幼兒ヲ侵カスコト多シ

脊椎ノ挫傷、打撲及斷骨症其他脊椎ノ操作過久、房事過度、自發性膿腫及ヒ寒冷濕潤ニ暴觸スルカ如キハ最モ重要ナル原因タリ

近傍ノ組織ヲ侵カス所ノ炎症ニ因テ誘發セラルヽヿアリ其外脊髓膜炎、脊椎硬膜ノ創傷炎及ヒ癌腫ノ如キモノモ亦タ其原因ニ屬スヘシ

本症ハ又タ發疹埃扶斯、發疹熱、蓐熱及ヒ急性僂麻質斯ニ併發スルコトアリ

反射的截癱症ハ亦タ脊髓炎ノ例証ト見做スヘシ

病理的解剖

病初ニアリテハ強劇ナル充血ノ徵候ヲ呈シ患部ハ悉トク深赤色トナルヘシ

又タ出血滲漏ニ因テ患部ノ處々ニ帶褐赤色ノ斑点ヲ現出スルコトアリ

充血ト共ニ漿液ノ滲出ヲ起コシ之レカ爲メニ發炎部ハ濕潤シテ柔軟トナルヲ見ルヘシ

患部ノ組織褐色ナルモノ漸々黃色トナリ終ニ褪色シテ白色トナリ神經元質分離シテ脂肪ニ類シ末期ニ至ルトキハ乳糜ノ狀ヲ呈スヘシ

患部ノ脊椎モ亦タ炎症ノ蔓延ニヨリテ肥厚スルノミナラス膿球ノ滲潤ヲ被ムリ且癒着ヲ起コシ収縮スルヲ見ル

以上記スル所ハ平常肉眼ヲ以テ檢出スル所ノ變狀ナリ

顯微鏡ヲ以テ照檢スルトキハ毛細管、細動脈管及ヒ靜脈ノ膨大ヲ起コシ白血球ノ轉移及ヒ赤血球ノ紫斑ヲ現出スヘシ又神經節細胞ノ腫脹及ヒ增生其他脈管壁ノ脂肪及ヒ膠粒狀滲潤ヲ起コシ脈管ノ周圍ニ硝子樣物質ノ滲出スルヲ見ルノミナラス蜂窠組織ノ成形機充盛シ其間隙ニ於テ膠多ノ顆粒狀細胞体ヲ增生シ神經纖維モ亦タ顆粒狀トナリ分裂シテ神經ノ圓筒狀体ハ膨大シ其他神經節細胞ノ增殖及ヒ顆粒狀萎縮ヲ將來スヘシ

以上ノ病機益々增進スルトキハ健体ニ於テ存スル所ノ固有ノ元質全ク消滅シテ脂肪顆粒、肥大性神經節細胞及ヒ膨大シタル脈管ヨリ成ル所ノ凝塊ヲ殘コスヘシ

偶マ緻密ナル結締纖及ヒ漿液其他老廢物ヲ含有スル所ノ囊体ヲ現出スルコトアリ

急性ノ末期ニ於テ起ル所ノ變狀ハ神經ノ細胞及ヒ纖維共ニ全ク破壞スルニ至ルモノナ

リ而レモ亦タ此機ニ達セサル ニ當テ其病機ヲ轉化シテ慢性ニ陷ヰルヿアリ此時ニアリテハ神經節ノ成形機亢盛シ細胞膨大シテ其數ヲ增シ脈管モ亦タ肥厚スルノミナラス夥多ノ粉質狀体ヲ現出スヘシ之レニ反シテ神經元質ハ益々萎縮スルヲ常トス

脊髓中央ノ灰白質ハ疾患ノ本源ナリト雖モ周圍ニ蔓延スルコト最モ熾カンナリ

灰白質ヲ侵カスヿ甚タシキモノニアリテハ出血ノ候徵ヲ現出スヘシ又其主要ノ点ハ神經節ノ成形機亢盛ニ過キサルコトアリ

徵候

普通ノ症ニアリテハ惡寒、戰慄及ヒ發熱ヲ以テ起リ全身ノ違和ヲ覺フヘシ

又症ニヨリテハ前徵期ナクシテ卒然脊椎ノ症候ヲ發スルコトアリ

背部ニ劇痛ヲ感シ且軀幹ヲ圍繞スルカ如キ帶狀ノ疼痛部ヲ有シ脊椎ヲ打敲スルヰハ苦悶ヲ起コシ四肢ノ諸筋ニ疼痛ヲ覺エ直腸及ヒ膀胱ニ蟻痒、震戰及ヒ壓重ノ感覺アリ且陽莖強直ヲ將來スヘシ

運動機ニ於テモ亦タ同一ノ變狀ヲ起コシ震戰、攣縮、間代搐搦ヲ現出スヘシ

麻痺ノ症候ハ數時ニシテ來リ全然鈍麻シテ電氣性收縮力ヲ失スルニ至ル

又タ知覺神經ノ麻痺ヲ發スルヿアリ患部ノ全面悉トク知覺ヲ失シ屢々軀幹ノ中央ニ達スルコトアリ

暫時ニシテ括約筋ノ麻痺ヲ起スヿアリト雖モ忽チニシテ終ハルモノトス或ヒハ毫モ其症候ヲ呈セサルヿアリ

反射的作用ニ於ケル症狀ハ頗フル差異アルモノトス故ニ諸般ノ反射的作用悉トク脫失スルヿアリ或ヒハ唯タ其作用ヲ減スルニ過キサルヿアリ或ヒハ毫モ其作用ヲ害セサルヿアリ或ヒハ當初輕微ナルモ益々增劇スルヿアリ其症候ノ一樣ナラサルハ專ハラ被患ノ位置ト廣狹トニ關スルモノナリ

偶マ麻痺ノ症候一時ニ增劇シテ稽留スルカ如キモノアリ或ヒハ患部ヨリ上方ニ浸淫スルヿアリ或ヒハ横徑ヲ取テ蔓延スルヿアリ

炎症ノ浸淫ニ於テ地平ノ方向ヲ取ルヰ麻痺シタル諸筋ハ忽チ消耗ヲ起コシ暫時ニシテ蓐瘡ヲ發シ益々蔓延スヘシ

斯ノ如キ榮養上ノ疾患ハ泌尿機及ヒ生殖機ノ粘膜ニ刺衝ヲ起コスヰハ尿液ハ亞爾加里性ノ反應ヲ呈シ暴劇ナル壞爛性ノ腎盂炎及ヒ膀胱炎ヲ發スルヿアリ加之ノミナラス諸關節ニ滲出物ヲ生スルヿアリ

上方ニ侵淫スルモノニ於テ腱毛脊椎神經ノ部ニ達スルヰハ瞳孔ニ變化ヲ起コスヘシ故ニ症候上ノ中央ヲ刺戟スルニ過キサルヰハ瞳孔散大シ之レヲ破壞スルヰハ瞳孔ノ縮小

スルヲ見ルヘシ

脊椎ノ頸部ヲ侵カストキハ呼吸筋ニ麻痺ヲ起コスヘシ是レ即チ呼吸ヲ營ム所ノ筋ハ横膈膜ニ及ヒ肋間筋ニ於テ其大半ヲ扶クルヲ以テナリ故ニ諸筋ニ麻痺ヲ起ストキハ強劇ナル呼吸困難ヲ將来スルノミナラス終ニ不幸ニ陥ルモノトス

熱症ハ多數ノ患者ニ於テ統計スルモ之レヲ詳明スルヿ能ハサルナリ故ニ症ニヨリテハ病初ヨリ依然トシテ熱症ノ稽留スルヿアリト雖モ多クハ發作狀ニ來ルモノナリ或ヒハ毫モ熱發セサルヿナリ或ヒハ瀕死ノ際突然熱發スルヿアリ是レニ因テ之レヲ顧レハ到底一定ノ説ヲ立ツルヿ能ハサルカ如シ

脈搏ハ通常疾數ナリトス殊ニ頸椎ヲ侵襲スルモノニアリテハ頗フル頻數ニシテ不正ナルヿ多シ

症ニヨリテハ全身榮養ヲ害スルヿ頗フル急劇ナルヿアリ或ヒハ輕微ニシテ敢テ外貌ニ現ハレサルヿアリ

本症ニ罹ルトキハ頑固ナル便秘ヲ起コシ腸管ノ筋層ニ麻痺ヲ發スルカ爲メニ鼓脹ヲ將来スルモノ多シ

經過時期及轉歸

被患ノ部位及ヒ輕重ニ因テ諸般ノ變調ヲ呈スルモノナリ

被患ノ部位ヨリ上方ニ向テ淫侵スルトキハ速カニ呼吸筋ヲ襲フモノナリ故ニ二三日ニメ絶息スヘシ

又症ニヨリテハ榮養機ノ中樞ヲ侵カシ之レカ爲メニ巨大ナル蓐瘡、劇症ノ腎盂炎及ヒ膀胱炎ヲ繼發スルノミナラス諸関節ニ變狀ヲ起コシ三四週日或ヒハ數月ヲ經テ虚脱ニ因テ斃ルヽモノアリ

偶マ末期ニ至ラスシテ病機増進ノ度ヲ歇止シテ健態ニ趨クヿアリ然リト雖モ不治ノ障害ヲ被ムルカ故ニ諸筋ノ消耗及麻痺、攣縮又タハ関節ノ奇形ノ如キ永遠ノ變態ヲ將来スヘシ

又タ急性ノ病機轉化シテ慢性ニ陥ルヿアリ

全然健態ニ復スルモノニ至テハ極メテ稀レナリ斯ノ如キ好轉歸ヲ取ルモノニアリテハ初期ニ於テ緩解ノ症狀ヲ現出シ麻痺ノ如キハ劇烈ナラサルモノトス加之ノミナラス漸々吸収ノ機能ヲ興起スヘシ

創傷ニ基因スル所ノ脊髄炎ニアリテハ通常脊椎ト腰椎トノ関節ヨリ上方ニ發スルモノ多シ此時ニアリテ横經ヲ取リテ蔓延スルヿ甚タシキヲ以テ軀幹ヲ圍繞シテ帶狀ノ攣縮ヲ起コスヘシ其他脊椎痛、截癱、知覺脱失及ヒ膀胱麻痺ノ如キ症候ヲ發スルモ筋肉ノ萎縮

ヲ起コスヿナク反射的収縮ノ如キハ健態ニ比スレハ活潑ナルカ如シ

脛部諸筋ノ電氣性収縮力ハ依然トシテ減少セサルモノ多シ

求心性脊髓炎ハ灰白質ヲ侵襲シ且前角ニ波及スルモノナリ此症ハ突然暴發シテ増進スルコト頗フル迅速ナリ而シテ知覺機及ヒ運動機ヲ侵カシ終ニ榮養ヲ害スルニ至ル

反射的刺衝機及ヒ電氣性収縮力ヲ絶止スルコト最モ速カナルノミナラス忽チニシテ筋肉消削シ病機蔓延シテ益々上部ニ迫マルトキハ直チニ呼吸筋ノ麻痺ヲ起コシ窒息ニ因テ斃ルヘシ

出血性脊髓炎ニアリテハ麻痺ノ症候ヲ現出スルコト一層暴劇ナルモノトス

診斷

脊髓膜炎ニアリテハ刺衝ノ症候現然タリ而レトモ脊髓炎ニ於テハ頗フル不明ナリ

脊髓膜炎ト誤認スルコトアリ

脊髓膜炎ニアリテハ諸筋ノ梗直、痙攣及ヒ収縮ヲ起コシ疼痛又タハ知覺過敏ノ症候ヲ現出スト雖モ脊髓炎ニ於テハ麻痺ヲ起スヿ少焉ニシテ直腸及ヒ膀胱ヲ侵カシ易ク尋イテ知覺脫失ヲ將来スヘシ

脊髓膜炎ニ於テハ電氣性収縮力ヲ保有スト雖モ脊髓炎ニアリテハ全ク其収縮力ヲ脫失スヘシ

脊椎管内ニ出血ヲ起コストキハ俄然頓發シテ刺戟ノ症候ヲ呈シ輕微ノ麻痺ヲ来タシ電氣性収縮力ヲ保有スト雖トモ脊髓炎ニアリテハ之レニ反シテ毫モ刺戟ヲ起コスヿナク強刷ナル麻痺及ヒ筋肉ノ消耗ヲ来タシ反射的及ヒ電氣ノ収縮力ヲ脫失シ榮養上ノ變調ヲ呈スルヲ以テ正徵トス

脊髓ノ實質内ニ出血ヲ起ストキハ諸症候ノ暴發スルノミナラス熱症若シクハ他ノ全身症候ヲ呈スルヿナク直チニ麻痺ヲ將来スヘシ

治則

身体ヲ安靜ニシテ諸般ノ刺戟ヲ避ケ且ツ仰臥若シクハ側臥セシメ又全身ノ榮養ニ注意スルヿ最モ緊要ナリ

屢々脊椎部ニ温罨法ヲ施コシ其間隙ニハ脊椎ノ全長ニ達シ幅二寸許ノ芥子泥ヲ貼シ引赤スルトキハ直チニ之レヲ除却シ毎日二回宛反復スヘシ

内服藥ハ實芝多利斯浸ヲ取リ毎日四回一食匕ヲ用フルトキハ極メテ良驗アリ此藥品ハ脊椎靜脈ノ特異ナル配置ヲ有スルカ爲メニ急性症ニアリテハ麥奴ニ優レルカ如シ

体質強壯ナルモノニアリテハ局處ノ放血及ヒ下劑ヲ要スルヿアリ

充血期ヲ過キテ滲出期ニ達スルトキハ多量ノ炭酸「アンモニヤ」毎三時ニ五瓦（〇、三〇ガラム）ヲ投スヘシ

抑壓ノ期ニ達スルトキハ少量ノ幾尼涅及ヒ蓖麻越幾斯ヲ投スルヿ最モ緊要ナリ

充血期ノ初起ニ於テ幾尼涅二十瓦（一、二五ガラム）乃至三十瓦（二、〇〇ガラム）ヲ頓服セシムルトキハ偉効ヲ奏スルヿアリ

○慢性脊髄炎　原名 コロニック マイリチス CHRONIC MYELITIS.

釋義

慢性脊髄炎トハ脊髄ニ於テ現ハル、所ノ諸徴ノ變狀ヲ徴スルノ文字ナリ

其變狀ハ硬結、萎縮、灰白或ヒハ膠樣變質及ヒ軟化ナリ而レトモ軟化ハ稀有ノ變徴トス

今日ノ學説ニ據テ論スルトキハ慢性炎症ニ因テ斯ノ如キ變徴ヲ將来スルモノト斷定スルノ外他ニ詳明スキモノアラサルナリ

原因

慢性症ノ原因ハ急性脊髄炎ト異ナルヿナシ或ヒハ急性炎ヨリ轉化スルヿアリ或ヒハ創傷、挫傷及ヒ打撲ニ基因スルアリ又房事過度ニ依テ起ルヿアリ或ヒハ寒冷濕潤ニ暴露スルカ爲メニ來ルヿアリ或ヒハ常習排泄物ノ歇止スルカ爲メニ發スルコトアリ

反射的戦癱ト稱スルモノハ恐ラクハ反射機ノ變調ニ因テ起ル所ノ慢性脊髄炎ニ外ナラ

サルヘシ

病理的解剖

本症ニ於テ現ハル、所ノ變狀數種アリ故ニ肉眼ヲ以テ窺フキハ毫モ變狀ヲ呈セサルヿアリ或ヒハ現然目擊スルヲ得ルヿアリ

硬軟ノ度ハ硬結スルヿアリ或ヒハ軟化スルヿアリト雖ヒ軟化スルヿ鮮ナク其色澤ハ灰白色或ヒハ帶黄灰白色ヲ呈スヘシ是レ即チ灰白變質ノ徴証ナリ

硬結ハ一局處ニ來ルヿアリ或ヒハ瀰蔓性ニ發スルヿアリ或ハ散在性ニ現出スルヿアリ

變狀ハ脊髄中央ノ灰白質ニ限局スルヿアリ殊ニ中央ノ管溝ヲ圍繞スル所ノ部位ヲ侵カスヿ多シ或ヒハ前角ノ灰白質ニ發スルヿアリ或ヒハ側柱若シクハ後柱ヲ襲フヿアリ又タ軟膜ト共ニ脊髄ノ外圍ノミヲ侵カスヿアリ

神經根脚モ亦タ多少灰白即チ膠樣變質ヲ起スヿアリ此時ニアリテハ神經幹ニ萎縮症ヲ發シ其神經ノ分布ヲ受クル所ノ諸筋ニ於テモ亦タ萎縮性ノ變質ヲ起コシ其一部ハ脂化スルヿアリ

生殖泌尿器ノ粘膜及ヒ諸関節ニ於テ諸徴ノ榮養上ノ變狀ヲ呈シ且蓐瘡ヲ發スヘシ

顯微鏡上ノ檢査ニ據レハ神經節ノ成形機瓦盛ヲ起コシ神經纖維モ亦タ其數及ヒ容積ヲ増加シ神經細肥ハ核質ノ繁殖ヲ將来スヘシ

神經纖維ニ於ケル諸叢ノ變狀ハ腫脹分裂及ヒ脂肪ニシテ圓筒狀軸ニ於テモ亦タ萎縮及ヒ硬結ヲ生スヘシ

神經節細胞ハ萎縮シテ色素ノ沈着及ヒ硬結ヲ起シ固有ノ突起ヲ消失スヘシ而シテ其核及ヒ核狀物モ亦タ減却スヘシ

脈管ニ於テハ重要ナル變狀ヲ起コシ外膜硬結シテ核質ノ成形機充盛及ヒ脂肪ノ發生ヲ將來シテ硬結及ヒ肥厚ノ狀ヲ呈スルニ至ル

硬結シメル部ニ夥多ノ脂肪顆粒、脂肪球及ヒ澱粉樣体ノ沈着スルヲ見ルヘシ

徵候

病初ニアリテハ現著ナル症候ヲ呈スルヿナシ

通常運動機ノ變徵ニ先タチテ知覺異常ヲ呈スルモノ多シトス

諸關節ニ於テ疼痛ヲ發スヘシ其症狀タルヤ恰カモ筋僂麻質斯ニ類シ震戰及ヒ知覺脫失ヲ併發シ且稍々熱灼ノ感アリ

背部ニ疼痛ヲ起コシ軀幹ヲ捲縛スルカ如キ感覺アリ或ヒハ偶マ脊椎外膜ニ於テ知覺亢進ノ症狀ヲ呈スルヿアリ爾後運動機ニ變徵ヲ呈スルヲ常トス

患者毫モ身体ノ操作ヲ營ムヿナクシテ筋肉ノ疲勞ヲ覺エ瑣少ノ運動ヲ試ムルモ忽チニシテ劇烈ナル疲勞ヲ起コスヘシ

常ニ脛部及足蹠ニ壓重ヲ覺エ其運動モ亦タ自カラ健態ノ如ク活潑ナラサルナリ

病機增進スルトキハ知覺機ヲ抑壓シテ以テ刺衝ノ徵候ヲ歇止スヘシ故ニ尺骨神經ノ分布スル諸指及ヒ足趾足蹠ニ於テ知覺機ノ鈍麻スルカ爲メニ歩行ニ際シ室内ノ床面ト足蹠トノ間ニ襦布ヲ設ケタルカ如キ感覺アリ

大家「ロセンテール」氏ノ說ニ據レハ知覺神經ニ於テ諸叢ノ作用ヲ脫失スルヿアリ假令ヘハ當初痒癢ノ感アリ尋テ摩擦壓排及ヒ温煖ヲ覺エ終ニ疼痛ヲ發スルヿアリト云フ

知覺脫失ヲ起スノ部位ハ股部ノ前面、臀部及ヒ腰部ニアリ其他軀幹ノ下部ヨリシテ腹腔ノ兩側ニ達スヘシ斯ノ如キ症候ヲ呈スルハ專ハラ腹部中央以下ニシテ上部ニアリテハ依然トシテ健態ノ知覺力ヲ保有スヘシ

知覺脫失シタル部ニ於テ異常ノ感覺ヲ將來スルヿアリ譬ヘハ患部ニ温熱ヲ與フレハ却テ寒冷ヲ覺エ又タ寒冷ニ觸ルレハ温熱ヲ感スルカ如トシ加之ノミナラス身体ノ一部ニ感動ヲ起サシムルトキハ直チニ其部ニ起ルコトナク離隔シタル部ニ感得スルヿアリ或ヒハ全ク反對側ニ覺エルヿアリ

麻痺ヲ將來スルノ位置ハ專ハラ侵襲セラル、所ノ脊髓ノ部位ニ關スルモノナリ

体表ヨリ知覺ノ中樞ニ至ルマテ感傳スル所ノ速力ハ其傳達ノ道路ニ於ケル障碍ニ因テ

甚タシク減少スルモノナリ故ニ蹠趾ヨリ腦ニ至ルマテ感傳スルカ爲メニ數秒時間ヲ要スヘシ

麻痺或ヒハ萎弱ノ症候ハ下方ヨリ上部ニ進行スルヲ常トス或ヒハ偶マ反對ノ方向ヲ取ルコトアリ

頸椎ノ部ヲ侵カストキハ上肢ニ於テ運動及ヒ知覺ノ變調ヲ發シ瞳孔不等ニシテ肋間筋及ヒ胸廓上部ノ諸筋ニ麻痺ヲ起コシ之レカ爲メニ呼吸ノ障碍ヲ來タシ心臟ノ作用疾速微弱トナリ窒息狀ノ發作ヲ將來シ且嚥下困難ヲ發スヘシ

脊椎ノ下部及ヒ腰椎ノ上部ヲ襲フトキハ下肢、膀胱及ヒ直腸ノ麻痺ヲ起コシ電氣性収縮及ヒ反射的刺衝モ亦タ共ニ脫失スヘシ然リト雖モ背椎ノ上部ヲ侵カストキハ反射的刺衝及ヒ電氣性収縮力共ニ亢盛スルヲ見ルヘシ

麻痺シタル諸筋ニ消耗ヲ起コシ電氣性ノ反動力ヲ脫失スヘシ殊ニ離脫性ノ反動ニ先タチテ進入性ノ反動力ヲ消滅スルモノ多シ

生殖機ノ官能モ亦タ順テ減殺セラルヽヲ常トス

陽莖ノ強直ヲ起スト雖モ暫時ニシテ勃起ノ力ヲ失シ又タ夜間ニ於テ手　ヲ恣マニシ終ニ陰莖ヲ發スルニ至ル

病初ニ於テ屢々尿ノ排泄困難トナリ或ヒハ滴瀝収濇スルヿアリ或ヒハ秘閉スルカ爲メニ導尿管ヲ要スルヿアリ

腸管ノ筋層ニ萎弱或ヒハ麻痺ヲ發スルカ爲メニ便秘及ヒ鼓脹ヲ起スヘシ

本症ノ末期ニ至ルマテ榮養機能完全ナルヿ多シ而レトモ劇症若シクハ輕症ノ末期ニ於テ不眠、譫癇、尿閉又タハ膀胱炎及ヒ腎盂炎ニ基因スル所ノ反動性ノ炎症ニ因テ甚タシク苦悶ヲ將來スルヿアリ

經過、時期及轉歸

本症ハ急性症ニ繼發スルモ或ヒハ特發性ニ來ルモ其增進ノ機ハ頗フル緩慢ナリトス

病機增進スルヿ緩徐ニシテ稍々回復ノ狀ヲ呈シ更ニ再ヒ增劇スト雖モ全体ノ病機ニ至テハ漸次ニ輕減スルヲ見ルヘシ然リト雖モ患者多クハ久シク變態ヲ起コスヿナク數年ヲ經フルモ增惡ノ徵候ヲ呈セサルナリ

斯ノ如ク病勢依然トシテ增劇セサルモノト雖モ偶マ再發スルヿアルヲ以テ病勢ノ歇止シタルモノト妄信スルトキハ不測ノ患害ヲ招子クヿアリ

何症タルヲ問ハス全然健態ニ復スルモノアルヿナシ何ントナレハ一タヒ被ムリタル障害ハ永遠治スルヿナキヲ以テ回復シタルモノト想像スルカ如キハ病勢ノ歇止シタル症

狀ニ過キサルナリ

本症ノ轉歸ハ一樣ナラス膀胱炎ヲ發スルアリ腎盂炎ヲ將來スルアリ又タ蓐蒼ニ因テ斃ルヽアリ或ヒハ肺炎及肋膜炎ノ如キ疾患ヲ併發スルアリ或ヒハ病機蔓延シテ頸椎ニ達スルヿアリ

診斷

吾人カ最モ鑑別ニ於テ必要ナルモノハ病患ノ部位ト增進ノ方法トニ據テ各種ノ脊髓炎ヲ審査スルニアリ

頸椎ヲ侵カストキハ手指及ヒ臂腕ニ於テ刺衝及ヒ抑壓ノ症候ヲ呈シ又タ呼吸及ヒ循環機ノ變調ヲ起スヘシ其他瞳孔不等トナリ下肢及ヒ括約筋モ亦タ障碍ヲ受クヘシ

背椎ニ於テ腰椎ニ近接セサル部ヲ襲フトキハ肋間筋ノ麻痺ニ因テ呼吸ヲ障害シ乳房部ノ上ニ於テ捲縛セラレタルカ如キ感覺アリ其他括約筋ノ麻痺及ヒ截癱ヲ發スルヿアリト雖トモ反射的及ヒ電氣性收縮力ハ依然トシテ減少セサルノミナラス却テ增進スルヿアリ

背椎ノ症候ニ加フルニ腰部ヲ侵カストキハ反射的及ヒ電氣性收縮力共ニ脫失スルノミナラス榮養上ノ變調ヲ將來スヘシ

脊椎前角ノ多核細胞ヲ侵蝕スルトキハ之レヲ慢性脊椎前角炎ト稱ス此時ニアリテハ麻痺ノ症候ヲ發スルト雖トモ患部ニ於テ榮養上ノ變調ヲ起コシ筋肉虛脫、關節ノ變狀、蓐瘡及

膀胱炎ヲ發シ反射的及ヒ電氣性收縮力ヲ脫失スヘシ

脊髓出血ハ諸症候ノ暴劇ナルノミナラス麻痺ノ症候ヲ呈スルカ如キハ最モ迅ヤカナリ

脊椎膜炎ハ刺衝機亢進シ反射的及ヒ電氣性收縮力ヲ保有スルノミナラス熱症ヲ呈スルト雖トモ慢性脊髓炎ニアリテハ一モ其症候ヲ現出スルヿナシ

治則

初起ニ於テ病機增進ノ景況ヲ現ハストキハ身体ヲ安靜ナラシムルヿ最大要務タリ故ニ病初ヨリ二三月間ハ鞏緞ノ事業ヲ休止セシムヘシ

「エルプ」氏ノ說ニ據レハ水治法ヲ以テ最モ効驗アルモノトナセリ其法タルヤ脊椎部ニ冷水ヲ含有セル膜囊ヲ貼シ其水ノ溫煖トナルトキハ之レヲ除却スヘシ

或ヒハ冷水ニ浸シタル布片ヲ取リ背部及ヒ軀幹ニ貼スルモ可ナリ其他脊椎部ニ点滴法ヲ施コシ傍ハラ脚浴又タハ半身浴ヲ命スルモノアリ

浴水ノ溫度ハ華氏八十度以下五十度以上ヲ程度トスヘシ其時間ハ過久ナラサルヲ要ス

若シ患者反動力ヲ起スヿナク戰慄ヲ發シテ止マサルトキハ直チニ浴法ヲ停ムヘシ

水治法ニ次ク所ノ療法ハ尼爾華尼電氣ヲ通スルニアリ

電氣ハ「シーメンス」及ヒ「ハルスク」氏ノ四十基乃至六十基ヲ用ヒ巨大ナル海綿極ヲ濕潤ナラシムヘシ而シテ毎日二分時間感傳セシムルヲ以テ足レリトス

電氣療法ヲ用ヒテ効驗アルモ數月間持續スルヿナケカレ若シ之レヲ持長セント欲セハ一ヶ月中二三日ノ休憩時間ヲ設ケサルヘカラス

電氣流通ノ方向ハ敢テ必要ナラサルカ如シト雖氏予カ實驗ヲ以テスルニ血液ノ供給增加シテ榮養機整復スルヒハ下流性ノ感傳ヲ良トス

硝酸銀ヲ用ヒテ屢々良蹟ヲ備ムルヿアリ

予ハ格魯爾金ヲ投シテ偉効ヲ奏スルヲ得タリ

抑壓期ニ於テ用フル所ノ諸種ノ藥劑中予カ屢々卓効ヲ奏スルコト多キモノハ酪酸加燐酸石灰ナリ之レニ砒石ヲ伍シ同時ニ肝油ヲ用フルヲ良トス

食物ハ專ハラ澱粉ノ如キ刺戟性ヲ有セサルモノ及ヒ鷄卵ノ如キ滋養易化ノモノヲ撰フヘシ殊ニ身体ヲ安靜ナラシムルモノニアリテハ最モ注意セサルヘカラス

酒類ハ悉トク禁止セサルヘカラス

脊髓炎ノ併發症ニ於テ最モ不快ノ感覺ヲ起スモノハ尿閉ナリ然レトモ膀胱部ニ電氣ヲ通シ直腸部ニ一極ヲ措キ海綿極ヲ下腹部ニ置クヒハ良驗ヲ見ルコト鮮ナカラス

○脊髓後柱硬結 原名 ポストリオル スパイナル スクレロシス POSTERIOR SPINAL SCLEROSIS.

釋義

脊髓後柱硬結トハ脊髓炎ノ一種ニシテ横徑ヲ取ラスシテ縱軸ニ沿フテ夏延シ且後柱ニ限局スルモノナリ

增進性運動神經變調トハ本症ノ特徵ヲ詳明スルカ爲メニ「ダチン子」氏カ應用セシ所ノ文字ナリ

獨逸國ニアリテハ往古ヨリ此症ヲ指シテ脊髓勞ト稱セリ

原因

本症ノ重要ナル原因ハ遺傳素質ニアリ

遺傳素質ハ直チニ本病ニ罹リタル父母ヨリ同一ノ疾患ヲ遺傳スルモノニアラスシテ神經系諸病或ヒハ体質ニ基因スルヿ多シ

同一ノ血族ニ於テ一代ハ神經痛ヲ患ヒ二代ニ至リ癲癇ヲ發シ三代ヲ經テ運動神經變調ヲ將來スルカ如キ例証ヲ見ルヿアリ

大家「フレドリーチ」氏ハ子孫相尋テ發現シタル實例ヲ報告セリ

本症ハ偶マ同一ノ疾患ヲ遺傳スルヿアリ今マ「カルレ」氏カ報告セシ所ヲ見ルニ一血族ニ於テ三世ヲ經ルノ間二十八名ノ患者ヲ現出セリト云フ

本症ハ生活機能ノ最モ活潑ナル時ニ發スルモノトス故ニ大抵二十歲乃至六十歲ノ間ニ

アリ殊ニ三十五年ヨリ五十年ノ間ニ於テ現ハルヽモノ最モ多シトス

男女ニ就テ比較スルキハ男子ハ婦人ノ二倍ヲ有セリ

諸般ノ職業ニ於テ寒冷濕潤ニ暴露シ或ヒハ勞働ニ過キ或ヒハ精神ノ感動ヲ壓抑スルカ如キハ皆ナ本症ノ發生ヲ促カスニ足ルモノナリ是故ニ鐵道瀛閑運轉手、火夫又タハ瀛車ノ速力ヲ歇止スル雇夫ノ如キハ挫傷ニ因テ脊椎後柱硬結又タハ他ノ脊椎病ヲ發スルヿ多シ然リト雖モ斯ノ如キ原因ニ就テ吾人ハ未タ精確ナル統計又タハ實驗說ヲ見ルコト能ハサルナリ

房事過度モ亦タ本症ヲ誘起スル所ノ感動ヲ有スルカ如シ然リト雖モ非常ノ多淫家ニアリテハ脊髓ニ起ル變症ノ初徵ヲ現出スルヿアルヲ以テ其原因ト結果トヲ誤認スルノ恐レアリ

寒冷ニ暴觸シ或ヒハ感冒ニ罹リ神經系ニ於テ特異ノ症狀ヲ呈スルキハ亦タ本症ニ類スル所ノ疾患ヲ誘起スヘシ

優麻質斯ト運動神經變調トハ其原因ニ於テ頗フル親密ナル関係ヲ有スルハ疑フヘカラサル所ナリ予ハ鍍金工ニ於テ斯ノ如キ例証ヲ實驗セリ而シテ沃度加里ヲ内服セシメ諸症候共ニ退消セリ

工業ニ於テ諸種ノ鑛屬ヲ吸收スルカ爲メニ脊髓後柱硬結症ノ如キ諸症候ヲ發生スルハ日常鮮ナカラサルモノトス

病理的解剖

脊椎膜ハ健全ナルヿアリト雖モ多數ノ患者ニアリテハ脊椎後柱部ニ沿フテ軟膜ノ脈管ヲ增加シタルカ如キ症狀ヲ呈スヘシ

脊髓實質ノ形狀、色澤及ヒ硬軟共ニ變態ヲ現出スヘシ

脊椎後柱ニ於テハ萎縮症ヲ發スルカ爲メニ前後ノ直徑ヲ減少スヘシ

灰白質ニアリテハ半透明ニシテ硝子液ニ類シ琥珀黃色ヲ呈シ或ヒハ帶黃赤色トナリ隣接スル所ノ白色神經質トハ判然區別スルヲ得ヘシ

又硬軟ノ度ニ至テハ健体ニ比スレハ柔軟ナリト雖モ患部ノ增大スルカ如キヲ見ルヘシ

變質ノ廣狹ハ數多ノ患者ニ於テ一樣ナラス然リト雖モ一般ニ後根ノ間隙ヲ侵カスヿ多ク殊ニ背椎ト腰椎トノ境界ニ於テ最モ著明ナリ

偶マ脊髓尖端ヨリ寫腦ニ蔓延スルコトアリ

顯微鏡上ノ檢査ニ依テ講究シタル變狀ハ結締組織ノ成形機充盛シ固有ノ神經元質ニ於テハ顆粒變質及ヒ萎縮症ヲ發シ終ニ消滅スヘシ其他脂肪球、色素及ヒ粉質様体ノ蓄積スルヲ見ルヘシ

脊椎神經ノ後根ニ於テモ亦タ纖維狀ノ變質ヲ起コシ結締組織發育シテ神經纖維ヲ消削セシムヘシ

脊髓後柱ハ皆ナ悉トク同一ノ疾患ヲ被ムルモノニアラス故ニ腰部ニアリテハ外枝ヲ侵カシ易ク頸部ニアリテハ內枝及ヒ中枝ヲ侵カシ或ヒハ「ゴル」氏柱ヲ襲フ丨多シ

後角ノ灰白質ニ於テモ亦タ同一ノ變狀ヲ起コシ病機蔓延シテ側柱ニ達スヘシ

脊椎神經節及ヒ神經前根ハ變質ヲ起コス丨ナキノミナラス交感神經系ノ節ニ於テモ亦タ健態ヲ失ハス

視神經ニ於テ屢々灰白變質ヲ將來スル丨アリ或ヒハ偶マ動脈神經及ヒ外牽神經ヲ侵カスコトアリ

諸關節ニアリテハ最モ明亮ナル變狀ヲ呈スヘシ假令ヘハ關節部ノ軟骨ハ悉トク吸收シテ其跡ヲ止メス骨頭及ヒ關節窩ハ漸々扁平トナリ萎縮症ヲ發シ殆ント其健態ヲ失スルモノ多キカ如シ

徵候

中年ノ人ニ於テ外貌殆ント健全ナリト雖ヒ屢々軀幹、臂部、股部及ヒ脛部ニ於テ疼痛ヲ發スヘシ而シテ其疼痛ノ症狀二樣アリ一ハ頗フル銳急ニシテ電光ノ如キ疼痛ヲ發シテ關節內ニ進入スルカ如ク一ハ遲鈍性ノ疼痛ニシテ筋肉ヲ侵カスモノヽ如シ

病初ニアリテハ疼痛ハ頗發性ニ來ルト雖ヒ暫時ニシテ發作狀トナリ或ヒハ頻發シ或ハ毎日發スルコトアリ或ヒハ數週日間停止シテ更ニ再ヒ發スル丨アリ

疼痛ハ寒冷及ヒ濕潤ニ依テ增劇スヘシ故ニ冬期ニアリテハ不良ナルモノ多シ

疼痛ノ發作前若シクハ發作時ニ於テ淫慾ヲ起コスヒハ益々增惡スルヲ覺ユヘシ而シテ平素房事ヲ節スルノミナラス絕エテ交接セサルモノニシテ往々多淫トナル丨アリ

疼痛ノ發作時ハ陰慾ノ如何ニ關ハラス一樣ナラサルモノトス故ニ二三週日ニシテ治スルアリ或ヒハ數年ニ涉ルモノアリ而シテ其症狀頗フル僂麻質斯ニ類似スルヲ以テ屢々之レト誤認シ易ク專ハラ僂麻質斯ノ療法ヲ施コスモノ鮮ナカラス

疼痛ハ最初神經ノ變狀ヲ起シタル部位ニ於テ最モ強劇ナリ殊ニ下肢ニ於テ發スルモノ多シ

復視症ハ疼痛ニ尋テ現ハルヽ所ノ徵候ナリ而シテ其症候ハ突然現出スルモノニシテ大抵二三週若シクハ一二月ニシテ醫治ヲ加エサルモ退消スヘシ

復視症ヲ發スルノミナラス視力漸々衰弱シテ弱視症ヲ起コシ且視神經ニ於テ膠樣變質ヲ發スルカ爲メニ視力脫失(黑內障眼)ヲ將來スル丨アリ

既ニ此期ニ達スルヒハ當初多陰ナリシモノ却テ無慾トナリ屢々遺精ヲ發スヘシ

閨房ニ臨ンテ快樂ノ情益々薄ク交接スルモ滿足スルヿナク陽莖ノ勃起スルヿ充分ナラス精液ヲ射出スルヿ少ナク且射出ニ際シ愉快ヲ覺ユルヿナク却テ多少ノ疼痛ヲ起コシ終ニ全然陰萎症ヲ發スルニ至ル

今マ「ダチン子」氏ノ解釋ニ據テ初期ニ於テ現ハルヽ所ノ症候ヲ擧クレハ疼痛、視力變調及ヒ陰慾缺乏ノ三症ナリ

既ニ前ニ論スルカ如キ初期ノ症候ヲ呈スルノ時日一定スルヿナク數週乃至數月ノ間ニアリ爾後第二期ノ諸徴ヲ將來スヘシ

第二期ニ達スルトキハ下肢諸筋ノ知覺脫失、運動機ノ神經變調及ヒ皮膚其他筋肉ノ知覺鈍麻ヲ起コスヘシ又タ足蹠ニアリテハ知覺脫失ニ因テ歩行ニ際シ自已ノ足蹠ト床面トノ間ニ蓐布ヲ敷設シタルカ如キ感アリ

軀幹ノ周圍ニ於テハ綢帶ヲ以テ捲縛セラルヽカ如キ感覺アリ又タ諸関節及ヒ股部ニ於テハ恰カモ鐵甲ヲ被ムリタルカ如シ

銳急ナル電光ノ如キ疼痛モ亦タ益々増劇スルヿ多ク其外倶覺ノ如キハ頗フル減少スルヲ以テ倶覺試撿器ヲ以テ撿査スルトキハ器脚ノ距離最モ大ナルニアラサレハ其二脚ノ倶点ヲ感得セサルヘシ

刺衝ノ感覺益々減少シ知覺ノ中樞ニ達スルトキハ疼痛モ亦タ順テ減少シ或ヒハ全ク消失スルヿアリト雖モ斯ノ如キ例証ハ破格ニ屬ス其他壓迫及ヒ温熱ノ感受力モ亦タ減殺スヘシ

運動機ニ於テ吾人ハ撿出スル所ノ特徴ハ當初諸関節ニ於テ輕微ノ操作ニ疲勞ヲ起コシ運動不全ナルヲ以テ運動ニ際シ歩行躊躇トシテ恰モ泥醉者ノ如シ故ニ他人ヨリ之レヲ見レハ從前酒ヲ嗜マサルモノ俄カニ其品行放恣トナリタルヲ疑フニ至ルヘシ

偶マ道路ニ於テ車馬ニ近接スルトキ又タハ平滑ナル大理石ヲ敷設セル床上ヲ歩行スルトキ或ヒハ暗室内ヲ歩行スルトキニ當テ仆者ニ依テ扶持セラルヽニアラサレハ身体ヲ安全ニ運動スルヿ能ハサルヘシ

神經性ノ變調益々増劇スルトキハ患者眼目シテ起立スルヿ能ハス歩行スルトキハ足趾ハ外上方ニ向ヒ地ヲ踏ムノ部ハ唯タ足踵ヲ以テスルノミ

全身諸筋ヲ撿査スルトキハ神經系ノ變調ニ因テ運動機不整トナルヲ見ルヘシ故ニ病初ニアリテハ筋肉ノ軟弱ヲ起サスト雖モ全然筋力ノ弛緩スルト同時ニ強劇ナル神經ノ變調ヲ發スヘシ然レモ暫時ニシテ一部ノ諸筋ニ衰弱ヲ起コシ終ニ麻痺ヲ將來スルノミナラス消耗スルヲ見ルヘシ

病初ニアリテハ視力ノ保分ニ因テ逍遥スト雖モ暫時ニシテ杖ニ寄ラサレハ行クヿ能ハス又タ一層増劇スルキハ兩手ニ杖ヲ握リ終ニ全ク歩行スルヿ能ハサルニ至ル

「ダチン子」氏カ斷定セシ所ノ第三期ニ達スルキハ知覺及ヒ運動機ノ變調共ニ蔓延シテ以テ上肢ニ波及スヘシ而シテ諸症候ノ現出スル順序ヲ舉クレハ左ノ如シ

當初尺骨神經ノ部位ニ於テ疼痛及ヒ知覺鈍麻ヲ覺エ尋テ諸指ニ蔓延シテ協同作用ヲ害シ之レカ爲メニ食時ニ於テ食刀及ヒ肉叉ヲ用ヒ或ヒハ衣服ヲ着スルニ當テ扣鈕(ボタン)ヲ箝入スルヿ能ハサルニ至ル

反射機ニアリテハ其變狀一様ナラス或ヒハ健態ニ比スレハ却テ増劇スルヿアリ或ヒハ減少スルヿアリ或ヒハ全ク欠乏スルヿアリ殊ニ膝蓋骨ノ腱ハ反射機能ヲ消失スヘシ

電氣性收縮力モ亦タ増劇スルヿアリ或ヒハ平素ト異ナラサルアリ或ヒハ筋肉ニ變質ヲ起スキハ減少シ或ヒハ全ク消滅スヘシ

病機増進ノ際ニアリテハ有機的官能ヲ營爲スルコト健全ナルモノ多シ

患者ノ顏面薔薇色ヲ呈シテ揚々自得スルモノヽ如シ故ニ醫家竊カニ酒ヲ嗜ムモノト臆測スルコト鮮ナカラス

食思欠乏スルヿナク榮養機能モ亦タ活潑ナリ

精神上ノ作用ヲ障碍スルヿ鮮ナク假令ヒ精神ニ於テ辭屈ニ耐エサルヿアルモ行爲ニ於テ滿足スルモノヽ如シ

爰ニ最モ注目スヘキ特徴ト見做スヘキモノハ足蹠ノ知覺脫失ヲ將來スルカ爲メニ歩行ニ際シ運動ノ變調ヲ現出スルニアリ偶マ全然疼痛不感ノ症候ヲ呈スルヿアリ此時ニ於テ帽針ヲ取リ筋肉中ニ穿刺スルモ疼痛ヲ起スヿナク唯タ僅カニ痒癢ヲ感シ殆ント刷毛ヲ以テ脛部ヲ摩擦スルト異ナルヿナシ而シテ斯ノ如キ感覺ヲ起スハ多ク一局部ヲ限ルモノナリ

又當初電光ノ如キ銳痛ヲ起シタル部位ニ於テ熱痛ヲ感スルコトアリ

知覺機ニ於テ最モ不快ナル變症ハ一種特別ナル苦悶ノ狀ヲ呈シ之レヲ鎮靜セント欲シテ筋肉ヲ運動スルモ其効ナキモノナリ加之ノミナラス筋肉ノ知覺ヲ減殺スルコト最モ甚タシ

筋肉ノ知覺、四肢ノ運動其他重量及ヒ抗抵ノ力ヲ感得スルノ機能モ亦タ減少シ或ヒハ全ク消滅スルコトアリ故ニ諸般ノ操作ニ於テ筋肉ノ作用整頓セサルヲ常トス

試ミニ患者ヲシテ横臥セシメ足ヲ以テ器物ニ接觸セシムルキハ神經ノ變調ヲ現出スルヿ最モ明亮ナリ

運動ノ作用平等ナラスシテ跳躍スルカ如ク勉メテ確實ナラシメントスルモ方向不正ニシテ其目的ヲ達スルヿ能ハサルカ如シ

特リ四肢ノ諸筋ニ神經變調ヲ起スノミナラス眼球ノ諸筋ヲ侵カスカ故ニ眼球横轉、調節機不整其他瞳孔ノ變症ヲ將來スヘシ

「フレドレーチ」氏カ兩側横轉症ト稱スル所ノモノハ特リ左右ニ横轉スルノミナラス上下或ヒハ斜行ノ方向ニ於テ轉旋スルモノナリ而シテ患者眼球ヲ靜止スル𪜈ニ發スルヿナク勉メテ眼球ヲ固定セントスルニ當テ其症候ヲ呈スルモノナリ

斯ノ如キ眼筋ノ運動ニ於テ變調ヲ發スルノミナラス視神經ニ於テ眼様變質ヲ誘起スルカ爲メニ諸瘢ノ症候ヲ現出スヘシ假令ヘハ視野ノ大小及ヒ速力ヲ變シ或ヒハ五色ノ辨別ヲ亂リ終ニ視力板ノ白色萎縮ヲ將來スヘシ

本症ノ經過ニ於テ諸瘢ノ榮養變常ヲ起スヘシ殊ニ末期ニ迫ル𪜈ハ最モ著ルシキモノナリ然レ𪜈既ニ記載セシ所ノ諸症候中最モ重要ナルモノハ関節ノ疾患ニシテ多クハ膝関節ヲ侵カスモノトス

偶マ初期ニ於テ未タ神經變調ヲ呈セサル ニ當テ関節ノ症候ヲ呈スルヿアリ而シテ膝関節及ヒ胯関節ヲ侵カスノミナラス肩肘、肘及ヒ腕関節ニ波及スルヿアリ

関節ノ症候タルヤ當初炎症ヲ發スルコトナク突然関節ノ腫脹ヲ起シ疼痛又タハ苦悶ヲ感スルヿナクシテ液体ノ貯溜スルヲ見ルヘシ

関節ノ腫脹ハ俄然退消スルヿアリト雖𪜈通常重要ナル破壞性ノ變狀ヲ現出スルモノ多シ故ニ軟骨破壞シテ骨端消耗シ関節面ノ半脱臼或ヒハ全脱臼ヲ將來スヘシ

全身ノ諸骨皆ナ悉トク脆軟トナリ容易ニ破壞スヘシ

讀者ソノ詳ヲ知ラント欲セハ千八百七十七年倫敦府ノ大家「チャーコット」氏カ著ハセル神經諸病ト題スルノ書及ヒ千八百七十五年米國醫學雜誌中「ウヰール、ミッチエル」氏カ記載セシ脊椎関節諸病論ト題セシ一章ヲ參照スヘシ

經過時期及轉歸

病初ノ諸症候頗フル不明ニシテ其增進ノ度モ亦タ緩慢ナリ故ニ數年ヲ經サレハ諸症候ニ依テ判然診斷ヲ下タスヿ能ハサルモノアリ

第一期ハ數月乃至數年ニ渉ルヿアリ神經變調ハ通常下肢ニ始マリ而シテ其被患ノ部位ニ劇痛ヲ發スヘシ

俄然上肢ニ於テ平衡力錯雜ヲ起コスヿアリ

第二期ハ第一期ニ比スレハ一層緩慢ナルモノトス故ニ多クハ年ヲ以テ數フヘシ

病機蔓延シテ上肢ニ達スル𪜈ハ增進ノ度モ亦タ迅速ナリトス

「トビナルド」氏ノ說ニ據レハ本症ノ時期ハ平均七年ナリト云フ然レ𪜈殆ント三十年ニ渉ルモノ亦タ鮮ナシトセス

吾人カ今日ニ至ルマテ實驗上及ヒ記錄上ニ於テ詳知セシ所ノ最モ時期ノ短小ナルモノハ三年間ナリ

病機增進ノ度ハ時候、大氣ノ性狀及ヒ攝生ノ如何ニ因テ大ヒニ緩急ノ差ヲ起スモノナリ偶マ注目スヘキ原因ナクシテ快復ニ趨クアリ或ヒハ數年間依然トシテ增減スルナクシテ更ニ再ヒ增劇スルアリ

本症ノ轉歸ハ脊髓ノ急性充血或ヒハ軟化ヲ起コシ又タハ腦病ヲ誘發シ或ヒハ前角ニ蔓延シテ增進性萎縮ヲ發シ或ヒハ腸胃炎ヲ發シ或ヒハ膀胱炎及ヒ腎盂炎ヲ將來シ或ヒハ褥瘡ヲ發シ或ヒハ諸臟ノ續發症ヲ現出スルニアリ

繼發諸病中最モ多キモノハ肺勞ナリ何ントナレハ吾人カ四十三名ノ患者ニ就テ精査スルニ肺勞ヲ發シタルモノ十三人ヲ得タリ其他肺氣管支炎四名腸炎二名腸垤扶斯三名ニ過キサリシヲ以テナリ

嘗テ本症ニ罹リ第二期ニ達シタルモ幸ヒニシテ治効ヲ奏シタル報告ヲ得タリ然リト雖𪜈其實際ニ至テハ最モ疑フヘキモノナリ

多少ノ損害ヲ被ムリタル後一時病勢ノ停止スルカ如キハ屢々實驗スル所ナリ

予ハ一患者ニ於テ第二期ノ諸症候ヲ現出シ次度加里ヲ投シテ全然快復シタルモノヲ實驗セリ而レ𪜈其患者ハ鍍金工タルヿヲ檢出セリ

診斷

病機增進シタルモノニアリテハ其診斷容易ナリトス

第一期ニアリテハ其疼痛ノ症狀僂麻質斯或ヒハ筋痛ト異ナルヿナシ而レ𪜈復視症及ヒ生殖機ノ變調ニ據テ其本症タルヲ知ルヘシ

諸臟ノ急性脊髓諸病トヲ區別スルニハ其發育ノ度頗フル緩慢ナルノミナラス誘發スル所ノ諸症候ニ因テ明瞭ナリ

慢性脊髓炎又タハ他ノ脊椎諸症ニシテ截癖ヲ起スモノニアリテハ運動機ノ神經變調ナキヲ以テ鑑別スヘシ加之ノミナラス本症ニアリテハ平衡力錯雜ヲ起スモ筋肉ニ麻痺ヲ發スルヿナシ

治則

最第一ノ療法ハ安靜ナリ故ニ勉メテ身体ノ運動ヲ戒メサルヘカラス

患者ヲシテ諸臟ノ筋力勞動ヲ避ケシメ數週日間横臥セシムルヿハ良効ヲ奏スルコト鮮ナカラス

安靜療法ハ當初二三月間諸臟ノ心痛、事業及ヒ運動ヲ禁止スルニアリ爾後數月尚ホ其

法ヲ守ラシムヘシ

体位ハ側臥シテ前面ニ傾ムキ衣服ヲ以テ軀幹ヲ緊縛スルヿナク床上ニ靜置スヘシ

食物ハ專ハラ滋養易化ノモノヲ撰ヒ生活機能ヲ營爲スルニ必要ナルモノ攝ラシムヘシ

珈琲、茶、煙草及ヒ亞爾個兒性ノ衝動物ハ悉トク禁止セサルヘカラス

安靜療法ニ次クモノハ冷水浴法ニシテ此二法ハ共ニ離ルヘカラサルモノナリ

「エルブ」氏ノ說ニ據レハ溫浴法ハ害アリト雖ヒ冷水浴法ハ非常ノ偉効ヲ奏スルモノトナセリ

患者十九名中冷水浴法ニ依テ効驗ヲ現ハセシモノ十六人ニシテ二名ハ毫モ効力ナク一ハ却テ增惡スルヲ覺エタリ

浴水ノ溫度ハ華氏六十八度以上八十八度以下ヲ適當トス而シテ局處療法ニハ冷水ニ浸シタル手巾ヲ脊椎ニ貼シ或ヒハ冷水ニ浸シタル海綿ヲ用フルモ可ナリ

本症ノ治法ハ寧ロ自宅ニ於テ施コサシムルヲ良トス

第三ノ療法ハ電氣ナリ脊椎部ニ持續性ノ感傳ヲ起コサシメ疼痛ヲ緩解スルカ爲メニ四肢ニ斷離極ヲ用ヒ或ヒハ消削シタル筋肉ニ通シ或ヒハ膀胱麻痺ニアリテハ膀胱ニ通スルヲ良トス

内服藥ニ於テハ微毒又タハ鑛屑ノ吸收ニ基因スルヿアルヲ以テ何症タルヲ問ハス當初數日間沃度加里ヲ投スヘシ若シ二週日乃至三週日間服用スルモ効驗ナキヒハ尚ホ之レヲ持長スルモ利益アルヿナシ

生力ノ虛脆スルヿ甚タシキヒハ酪酸加燐酸石灰及ヒ肝油ヲ以テ最良トス

硝酸銀ハ屢々稱用スルノミナラス高名ナル大家ニシテ之レヲ以テ最第一ノ藥劑トナスモノアリト雖ヒ身体ノ組織中ニ浸入シテ中毒症ヲ發スルノ恐レアリ

現今ニアリテハ神經伸展法ヲ用ヒテ効驗ヲ現ハスコト鮮ナカラス其法タルヤ薦坐神經ヲ露出シテ手指ヲ以テ伸展シ或ヒハ鉤ヲ用フルモ可ナリ

○脊椎側柱硬結 原名 ラテラル スパイナル スクレロシス LATERAL SPINAL SCLEROSIS.

本症ハ後柱硬結ト同一ノ病機ニ因テ起ル所ノ一症ニシテ唯タ其部ヲ異ニスルノミ

大家「チャーコット」氏ハ之レヲ痙攣性脊髓勞ト稱シ又タ「エルブ」氏ハ痙攣性脊椎麻痺ト號セリ

病原論

脊椎側柱硬結症ハ後柱ニ發スルモノト同一ノ症狀ヲ以テ增進スルヲ常トス疾患ノ部位ハ專ラ脊椎側柱ノ白質ニアリ而シテ其變狀ハ灰白膠樣變質ヲ發スルニアリ且質間ノ結締組織ニ於テ成形機亢盛ヲ起コシ又タ固有ノ神經元質ニアリテハ萎縮症ヲ發スヘシ

假令ヒ本症ハ專ラ側柱ノ後部ヲ侵蝕スルモ前方ニ於テハ多少前角ニ蔓延シ後方ニアリテハ後柱灰白質ヲ侵シ又内面ニアリテハ側柱ノ深部ニ達スヘシ

腦病ノ種類ニヨリ側柱ニ於テ繼發性ノ變質ヲ將來スルハ唯タ一方ニ限局スルモノナリ「チャーコット」氏カ側柱硬結性脊髓勞ト稱スルモノニアリテハ側柱ノ硬結ヲ起スノミナラス前角ノ增息性神經節細胞ノ萎縮及ヒ消滅ヲ來タスヘシ

「エルブ」氏ノ說ニ據レハ本症ハ特ニ頸椎ノ部ヲ侵カスヿ多シト云フ

通常脊椎側柱硬結症ハ腰椎ヨリ延髓ニ至ルマテ脊椎ノ全長ヲ占ムモノナリ

徵候

本症ニ於テ特ニ著明ナル症候ト見做スヘキモノハ運動機ノ刺衝ト共ニ截癱ヲ將來スルニアリ

偶マ運動機ノ症候ニ先タチテ知覺機ノ變調ヲ發スルヿアリ假令ヘハ背部疼痛、震戰、蟻痒及ヒ裂痛ノ如キモノ是レナリ而レモ此諸症候ハ屢々變換スルヲ常トス

運動機ニ於テハ刺衝ノ徵候ヲ呈スヘシ即チ筋肉ノ跳躍、拘攣及ヒ強直ヲ起シ殊ニ勞働操作ノ後或ヒハ夜間臥床ニアリテ發スルヿ多シ

爾後漸々諸筋ノ緊張ヲ起コシ之レカ爲メニ運動自在ナラサルヿアリ故ニ諸筋ノ強直性攣縮ヲ將來シ膝關節固定シテ兩脚ヲ開クヿ少ク歩行頗フル短迫ナリ斯ノ如ク筋力運動ノ特徵ヲ呈スルハ啻ニ筋肉ノ強直性痙攣ニ係ハルノミナラス萎弱ヲ將來スルニ因ルモノナリ

當初患部ノ諸筋ニ於テ壓重及ヒ萎憊ノ感アリテ輕微ノ操作ヲ試ムルモ忽チ疲勞ヲ覺エ漸々萎弱ヲ發スヘシ而レモ麻痺ヲ將來スルモノハ極メテ鮮ナシ

試ミニ患者ヲシテ椅子ニ坐セシメ兩足ヲ床面ニ觸レシムレハ識ラス知ラス四肢ノ震戰ヲ起コスヘシ

本症ニ罹ルトキハ腱ノ反射機ハ甚タシク增劇スルヲ常トス

知覺麻ハ健全ニシテ毫モ障碍ナク又タ諸筋ノ萎縮症ヲ發スルヿナシ加之ノミナラス直腸膀胱及ヒ生殖機ニ於テモ亦タ變狀ヲ呈スルヿナシ

本症ハ多ク下部ニ起コリ漸々上方ニ蔓延スルモノナリ

軀幹ノ諸筋ヲ侵カストキハ横臥シタルモノ椅坐或ヒハ直立セントスルニ際シ頗フル困難ヲ覺ユルノミナラス末期ニ至ルトキハ其運動ヲ營ムヿ能ハサルヘシ

臂脛ヲ襲フトキハ以上ノ諸症候ニ加フルニ萎靡、強直、反射機亢盛及ヒ萎弱ヲ將來シ終ニ攣縮ノ症候ヲ呈スヘシ然レトモ神經ノ變調ヲ發スルヿナク麻痺ヲ誘起スルモノヽ如キハ殆ント稀有ノ變症ナリ

偶マ半身不遂ノ症狀ヲ呈シ當初下肢ヲ侵カシ漸々同側ノ上肢ニ波及スルヿアリ

病機增進ノ極度ニ達スルトキハ數年間依然トシテ輕減セサルヿアリ又タ益々攣縮ノ症候增劇シ全然麻痺ヲ起コシ患者毫モ運動ヲ營ムヿ能ハサルニ至ル

然リト雖トモ本症ニ因テ不幸ニ陷ヰルモノ鮮ナク通常他ノ疾患ヲ繼發スルニ依ルモノ多シ

脊椎前柱ノ硬結症ニアリテハ前角ヲ侵蝕スルノミナラス增進性ノ筋萎縮ヲ起スヘシ此

時ニ於テ現ハルヽ所ノ症候ハ前柱硬結及ヒ增進性筋萎縮症ニ基因スルモノナリ

解剖的ノ位置ニ於テ脊椎ノ頸部ニアルモノヲ侵カストキハ當初上肢ニ於テ其症候ヲ現發スヘシ假令ヘハ臂脛部ノ諸筋ニ於テ纖維ノ攣縮ヲ起コシ消耗及ヒ萎弱ヲ將來スト雖トモ電氣性收縮力ハ依然トシテ減スルヿナシ

臂脛、下膀及ヒ頸部ノ諸筋ニ於テモ亦タ攣縮ノ症狀ヲ呈シ筋肉ノ變狀增進シテ極期ニ達スルトキハ再ヒ退消スヘシ

病初ヨリ四ケ月乃至一年ヲ經ルトキハ兩臂共ニ疾患ヲ被ムリ終ニ下肢ニ波及スヘシ故ニ下肢ニ於テモ亦タ臂脛ト同一ノ症狀ヲ呈スヘシ

膀胱及ヒ直腸ハ侵カサルヽヿナシ

爾後下肢ニ於テ筋纖維ノ攣縮及ヒ間代性ノ痙攣ヲ發シ永遠筋肉ノ梗直ヲ現出スルヲ以テ本症ノ特徴トス

第三期ニ達スルトキハ病的變狀ノ作用轉移シテ延髓ニ達スヘシ尋イテ呼吸及ヒ循環系ノ變調ヲ起コシ忽チニシテ斃ルヽモノ多シ

本症ノ全經過ハ二三年ノ間ニアリ

診斷

後柱ヲ侵カスモノト側柱及ヒ前柱ヲ襲フモノトヲ診斷スルニハ其病歴ニ

據ラサルヘカラス本症ニアリテハ反射機ノ症候ヲ呈スルモ神經變調ヲ起コスヿナク又タ平衡力錯誤ヲ發セスシテ萎憊ヲ來タスモノナリ加之ノミナラス後柱症ニ於テ見サル所ノ特徴ハ攣縮及ヒ間代性ノ痙攣ヲ現出スルニアリ

本症ノ治則及ヒ攝生法ハ後柱ヲ侵カスモノニ異ナルヿナシ故ニ爰ニ再ヒ之レヲ贅セサルナリ讀者宜シク前章ヲ參照スヘシ

治則

釋義

○小兒麻痺（原名 インフハンタイル パラリレス） INFANTILE PARALYSIS.

小兒麻痺トハ俄然小兒ニ於テ發スル所ノ脊椎麻痺ノ一症ヲ斥ス而シテ專ハラ灰白質ノ前角ヲ侵カス所ノ炎症ニ基因スルモノナリ

今日ニ至リ偶マ大人ニ於テ同一ノ疾患ヲ發スルヿアルヲ撿出セリ而レ𪜈小兒ヲ變フモノニ比スレハ遥カニ鮮ナク素ヨリ同日ノ論ニアラサルナリ

原因

本症ハ其名稱ノ如ク幼年ニ於テ發スルヿ多ク殊ニ生後六月乃至二年ノ間ニ於テ最モ其多數ヲ占ムルモノトス

又六十歳以上ノ人ニ於テ同一ノ疾患ヲ起スヿアリ故ニ大家「クスモール」氏ハ此症ヲ以テ特ニ急性白髮脊椎前角炎ト稱セリ

年齡ヲ除クノ外本症ヲ誘起スヘキ原因ニ就イテ吾人カ証知スル所ノモノ極メテ僅ナシトス

本年刊行（明治十八年）ノ醫學雜誌中我カ米人「シンクラル」氏カ實驗說ヲ掲載セシカ其說ニ據レハ盛夏ノ暑熱ハ其感動ヲ有スルモノヽ如シ

屢々發疹熱及ヒ他ノ急性熱病ノ經過中本症ニ罹ルモノアルヲ以テ顧ミレハ此二症ニ於テハ互ヒニ親密ナル関係ヲ有スルモノニ似タリ

吾人ハ未タ遺傳ノ感覺ヲ精査スルヿ能ハサルヲ以テ重要ナル反對說ヲ提出セサルヘカラス

病理的解剖

肉眼ヲ以テ見ルヿハ精確ナル變狀ヲ撿出スルヿ能ハサルノミナラス全ク認ムルヿ能ハサルヿアリ

顯微鏡ヲ以テ窺フヿハ灰白質ノ前角、其他背腰部及ヒ頸椎ノ腫大シタル部ニ於テ重要ナル變狀ヲ呈スヘシ

其變狀タルヤ炎症ニ因テ較化ヲ將來スルニアリ神經元質ハ夥多ノ顆粒狀小球体及ヒ遊離核ヲ含有スル所ノ滲出物ノ爲メニ分離ヲ起コシ神經結締纖ハ成形機充盛シ又タ脈管ノ膨大スルヿ甚タシ之レニ反シテ増息性神經節細胞ハ消耗シテ或ハ敗滅シ遺殘スル所

ノモノハ諸樞ノ萎縮性變質ヲ誘起スヘシ

脊髓ノ兩側或ヒハ一側殊ニ背腰部ノ腫大シタル部ニ於テ處々ニ長徑半「インチ」乃至一「インチ」(或カ四歩二重乃至八歩四厘)ノ軟化シタル点ヲ現出ス

軟化ハ稍ヤ後方及ヒ側面ニ向テ蔓延スヘシ加之ノミナラス近傍ノ前側柱ニ於テモ亦タ硬結性ノ變質ヲ發スヘシ

脊椎ノ前根ニ於テモ亦タ同一ノ變狀ヲ現出スヘシ故ニ總テ本症ノ患者ニアリテ數年ヲ經ルトキハ巨大ナル消削、萎縮性ノ變質及ヒ硬結ヲ將來スルヲ常トス

神經ノ前根ハ萎縮シテ菲薄トナリ且透明ナリ而シテ周圍ノ神經纖維ニ於テモ亦タ多少ノ變質ヲ起コスヘシ

患部ノ神經ヨリ枝別ヲ受クル所ノ諸筋ニ於テハ著ルシキ變狀ヲ起コシ結締組織增生シテ數多ノ脂肪球及ヒ顆粒体ヲ構生シ筋纖維ニアリテハ變質及ヒ消滅ヲ將來スヘシ

麻痺シタル四肢ノ骨質ハ發育ノ機能ヲ失シテ多少變質ヲ起コシ頽廢シタル組織及ヒ脂肪組織ハ比例上增息スルヲ常トス

重要ナル變狀ハ諸関節ニアリ故ニ関節面ハ萎縮症ヲ發シテ侵蝕セラレ骨間ノ靭帶ハ菲薄トナリ緊張シテ関節ノ弛緩スルヲ見ルヘシ

斯ノ如キ萎縮性ノ變狀ニ依テ甚タシキ畸形ヲ生シ最モ增惡シタルモノニアリテハ畸足(又彎脚ト稱ス)ヲ將來スヘシ

徴候

本症ハ通常熱症ヲ以テ起コリ一二日間持續スヘシ而シテ其回復ニ臨ンテ患兒ニ麻痺ヲ發スルニ至リ再ヒ驚駭スヘシ

熱症ハ頭痛背部及ヒ四肢ノ疼痛ヲ發シ且眩暈及ヒ譫語ヲ將來スヘシ又タ偶マ搐搦ヲ發スルヿアリ

昨年(明治十七年)六月ニ於テ醫士「マリー、パトナム、ヂヤコビ」氏カ米國産科雜誌中ニ掲載スル所ヲ見ルニ同氏カ蒐集セシ患兒一百六十三名ニ於テ發病ノ症狀一樣ナラサルヿヲ撿出セリ

十二名ハ何等ノ前驅症ヲ呈セスシテ突然麻痺ヲ起セリ又タ症ニヨリテハ一夜安靜ナルノ後翌朝ニ至リ或ヒハ朝夕ノ間ニ於テ他ノ症候ナクシテ麻痺ヲ將來スルヿアリ

大數ノ患者ニアリテハ當初二三日間持續スル所ノ熱症ヲ將來スヘシ或ヒハ偶マ唯タ惡心及ヒ嘔吐ヲ發スルニ過キサルヿアリ又タ或ヒハ麻痺ヲ發スルノ後搐搦ヲ起コスコトアリ

前驅症ノ如何ヲ問ハス既ニ麻痺ヲ發スルトキハ一日若シクハ二三日ニシテ退消シ殆ント

健態ニ復スルモノヽ如シ然リト雖モ一肢若シクハ數肢ニ於テ麻痺ノ症狀ヲ呈スヘシ故ニ一脚ニ於テ跛子狀トナリ毫モ運動スルヿ能ハサルモノアリ爾後一二時間ヲ經テ兩脚共ニ同一ノ症狀ニ陷ルモノアリ更ニ二十四時間ヲ經ルノ後兩臂モ亦タ麻痺ヲ起スヘシ病初ノ徴候ヲ發シテヨリ全然麻痺ヲ將來スルニ至ルノ時間ハ一週日以上ニ渉ルモノ極メテ稀レナリ

膀胱ニ於テモ亦タ麻痺ヲ起スヿアリ此時ニアリテハ尿液停滯シ或ヒハ失禁ヲ來タスヿアリ而レモ永遠膀胱ヲ侵カスヿナク數日若シクハ數週ニシテ退消スヘシ

知覺機ハ健態ヲ失スルヿナシ

運動麻痺ハ突然暴發シテ直チニ輕減機ニ向カヒ一週日乃至三週日ニシテ勢力稍々回復シ二三月ヲ經ルトキハ全然患部ノ症候ヲ消滅シテ健全ニ復スヘシ

本症ニ罹ルトキハ諸筋ノ軟弱ヲ起スト雖モ電氣性収縮力及ヒ榮養機能ヲ失スルヿナシ治癒ノ方法一樣ナラス既ニ論スル所ノ諸症ニアリテハ漸々回復ノ機ニ趨クヘシト雖トモ唯タ一部分ノ症候ノミ退消スルニ過キス故ニ一肢若シクハ二肢ノ症候ハ健態ニ復スルモ他ノ部ニアリテハ一簇ノ諸筋若シクハ一肢ヲ侵カシタルモノ依然トシテ退消セサルヘシ

譬ヘハ兩臂共ニ回復シテ下肢ニ麻痺ヲ貽コスヿアリ或ヒハ一肢或ヒハ一脚ノミ疾患ヲ殘コスヿアルカ如シ

偶マ半身不遂ノ症候ヲ呈スルヿアリ此時ニアリテハ頭蓋内疾患ノ有無ニ依テ原因ヲ索メサルヘカラス

唯タ一側ノ上臂ノミヲ侵カストキハ肘腕及ヒ手指ノ伸筋ニ麻痺ヲ起コスヘシ

下肢ヲ襲フトキハ股部ノ伸筋(大腰筋)ニ不遂ヲ起コシ或ヒハ膝膕神經ノ分布スル所ノ諸筋ニ於テ麻痺ヲ起コスヿアリ

麻痺ヲ起コシタル諸筋ハ久シク健態ニ復セサルトキハ忽チニシテ增進性ノ萎縮症ヲ發スヘシ故ニ筋腱及ヒ其他ノ組織ニ於テ反射機能ヲ失シ電氣ノ離極ヲ通スルモ収縮力ヲ起コスコトナシ

麻痺シタル部位ニアリテハ体温ノ減少スルヿ甚タシク手指ヲ以テ觸ルレハ寒冷ヲ覺エ蒼白色ヲ呈スヘシ加之ノミナラス筋肉モ亦タ漸々消耗シテ唯タ結締組織及ヒ脂ヲ肪殘コスニ過キス諸関節ハ其形狀及ヒ造構ヲ變換シ四肢ノ發育ヲ歇ムヘシ

下肢ノ一側ニ變形ヲ生スルトキハ屢々嘔足ヲ將來スヘシ

昨年(明治十七年)新約兒克府ノ大家「セグイン」氏ハ數多ノ小兒麻痺患者ニ於テ實驗說

ヲ報告セリ左ニ記スル所ノモノハ同氏カ最モ正確ナル徴候ト見做ス所ナリ

當初感覺遲鈍及ヒ輕微ノ假性知覺脫失(即チ萎弱及ヒ癱瘓)ヲ起コシ此二症候共ニ四肢ヲ侵カスヿ多シ偶マ眼球、顏面、舌体及ヒ咽喉ヲ襲フヿアリ

呼吸諸筋、背部及ヒ腹部ノ諸筋、膀胱及ヒ肛門括約筋ハ依然トシテ障害ヲ被ムルヿナシ

麻痺シタル諸筋ニ於テ萎縮ヲ發スヘシ又タ筋電氣ノ收縮力ヲ脫失スヘシ

麻痺ノ症候ハ微然頓挫スルノ性ヲ有スルカ故ニ頓挫法ヲ行フトキハ忽チ消退スヘシ

本症ニ於テ曾テ現出スルヿナキ症候ニシテ診斷上最モ重要ナル点ハ左ノ如シ

膀胱、肛門括約筋或ヒハ呼吸筋ノ麻痺ヲ起コスヿナク又タ聾瘖ヲ發スルヿナシ其他巨大ナル瀰蔓性ノ知覺脫失或ヒハ脊髓癲癇ヲ將來スルヿナシ

經過、時期及轉歸

本症ノ經過ハ頗フル平等ナリ

最モ輕症ナルモノニアリテハ二三日ニシテ回復ノ機ヲ起コシ二三週乃至一二月ニシテ全治スヘシ吾人ハ斯ノ如キ症ヲ假性麻痺ト稱セリ

症ニヨリテハ回復ノ機ニ達スルノ後一肢若シクハ一簇ノ諸筋ニ於テ麻痺ノ症候ヲ貽コシ二月乃至六月ヲ經テ始メテ全然健態ニ復スルヿアリ

回復ノ徴候ヲ呈スルハ唯タ官能障碍ノ消失スルモノナリ是故ニ炎症ヲ挫折スルノ目的

ヲ以テ妄リニ有力ナル治法ヲ施コスヲ要セサルナリ

治則

治術ノ大要ハ灰白質ノ益々破壞セントスルヲ豫防シ且ツ既ニ多少ノ損害ヲ被ムルモ尚ホ未タ其官能ヲ營爲スル所ノ組織ヲシテ健態ニ復セシムルニアリ

予カ常ニ最モ稱用スル所ノ藥劑ハ患者ノ年齡ニ順ヒ幾尼涅四分ノ一瓦(〇、〇一五ガラム)乃至四瓦(〇、二四ガラム)ニ莨菪越幾斯二十分ノ一瓦(〇、〇〇三ガラム)乃至四分ノ一瓦(〇、〇一五ガラム)ヲ加エテ内服セシメ脊椎部ニ温湯点滴法又タ温湯ニ醮シタル布片ヲ貼シ其他電氣療法ハ巨大ニシテ微弱ナル固定電氣ヲ起サシメ逆流ヲ通スルニアリ加之ノミナラス回復ノ機ニ達スルマテ身体ヲ安靜ナラシムルヿ最モ緊要タリ

既ニ回復ノ機ニ達シ摩擦電氣ニ依テ反動ヲ起コストキハ之レヲ通シ又タ毛兒華尼電氣ニアラサレハ反動ヲ起サヽルトキハ毛爾華電氣ヲ用フヘシ

皮膚ニ塗擦藥ヲ用フルト同時ニ電氣療法ヲ施コスモ可ナリ

筋肉ノ消削甚タシキトキハ穿刺法ヲ施サンヨリハ寧ロ斯篤剌幾尼涅ヲ筋肉中ニ注射スルヲ良トス其量ハ毎日二三回百分ノ一瓦(〇、〇〇〇六ガラム)乃至六十分ノ一瓦(〇、〇〇〇一ガラム)ヲ注射スヘシ然リト雖モ回復ノ期ニ達セサレハ之レヲ用フルヿ勿レ

○増進性筋萎縮　原名 プログレッシーヴ マスクラル アトロヒー PROGRESSIVE MSCULAR ATROPHY.

釋義

増進性筋萎縮トハ隨意筋ノ系統ニ於テ漸々増進スル所ノ消耗ヲ徴スルノ文字ニシテ一定ノ經過ヲ逐フテル來モノナリ

原因

遺傳性ノ例證ヲ報告スルモノ頗フル多キノミナラス時ニ最モ著ルシキ證跡ヲ見ルコトアリ

男子ハ婦人ニ比スレハ感受スルコト多キカ如シ然リト雖モ遺傳ニ因テ來ルトキハ男女共ニ同一ノ比例ナリ

年齢ニ於テハ生活機能ノ最モ活潑ナル時即チ三十歳ヨリ五十歳ニ達スルノ間ヲ以テ最モ侵襲セラルヽノ期トス而レトモ十年以下ノ人ヲ侵カスコアルヲ以テ顧ミレハ幼少ノモノト雖トモ之レヲ度外ニ置クヿ能ハサルナリ

筋力勞働若シクハ或ル作用ニ因テ一簇ノ諸筋ヲシテ緊張セシムルコト過激ナルトキハ亦タ本症ヲ誘起スルモノヽ如シ

偶マ小兒ニアリテハ股脚ヲ操作スルコト過久ナルカ爲メニ下肢ノ増進性萎縮症ヲ發スルコトアリ

虚脱性ノ諸病、鉛毒、微毒及ヒ惡液性諸症モ亦タ本症ノ發生ヲ促カス所ノ感動ヲ有スル

モノヽ如シ

寒冷暴觸及ヒ機械的傷害ハ現然本症ノ原因トナルコトアリ

病理的解剖

本症ニ於テ現ハル、所ノ病的變狀ニ種アリ一ハ脊髄ニアルモノニシテ一ハ筋肉ヲ侵カスモノ即チ是レナリ

脊髄ノ變狀ハ小兒麻痺ニ於テ見ル所ノモノト異ナルヿナシ故ニ前柱ノ萎縮及ヒ變質ヲ起コシ増息性神經節細胞及ヒ前角ノ消耗ヲ來タシ神經結締織、澱粉様体、顆粒細胞及ヒ脂肪球ノ成形機充盛ヲ現出スヘシ

脊髄前角モ亦タ侵襲ヲ被ムリ消耗、萎縮及ヒ變質ヲ將來スルモノ多シ

今日ニ至ルマテ諸大家ノ報告ニ據レハ脊髄ヲ剖檢スルニ當テ何等ノ變症ヲ認ムルヿ能ハサルモノ殆ント三分ノ一ニ居ルカ如シ

千八百七十三年獨逸國ノ大家「フレードレーチ」氏カ著ハセシ病理書中増進性筋萎縮症ノ條下ヲ視ルニ其檢索頗フル緻密ニシテ能ク其疾患ノ原因全ク筋肉ニアルコトヲ詳明セリ

其變狀タルヤ當初神經ノ原始帯ヲ結束スル所ノ質間結締織ノ成形機充盛ト共ニ炎症ヲ發スルニアリ尋テ原始帯ニ於テモ亦タ變狀ヲ起コシ神經横ノ緊殂及ヒ筋小球体ノ増生

スルヲ見ルヘシ

結締組織ノ增息スルニ順テ筋質ノ消耗ヲ起コシ終ニ脂肪變質ヲ誘起セシムヘシ

末期ニ至ルヒハ筋元質ハ變シテ夥多ノ脂肪球ヲ有スル所ノ纖維狀帶トナリ益々增進シテ筋元質ノ外部ニ出テ新生シタル結締織中ニ進入スヘシ

「フレードレーチ」氏ノ試驗ハ最モ研究シタル學說ニ基因スルモノナリ其說ニ據レハ當初筋肉中ニ疾患ヲ起コシ尋テ筋間ノ神經ヲ侵カスモノトス而シテ上行性神經炎ニアリテハ漸々脊髓ニ達スルモノトナセリ

他ノ學士輩ハ反對ノ說ヲ唱ヒ筋質ノ變狀ハ脊髓ヲ侵カス所ノ病機ニ繼發スルモノトナセリ故ニ「チヤーコツト」氏及ヒ「ギヨフロイ」氏ノ如キハ脊髓神經角ノ增息性神經節細胞ニ於テ起ル所ノ疾患ニ繼發スルモノトナセリ

徵候

大家「フレードレーチ」氏ノ統計ヲ見ルニ患者一百四十六名中百十一名ハ右側ノ上肢ニ於テ病初ノ徵候ヲ呈シ二十六名ハ下肢ニ發シ八名ハ腰筋ヲ侵襲セリト云フ偶マ舌体或ヒハ口蓋筋ヲ侵カスコアリ予ハ既ニ斯ノ如キ患者ヲ實驗セリ

上肢ニアリテハ當初手背骨筋ニ於テ發起シ尋テ手背及ヒ手掌ノ凸隆部及ヒ三角部ノ諸筋ニ達スヘシ

偶マ大胸筋及ヒ大鋸筋ニ於テ萎縮症ヲ發スルコトアリ

小兒ニアリテハ當初腰筋ニ萎縮症ヲ發スルモノ多シ然レヒ其變質ノ症狀殆ント假性肥大症ニ類スルモノナリ

患部ノ諸筋ニ於テ其容積ヲ失スルトヒ雖ヒ真ノ變質症ニ因テ消滅スルモノト異ナルモノトス何ントナレハ脂肪組織ノ成形機充盛スルコト頗フル多量ナルカ爲メニ外觀ニ於テハ却テ其容積ヲ增加スルカ如キコトアルヲ以テナリ

此期ヲ過クルヒハ筋纖維ノ攣縮ヲ將來スヘシ是レ即チ筋纖維ノ運動ニ於テ波動ヲ起コシ之レカ爲メニ微細ナル震戰ヲ以テ動搖ヲ起サシムルニ由ルモノナリ

此時ニ於テ筋力試驗器(ダイナモメートル)ヲ以テ患肢ヲ檢測スルヒハ健側ニ比スレハ非常ニ衰弱シタルヲ知ルヘシ

被患ノ上肢ハ甚タシク變形ヲ起コシ指爪ノ如キハ恰カモ鳥類ノ爪甲ヲ見ルカ如トシ

筋纖維ニ於テ刺衝ヲ感スルヒハ電氣性收縮モ亦タ保存スヘシ而レヒ摩擦電氣ノ刺衝機消滅スルノ後ニアリテモ平流電氣ノ反動ヲ起コスモノナリ

患者ノ過半數ニ於テハ消耗ヲ起コスニ當テ患部ノ筋肉ニ於テ劇痛ヲ發スヘシト雖ヒ疼痛及ヒ溫度ヲ感受スル所ノ知覺機ハ健態ニ比スレハ稍々減少スルヲ見ルヘシ

消削シタル筋ニ於テハ温度ヲ減スルカ故ニ手觸スレハ寒冷ヲ覺ユヘシ而シテ患部ノ表皮ハ健態ヲ失ハサルアリ或ヒハ蒼白色トナリ或ヒハ蒼身症狀ヲ呈スルヿアリ

通常患部ニアリテハ蒸發機能旺盛スルモノナリ或ヒハ全身ニ波及スルヲ見ルヿアリ

本症ニ於テ現ハル、所ノ関節ノ變狀ハ運動機神經變調及ヒ他ノ脊椎病ニ於テ見ル所ノモノト異ナルコトナシ

又タ本症ニ罹リ舌唇咽頭麻痺ヲ併發スルトキハ瞳孔及ヒ他ノ動眼機ニ於ケル變狀ヲ現出スヘシ加之ノミナラス関節ノ疾患ヲ併發スルモノニアリテハ病初一週日乃至數月間熱症ヲ將來スルモノナリ

經過、時期及轉歸

本症ノ經過ハ非常ニ遲延スルモノ頗フル多シトス

筋肉ヲ侵カス所ノ病機增進ノ度ハ常ニ平等ナル經過ヲ逐フモノニアラサルナリ

是故ニ或ヒハ組織ノ連接ニ因テ蔓延スルアリ或ヒハ離隔シタル筋肉ニ飛行スルヿアリ而レモ巨大ナル関節ニ達スルトキハ之レカ爲メニ限界セラルヽモノ多シ

當初手腕ヲ侵カスモ前膊ニ達スルヿナシ又タ前膊ノ筋肉ニ發スルモ上肢ヲ侵カサヽルモノ多シ又タハ三角筋及ヒ上膊ノ諸筋ヲ襲フモ肘関節ヲ超過スルヿナシ故ニ下肢ニアリテモ亦タ脛筋ノ萎縮症ヲ發スルモ股部ニ蔓延セサルカ如シ

本症ニ罹ルモ筋肉ニヨリテハ曾テ侵カサルヽヿナキモノアリ又タ頭部ノ諸筋ノ如キハ極メテ稀レナリ而シテ舌唇喉頭麻痺ヲ併發スルニ非ラサレハ其諸筋ヲ襲フモノ最トモ鮮ナシ

末期ニ至ルトキハ横膈膜、呼吸筋及ヒ呼吸補助筋ヲ侵襲スヘシ

此期ニ際シ肺臓ノ下垂充血及ヒ浮腫ニ因テ斃ルヽヿアリ

喉頭ヲ侵カストキハ聲音嗄澀スルノミナラス喉頭ノ運動ヲ欲止スルカ爲メニ呼吸困難ヲ將來スヘシ

又タ耳部ノ諸筋ヲ侵カストキハ聽官ノ障碍ヲ誘起スルコトアリ

大家「フレードレーチ」氏カ證明セシ所ノ一患者ハ総テ全身ノ隨意筋ヲ侵カシ特リ呼吸ノ作用ヲ保持スルヲ得ルノミ然リト雖トモ斯ノ如キ變症ヲ將來スルハ前條ニ載スル所ノ如ク延髓ノ前角ヲ侵蝕スルニアラサレハ非常ニ緩慢ナル經過ヲ逐フテ來タルモノナリ

病初ニアリテハ四肢ノ諸筋ニ消削ヲ起コスモ敢テ障碍ヲ感スルヿナク全身ノ健康モ亦タ衰弱ヲ呈セス体力精神共ニ其操作ヲ營ムヲ得ヘシ

偶マ數年間病機增進ノ度ヲ歇止シテ毫モ增劇ノ徵候ヲ見サルコトアリ

患者ノ大數ニアリテハ繼發病ニ因テ斃ルヽモノアリ而シテ其最モ重要ナルモノハ肺結

検ナリ或ヒハ偶マ導潜ニ基因スルコトアリ

診斷

病機増進シタルモノニアリテハ診斷上敢テ困難ヲ起コスヿナシ然レ𪜈病初ニアリテハ局處ノ傷害、神經幹ノ創傷或ヒハ僂麻質斯ノ症候ト誤認スルヿアリ

診斷上最モ重要ナル特徴ハ疼痛及ヒ筋纖維ノ震戦ヲ現出シ𪜈モ萎縮症ヲ發スヘキ局處ノ原因ヲ有セサルニアリ

治則

本症ハ決シテ内服藥ヲ以テ治効ヲ奏スルコト能ハサルナリ

予ハ一患者ニ於テ左上肢ニ限局シテ未タ他ニ波及セサルニ當テ「グリスリン」ヲ取リ消削シタル筋肉中ニ注入シテ偉効ヲ奏スルヲ得タリ

其溶液ハ「グリスリン」ニ三倍ノ水ヲ加ヒ一週日間ニ三回宛注射スヘシ

最モ必要ナル療法ニアリ電氣及塗擦劑是レナリ

予ハ平流電氣ヲ以テ屢々良蹟ヲ脩ムルヲ得タリ故ニ其効驗ニ至テハ世上ノ醫家ニ比スレハ最モ信用スル所ナリ加之ノミナラス「エルブ」氏ノ如キハ特ニ其効驗アルコトヲ報告セリ其用法タルヤ暗時(凡ソ二分時間)強劇ナル電氣ヲ起コシテ以テ活潑ナル攣縮ヲ興起セシムルニアリ

毎日一二分時間脊椎ノ全長ニ沿フテ下降性ノ電流ヲ通スヘシ

塗擦療法ハ豚脂ヲ脊椎部ニ塗布シテ表皮ヲ摩擦シ又タ筋肉ヲ揉搖スヘシ

脊椎部ニ温湯点滴法ヲ施シ或ハ被患ノ諸筋ニ温湯ニ浸シタル布片ヲ貼スルモ可ナリ

病原論及徴候

○假性肥大増進性筋萎縮

本症ハ特ニ萎縮シタル筋肉ノ容積ヲ増加シ結締織及ヒ脂肪組織ノ成形機充盛ニ因テ現然肥大症ヲ發スルヲ以テ通常ノ増進性筋萎縮ト異ナルモノナリ

大家「フレードレーチ」氏ノ説ニ曰ク本症ニ於テ現ハルヽ所ノ變狀ヲ略説スレハ筋纖維ト細脈管ノ外膜トノ間ニアル所ノ結締組織ノ繁殖スルニアリ

新生シタル結締組織ハ其細肥及ヒ横質ヲ増加シ終ニ脂肪球ニ變性スルモノナリ

結締織ノ發育スルニ從テ筋元質ノ消滅ヲ起コシ或ヒハ偶マ一局處ニ於テ遺殘スルモノアルモ甚タシク變狀ヲ呈シ且非薄トナルヲ常トス

當初ヨリ處々ニ筋纖維ノ肥大シタルモノヲ檢出スヘシ

筋元質ハ刺衝ヲ起コシ顆粒狀トナリ且變質ヲ誘起スヘシ故ニ其萎縮症ハ尋常ノ單純ナル萎縮症ト異ナリ結締組織ノ過剰ヲ致スモノナリ

病機增進ノ極度ニ達スルトキハ患部ノ諸筋ハ灰白色或ヒハ帶黃白色トナリ近傍ノ脂肪及ヒ結締組織ト誤認スルコト鮮ナカラス

本症ハ大抵十歲以下ノ小兒ヲ侵カスモノナリ

「エルブ」氏ノ統計ニ據レハ患者ノ總數八十名ニ於テ年齡一歲ヨリ五歲ノ間ニアルモノ四十二人六歲ヨリ十歲ニ至ルモノ二十二人十一歲ヨリ十六歲ノ間ニアルモノハ八人ニシテ二十二歲ヨリ四十二歲ノ間ニアルモノ唯タ五人ニ過キサリシト云フ

遺傳ハ本症ノ發生ニ於テ最モ重要ナル感動ヲ有スルモノナリ其他數多ノ原因ヲ論スルモノアリト雖トモ皆ナ遺傳ノ勢力ニ比スレハ殆ント其感動ヲ有セサルモノヽ如シ何ントナレハ諸般ノ經驗ニ徵スレハ必ラス特異ナル神經質ノ素因ヲ有スルヲ以テナリ

當初下脚ニ於テ疾患ヲ起コスモノ多シ偶マ股部ニ於テ發スルアリト雖トモ頗フル稀レナリ

亦タ肥大症ヲ起コサヽルニ當テ筋肉ノ萎弱ヲ起コシ疲勞スルヿ甚タシク之レカ爲メニ屢々蹉跌シ易ク或ヒハ轉倒シテ步行頗フル困難ナリ

暫時ニシテ患兒病幕ヲ出テ起ツヿ能ハス必ラス保介ヲ要スヘシ加之ノミナラス步行蹣跚トシテ恰モ家鴨ノ步スルカ如トシ

股部ノ諸筋ヲ侵カストキハ兩手ヲ以テ股脚ヲ扶持スルニアラサレハ起立スルヿ能ハス又椅子ニ坐セントスルモ自在ナラサルヲ以テ俄然椅上ニ衝突スヘシ

横臥スルトキハ兩脚互ヒニ披開シテ足蹠面ハ相對シテ膝蓋關節及ヒ股關節ヲ屈曲スヘシ足部ニアリテハ諸趾ヲ屈スルノ外諸般ノ運動悉トク自在ナラス又タ股脚ニアリテハ膝關節ヲ屈スルノ外股部ノ運動充分ナラサルモノ多シ

患者ヲシテ起立セシムルトキハ其症候最モ判然タリ脊椎ノ腰部ハ內方ニ彎曲シ（脊椎彎曲症）背部ハ外方ニ屈曲シテ佝僂病ノ狀ヲ呈スヘシ

患部ノ四肢ハ頗フル其容積ヲ增加スト雖トモ其勢力ニ至テハ却テ減少スルモノナリ

上肢ヲ侵カストキハ增進性筋萎縮ノ症狀ヲ呈スヘシ或ヒハ同時ニ兩側ヲ襲フヿアリ

亦タ筋纖維ノ消滅セサルニ當テ他ノ疾患ノ如ク筋組織ノ拘攣ヲ將來スルヿアリ

筋元質ノ減少スルニ從テ益々筋電氣ノ收縮力ヲ消失スヘシ特ニ此症ニアリテハ筋元質ヲ被包スル所ノ脂肪及ヒ纖維組織ノ凝聚スルヿ多キヲ以テ明亮ナリトス

本症ノ患者ニアリテハ多少背部ニ疼痛ヲ起シテ患部ニ波及スルヲ覺フヘシ

肥大シタル部位及ヒ萎縮シタル部位共ニ体溫ノ減少スルヲ見ルヘシ

○腦脊髓諸病

○腦脊髓增數硬結 原名 モルチプルスクレロシスオフブレイン エンドコルド MULTIPLE SCLEROSS OF BRAIN & CORD.

腦脊髓增數硬結トハ腦、華魯里氏橋、延髓、小腦及ヒ脊髓ニ於テ硬結シタル組織ノ斑点ヲ現出スル所ノ一症ヲ徴スルノ文字ナリ

偶マ腦硬結及ヒ脊髓硬結ナル名稱ヲ以テ區別スルヿアリト雖モ此二症ハ各々特立シテ發スルコトナキヲ以テ寧ロ二症ヲ併稱スルノ文字ヲ以テ恰當ナリトス

大家「チャーコット」氏ハ之レヲ瀰蔓性硬結症ト稱セリ

原因

本症ニアリテハ男女共ニ同一ノ比例ナリ

年齡ニ於テハ幼年ヨリ中年ニ達スルノ間ニ發スルモノ多ク四十五歲以上及ヒ十歲以下ノモノニアリテハ極メテ稀レナリ

最モ有力ナル素因ハ遺傳ナリ

寒冷ニ暴露シ饑餓ヲ覺エ、卑濕ナル住居ヲ占メ或ヒハ身体溫煖ニシテ發汗ノ狀ヲ呈スルモノ俄然寒冷濕潤ニ暴露スルカ如キハ亦タ其原因トナルカ如シ然リト雖モ患者ノ体質ニ於テ其素因ヲ有スルニアラサレハ之レヲ確定スルヿ能ハサルナリ

強劇ニシテ經久ナル精神ノ感動、聲屬、痛心其他抑壓ヲ起ス所ノ諸原因ハ亦タ本症ノ發生ヲ誘起スルコトアリ

本症ハ急性傳染病ノ快復期ニ於テ發スルコトアリ

病理的解剖

腦及ヒ脊髓ニ於ケル疾患ハ肉眼ヲ以テ見ルトキハ軟膜ノ下部ニ光澤ヲ放ツ所ノ小結節ヲ生スルニアリ

小結節ハ判然區畫シタル斑点ヲ現ハシ偶マ脊髓ノ表面ヨリ稍々突出スルヿアリ或ヒハ陷沒スルヿアリ或ヒハ同一ノ平準ヲナスヿアリ然レトモ必ラス近傍ノ健康組織ト區別スルヲ得ヘシ

斑点ハ稍々膠質ニ類シ半透明ニシテ微細ナル白色ノ線ヲ畫出シ其形正圓ナルアリ楕圓ナルアリ或ヒハ不整ニシテ崩壞セントスルモノアリ普通ノモノニアリテハ其質緻密硬固ニシテ軟骨ノ如ク之レヲ截斷スレハ光澤ヲ放ツヘシ

小結節ノ大小一樣ナラス最モ微細ナルモノニアリテハ顯微鏡ヲ藉ルニアラサレハ檢出スルコト能ハスト雖モ巨大ナルモノハ殆ント胡桃大ニ達スルモノアリ

腦ニアリテハ灰白質ニ於テ發スルヿナク多クハ半球体、腦室、視神經床、線條體、腦脚、華魯里氏橋及ヒ小腦ノ白質ヲ侵カスヿ多シ

脊椎ニアリテハ白質及ヒ灰白質共ニ小結節ヲ生シ又脊髓柱ニ於テモ之レヲ見ルヘシ

神經中樞ノ如ク神經根及ヒ幹ニ於テモ亦タ同一ノ沈着ヲ生スルモノナリ而シテ其結節ハ神經元質ノ結締織、新生シタル纖維狀結締織、神經元質ノ遺殘物、脂肪及ヒ顆粒細胞其他澱粉樣体ヨリ成ルモノナリ

神經纖維ニ於テハ神經元質ノ結締織ノ成形機充盛ニ因テ當初髓質ノ鞘膜ヲ侵蝕シテ吸収ヲ起コサシメ終ニ消滅シテ殘ル所ノモノハ唯タ圓筒狀軸ノミ而レトモ此軸モ亦タ末期ニ至ルトキハ硬結ヲ起コシ尋テ消滅スルカ爲メニ結局ニ至ルトキハ新生シタル纖維組織ヲ以テ補生シタル蜘蛛網絡ノ狀ヲ呈シ中ニ遊離シタル核、澱粉樣体及ヒ脂肪ヲ含有スヘシ

脈管壁ニ於テモ亦タ同一ノ變狀ヲ起コシ當初脈管壁ノ外膜ヲ侵カシ終ニ周圍ノ淋巴腔ニ蔓延スルヲ見ルヘシ既ニ末期ニ達スルトキハ脈管ノ外膜ト周圍ノ結締織ト密着シ其他ノ膜質ハ（中膜及ヒ内膜ヲ云）結締織ノ肥大ニ因テ侵蝕セラレ夥多ノ核質ヲ生シ又タ脂筋變質ヲ起コシ脈管ノ周圍ニアル淋巴腔内ニハ脂肪元質ノ凝聚ヲ起コシ終ニ脈管ノ内膜ヲ侵蝕スヘシ

徴候

通常本症ニ於テ現ハル、所ノ症候三種アリ即チ腦症、脊椎症及ヒ腦脊椎症

是レナリ然リト雖モ脊椎症及ヒ腦症ハ各々特別ニ來ルコト鮮ナク多クハ二症共ニ併發スルヲ常トス唯タ腦脊椎硬結症ヲ發スルモノニ於テ偶々腦症ノ前徴ヲ呈シ或ヒハ脊椎症ノ前徴ヲ發スルカ如キ差異ヲ生スルコトアルノミ而レトモ二症共ニ其病歴ヲ檢スルトキハ容易ニ認知ルヲ得ベシ

病初ノ方法ニ數アリ一ハ漸次ニ徐發スル所ノモノニシテ一ハ一頓ニ暴發スル所ノ刺症ナリ

徐發性ノモノニアリテハ專ハラ腦ニ基因スルアリ或ヒハ脊椎ニ基因スルモノアリ

腦ニ基因スルモノニ於テハ頭痛眩暈、嘔吐或ヒハ卒中狀ノ發作ヲ將來シ歩行蹣跚トシテ確實ナラス一肢若クハ一族ノ諸筋ニ震戦ヲ起コシ五官ノ變調（視、聽、味ノ三官）又タハ諸覺ノ知力變狀或ヒハ言語ノ澁滯ヲ發スヘシ

脊椎ニ基因スルモノハ歩行不整ニシテ活潑ナラス神經變調ニアリテハ四肢ニ於テ知覺脱失、震顫及ヒ疼痛ヲ發シ筆記セントスルモ手指ノ諸筋ニ於テ協同作用ヲ失スルカ爲メニ頗フル困難トナリ又タ強劇ナル發作狀ノ胃痛ヲ發スヘシ

知覺神經ニアリテハ硬結性小結節ノ部位ニ從テ諸種ノ疼痛ヲ發スルモノナリ

第五對神經ノ分布スル部位ニアリテハ顔面ニ疼痛ヲ發スヘシ其他上膊及ヒ下肢ニ於テ

ハ急劇ナル刺痛ヲ感スルノミナラス常ニ瀰蔓性ノ壓痛ヲ覺エ腹肚ヲ圍繞スル所ノ帶狀ノ絞痛ヲ起コシ且背部及ヒ臀部ニ於テモ亦タ疼痛ヲ發スヘシ

病機增進スルトキハ疼痛ヲ發スルヿナク却テ全身諸部ノ知覺脫失及ヒ疼痛不感ノ症狀ヲ現出スヘシ

四肢ノ位置又タハ重量及ヒ抗抵ノ力ヲ感得スル二變常ヲ起コシ或ヒハ全然脫失スルコトアリ或ヒハ觸覺及ヒ疼痛ノ感受力ノミヲ保存スルコトアリ

運動神經ニアリテハ當初一脚ニ於テ運動微弱トナリ尋テ兩側ニ波及シ暫時ニシテ上肢ヲ侵襲スヘシ或ヒハ其順序ヲ轉倒スルコトアリ

運動及ヒ歩行ニ困難ヲ起コスハ麻痺ニ基因スルノミナラス強直性痙攣ヲ發スルカ爲メニ來ルモノナリ

伸筋ノ強直性痙攣ハ轉化シテ永遠恢復セサル所ノ攣縮及ヒ梗直トナルコトアリ

脊椎後柱ニ於テ巨大ナル硬結性小檪ノ沈着ヲ生スルトキハ歩行ニ際シ平衡力錯雜ヲ起コスノミナラス神經變調ノ症狀ヲ呈スヘシ試ミニ眼球ヲ閉鎖シテ歩行セシムルトキハ一種特異ナルヲ知ルヘシ

上肢ニ於テモ亦タ同一ノ變狀ヲ起スヘシト雖ヒ下肢ノ如ク著明ナルモノ鮮ナシ

最モ確實ナル徵候ハ隨意筋ノ運動ニ際シ震戰ヲ發シ其運動ヲ歇止スルトキハ同時ニ鎭靜スルニアリ吾人ハ之レヲ振盪性ノ震戰ト稱ス

「エム、チャーコット」氏ノ說ニ據レハ本症ニ於テ現ハルヽ所ノ震戰ハ一部ノ隨意筋ニ於テ運動ヲ起サントスル時ニ俄然發作スルモノニシテ其筋ヲシテ全然靜止セシムルトキハ震戰ノ症候モ亦タ鎭靜スルモノトナセリ

偶マ震戰ノ症候ヲ現出セサル所ノモノヲ見ルコトアリト雖ヒ斯ノ如キ變狀ハ素ヨリ例外ニ屬スヘシ

或ヒハ當初震戰ヲ起コシ暫時ニシテ退消スルコトアリ此時ニアリテハ持續性ノ攣縮ヲ發スルニ當テ退消スルヲ常トス故ニ患者ノ病歷ヲ探索スルニアラサレハ震戰ヲ發シタルヲ知ルヿ能ハサルナリ

患者自ツカラ其症候ニ注目スルコト益々精密ナルトキハ震戰ヲ發スルコト益々廣大ニシテ強劇ナルモノトス試ミニ玻璃杯ヲ取リ水ヲ盛リ之レヲ飲マシムルトキハ忽チ水液ノ溢出ヲ起コシ又ハ水杯ヲ齒牙ニ衝突スルカ如キ症狀ヲ呈スヘシ

患者最モ謹愼注意スル所ノ筋力ノ操作ヲ營ムトキハ被患ノ手足ノミナラス頭部頸部及ヒ軀幹ニ於テ暴激ナル震戰ヲ發スヘシ

反射機ノ障害一樣ナラス故ニ症ニヨリテハ唯タ反射機能ノ減少ヲ起コスニ過キサルヿアリ或ヒハ全ク脫失スルコトアルカ如シ然リト雖ヒ腱ノ反射機ノ如キハ却テ甚タシク增劇スルコト多シ

末期ニ至ルヒハ小便失禁、陰萎症又タハ便秘ノ如キ膀胱、生殖機及ヒ直腸ノ變常ヲ將來スヘシ

脊椎ノ疾患ヨリ斯ノ如キ諸症候ヲ呈スルノミナラス判然タル腦症ヲ現出スヘシ

精神上ノ官能ニ於テモ亦タ變調ヲ起スヘシ故ニ病初ニアリテハ患者ノ性質常態ヲ失シテ容易ニ感動ヲ起コシ忽チニシテ喜笑シ忽チニシテ泣哭スルモノアリ加之ノミナラス常ニ感動シ易キヲ以テ瑣少ノ事實ニ於テモ憤激スルカ如キ豫想セサル所ノ變狀ヲ呈スヘシ

病初ヨリ記憶力ノ減少スルコト甚タシク其他理會、判斷及ヒ辨識ノ力モ亦タ頗フル衰耗スルモノナリ

暫時ニシテ精神錯誤ニ基因スル諸樣ノ變症ヲ現出ス故ニ鬱憂ノ症狀ヲ呈スルアリ或ハ刺衝性ノ癲狂ヲ發スルアリト雖ヒ終ニ痴獃狀ニ陷ヰルモノ多シ

精神上ノ變調ヲ發スルノ期ニ於テ眩暈、劇烈ナル頭痛又タハ頑固ナル不眠症ヲ將來シ時

々卒中狀ノ發作ヲ起コシ尋テ全身不遂ヲ發スヘシ

言語及ヒ聲音ノ調節ニ於テモ亦タ特異ノ變症ヲ現出スルモノナリ假令ヘハ談話ニ際シ發聲スルコト頗フル緩徐ニシテ吃訥スルカ如ク益々不明トナルカ如トシ

舌、唇、口蓋及ヒ咽頭ノ諸筋ニ萎弱ヲ起コシ之レカ爲メニ咀嚼及ヒ嚥下ノ作用ヲ妨クルコト甚タシキモノアリ

眼筋モ亦タ同一ノ侵襲ヲ被ムルヒハ重視症、眼球、横轉及ヒ弱視ノ如キ諸症候ヲ將來シ終ニ失明スヘシ

經過、時期及轉歸

本症ニ罹ルヒハ皆ナ悉トク同一ノ經過ヲ取ルモノニアラサルナリ

腦症強劇ニシテ脊椎ノ症候微弱ナルモノハ之レヲ腦症硬結ト稱シ之レニ反シテ脊椎症ノ過激ナルモノハ之レヲ脊椎硬結ト云フ然リト雖ヒ大家「エルブ」氏ハ判然此二症ヲ區別スルハ實ニ至難ナリト云ヒリ

「チヤーコツト」氏ハ本症ノ經過ニ據テ之レヲ三期トナセリ

第一期ハ病初ヨリ持續性攣縮ヲ發スルニ至ルノ機ニメ大抵二年乃至六年間持續スヘシ

第二期ハ運動機ノ官能殆ント廢絶シテ精神ノ變調ヲ起コシテ特リ有機的官能ヲ存スル

カ爲メニ榮養上ノ障碍ヲ見ルコトナク其時期ハ四年ヨリ少カラス六年ヨリ多カラス

第三期ハ榮養缺乏シテ消化機ニ變調ヲ起コシ嚥下益々困難トナリ膀胱麻痺ニ因リテ膀胱炎ヲ將來シ且蓐瘡ヲ發スヘシ又タ硬結症ノ延髓ニ蔓延スルカ爲メニ呼吸及ヒ循環ノ兩機共ニ不整トナリ卒中狀ノ發作ヲ將來シ屢々他ノ疾患ヲ併發スヘシ而レ𪜈此期ハ通常少馬ニシテ終ハルモノナリ

本症ノ時期ヲ合算スレハ大抵一二年乃至二十年ノ間ニアリ而シテ大數ノ平均比例ハ五年乃至十年ナリ

轉歸ハ虛脱或ハ卒中ニ陷ヰルヿアリト雖𪜈多クハ肺患ニ因テ命期ヲ終ハルモノナリ故ニ吾人カ今日ニ至ルマテ見ル所ノモノハ死亡ノ轉歸ヲ免ルヽコト能ハサルカ如シ

偶マ輕快シタルカ如キ報告ヲ得ルコトアリト雖𪜈大抵虛妄ニ過キサルナリ

診斷

病機增進ノ極度ニ達スル𪜈ハ諸症候ノ增劇スルヲ以テ敢テ診斷ニ困ルシムコトナシ而レトモ未タ重症ニ陷ヰラサルモノニアリテハ間マ困難ヲ覺ユルコトアリ

腦脊椎硬結症ハ屢々震戰麻痺ト誤認スルコトアリ而レ𪜈硬結症ハ幼兒及ヒ若年ノ人ヲ侵カシ震戰麻痺ハ老人ニ於テ發スルモノナリ

又硬結症ニ於テ現ハルヽ所ノ震戰ハ身体ヲ靜止スル𪜈現ハルヽコトナク隨意ノ操作ニ

因テ增劇スト雖𪜈震戰麻痺ニアリテハ全ク反對ニシテ靜止スル𪜈モ尚ホ持續スルノミナラス意識ニ因テ操作スル𪜈ハ却テ減少スルヲ見ルヘシ

硬結症ニアリテハ當初麻痺或ヒハ萎弱ヲ起コシ尋テ震戰ヲ發スルト雖𪜈震戰麻痺ニアリテハ震戰ヲ發スルノ後ニアラサレハ麻痺若シクハ萎弱ヲ將來スルヿナシ

硬結症ニ於テハ談話、視覺及ヒ運動機ニ於テ特異ノ缺乏ヲ現ハスト雖𪜈震戰麻痺ニアリテハ毫モ其症候ヲ呈スルコトナシ

硬結症ハ又タ運動機ノ神經變調ト誤認スルコトアリ

硬結症ニアリテハ精神ノ變調、麻痺攣縮、震戰及ヒ言語ノ變調ヲ發シ筋及腱ノ反射機能增進スヘシ而レ𪜈運動機ノ變調ニ於テハ毫モ其症候ヲ呈スルヿナク麻痺或ヒハ攣縮ヲ發セスシテ神經ノ變調ヲ現ハシ又疼痛ヲ發シ生殖機ニ於テ特異ノ變狀ヲ起コシ筋腱ノ反射機ヲ有スルコトナシ

治則

今日ニ至ルマテ未タ一モ全治シタルモノヲ見ス而シテ療法ニ至テハ特効藥ト稱スルモノ頗フル多シ

大家「エルブ」氏ハ一患者ニ於テ砒石ノ皮下注射法ヲ施コシ偉効ヲ奏セリト云フ

又タ未タ重症ニ陷ラサル𪜈ハ硝酸銀ノ内服ニ因テ良蹟ヲ收ムルコトアリ

偶マ平流電氣ヲ通シテ治癒ニ趣ムクコトアリ

大賢「ハンモンド」氏ハ格魯爾重土ヲ以テ効驗アルモノトナセリ

最モ稱讃スル所ノ治法ヲ擧クレハ平流電氣ヲ通シ冷水治法ヲ施コシ内服ニハ肝油及ヒ硝酸銀ヲ投スルニアリ

予ハ硝酸銀ヲ用フルニ當テハ中毒性ノ斑点ヲ生スルノ恐レアルヲ以テ常ニ戒心センヿヲ忠告セサルヘカラス

○ 麻痺狂 テメンチヤ パラリーチカ DEMENTIA PARALYTICA.

釋義

麻痺狂トハ特異ナル精神ノ變調ヲ現ハス所ノ腦ノ萎縮性變狀ニシテ全身麻痺ヲ併發スルモノナリ

原因

本症ハ男子ヲ侵カスコト最モ多ク其比例ハ男子四名ニ於テ婦人一名ナリ

年齡ニ於テハ生活機能ノ最モ活潑ナル時即チ二十五年ヨリ四十五年ノ間ニ發スルモノナリ

遺傳ハ重要ノ原因トナルカ如シ而レ𪜈吾人ハ未タ精確ナル統計ヲ得ルヿ能ハサルナリ

操作過度、亞爾個兒ノ暴飲其他房事過度ナルカ如キハ皆ナ本症ヲ誘起スル所ノ原因中最モ有力ナルモノトス

病理的解剖

本症ニ於テ最モ確實ナル變狀ハ腦ノ灰白質及ヒ白質ノ萎縮症ニ因テ其重量及ヒ容積ヲ減スルニアリ

軟腦膜ノ全部若シクハ小溝ニ於テ浮腫狀ヲ呈シ顱頂部ノ腦葉ト後頭部トノ間タニ多量ノ水液ヲ撿出スヘシ又タ腦室殊ニ腦角ノ膨大ヲ起コシ側竇ノ被膜肥厚シテ顆粒狀沈着ニ因テ粗糙トナリ腦廻轉萎縮シ殊ニ後葉ニ於テ著ルシキモノトス其他白質及ヒ灰白質共ニ非薄トナリ萎縮スルヲ見ルヘシ

軟腦膜ハ其造構ヲ變シ殊ニ脈管ノ近傍ニ於テ著シルシク帶黄色ノ滲出物ニ因テ斑点ヲ現出シ容易ニ腦質ヨリ剝離スルヲ得ヘシ

硬腦膜モ亦タ甚タシキ變狀ヲ起コシ頭蓋骨ニ密着シ滲出物ノ爲メニ肥厚シ偶マ血性滲漏液ヲ以テ被包スルコトアリ

脈管ニ於テモ亦タ特異ノ變狀ヲ起コシ病初ニアリテハ膜質ニ於ケル梭ヲ增悪スヘシ加之ノミナラス脈管ノ外圍ニアル所ノ淋巴腔内ニ紅白血球ノ充滿スルヲ常トス

脈管壁ハ脂肪變質或ヒハ膠樣變質ヲ起コスヘシ

灰白質ノ神經節細胞ハ萎細性ノ變狀ヲ呈シ終ニ破壞スルヲ見ルヘシ

脊椎ノ膜質モ亦タ腦膜ト同一ノ變狀ヲ起コスヿアリト雖モ必發ノ症狀ニアラサルナリ

脊髓ノ實質ニ於テハ重要ノ變化ヲ現出スヘシ故ニ末期ニ至ルトキハ膠樣變質ニ因テ固有

解剖的元質悉トク消滅シテ毫モ其痕跡ヲ逗メサルヘシ

脊髓後柱ハ背椎及ヒ腰椎ノ全長ニ跨カリ侵蝕スト雖モ頸椎ニアリテハ特ニ「ゴル」氏柱

ヲ以テ重要ナル部位トナセリ

症ニヨリテハ後柱及ヒ側柱ヲ侵カシ顆粒狀脊髓炎トナリ尋イテ結締組織ノ成形械亢盛

ヲ起コスコトアリ

偶マ同一ノ患者ニ於テ二種ノ變狀ヲ併發スルコトアリ

顆粒狀脊髓炎ハ固有ノ脊髓實質ニノミ限局セスシテ延髓、華魯里氏橋及ヒ大腦脚ニ波

及スヘシ

又タ後柱ト共ニ神經ノ後根ヲ侵カスコトアリト雖モ末梢神經ヲ襲フモノニ至テハ極メ

テ鮮ナシトス

徵候

本症ニ於テ現ハル、所ノ症候ヲ分テ二種トス精神上ノ變常及ヒ運動機ノ

症候是レナリ

本症ニ於テハ精神上ノ變調ニ依テ患者ノ行爲ヨリ生スル所ノ危險ナル併發症ニ基因ス

ルヲ以テ其現症ヲ精密ニ探知スルコト最モ緊要タリ

偶マ運動機ノ變調ヲ發スルノ後ニ精神上ノ症候ヲ呈スルコトアリト雖モ多クハ其反對

ナルモノニシテ當初精神錯誤ノ徵候ヲ現出スヘシ

患者ノ性質、及ヒ慣習共ニ平素ト其趣キヲ異ニシ深沈温和ナルモノモ忽チニシテ憤怒シ

或ヒハ他人ト爭論スルコト甚タシキモノ多シ

病初ノ徵候ハ頭痛及ヒ間歇性ノ眩暈ヲ發シ又タ瞳孔ノ不等ヲ現出スルニアリ

新發ノモノニアリテハ殊ニ記憶力ノ衰耗ヲ來タスヿ多ク殆ント放心シタルカ如キモノ

アリ

唇筋及ヒ顔面筋其他舌体ノ震戰ヲ發スルコトアリ此時ニアリテハ言語強濁ニシテ咽頭

ヨリ發スルカ如ク且吃訥スルヲ常トス聲音ノ調節モ亦タ變換シテ鼻聲トナリ低調ナル

モノハ高調トナルヘシ

舌体諸筋ニ萎弱及ヒ纖維性震戰ヲ起コスノミナラス唇筋ノ萎弱ニ因テ發聲ニ當テ唇音

ヲ發スルコト頗フル困難トナルヘシ

初起ニ於テ患者ノ思慮頗フル迂濶ニシテ自己レカ平素判斷スルヿ容易ナル事物ニ遭遇スルモ忽チ狼狽スルコト多シ

未タ精神上ノ變調ヲ呈セサルニ當テ非常ノ大事業ヲ企圖シ或ヒハ高價ノ物品ヲ購求シ往々其行爲ニ於テ怪詭ニ耐エサルモノアリ故ニ未タ其本症タルヲ認定セサルノ時ニ於テ屢々患者ト紛爭ヲ起コスコトアリ

暫時ニシテ思慮錯雜スルヿハ妄誕無稽ニシテ其論スル所ヲ聽ケハ不朽ノ事業ヲ立ツルト云ヒ一大發明ヲ企タテタリト云ヒ數十里ノ高樓ヲ築クト云ヒ月界ニ鐵道ヲ架スルト云ヒ無數ノ富ヲ有スルト云ヒ甚タシキハ自ツカラ大王ト稱シ怪力ヲ有スルカ如ク一臂能ク千人ニ敵スルト云フモノアリ

患者自ツカラ想定シタル事物ヲ忘却スルコト頗フル迅速ナルヲ以テ一タヒ虛妄ノ說ヲ信スルヿハ益々迷霧ヲ脫スルヿ能ハサルヘシ故ニ自己ノ身上ニ關シ重要ナルコトニ過フモ毫モ意ニ介スルヿナク幸福ヲ享クルモノヽ如シ

既ニ此期ニ達スルヿハ總テ他人ニ對スルノ義務及ヒ自己ノ營業ニ注目セサルノミナラス親族或ヒハ自身ノ職掌ヲ勤ムルヿナク甚タシキハ他人ノ財物ヲ窃ンテ其身ノ罪人タルヲ悟ラサルニ至ル

本症ノ患者ハ皆ナ悉トク自己ノ身上ノミナラス人間社會ノ義務ヲ誤解シ以テ揚々自得スルモノニアラス偶マ鬱憂ノ症狀ヲ呈スルコトアリ此時ニアリテハ神思抑壓スルコト最モ甚タシク自己レカ棲息スル所ノ人間世界ヲ以テ憂苦ノ集合スル所トナセリ

症ニヨリテハ精神上ノ諸症候發現スルニ際シ憤怒ニ耐エサルカ如キ發作ヲ起コシ人ヲ恐レサルコト殆ント盲人ノ如ク又タ其作用ヲ制止スルコト能ハサルコト癲癇症ニ類スルモノアリ

輕微ノ抗抵ヲ試ムルモ忽チ憤怒シ易ク瑣少ノ變事ニ遇フモ恐駭シテ其措ク所ヲ知ラス甚タシキニ至テハ竊カニ自己レカ平素信任セシ所ノ無二ノ親友ヲ殺サンヿヲ謀カルモノアリ既ニ此期ニ達スルヿハ暴劇ナル刺衝ヲ起コシ恰カモ急性癲狂ヲ發シタルモノヽ如シ而シテ死ニ至ルマテ刺衝ノ症狀ヲ呈シ終ニ癲狂性虛脫ニ因テ斃ルヽアリ或ヒハ轉化シテ痴獣狀トナルコトアリ

斯ノ如キ刺衝ノ發作ニ因テ体温ノ昇隆スルヲ見ルヿハ恐ラクハ慢性腦膜炎ノ爲メ誘起セラルヽモノナランカ故ニ解剖上ノ變狀ニ於テモ亦タ往々其痕跡ヲ見ルヿアリ

同一ノ患者ニ於テ鬱憂ノ症狀ト喜悅ノ症狀トヲ發スルコトアリ而シテ喜憂ノ情ヲ變スルコト迅速ニシテ實ニ瞬間時ニアリ

本症ニアリテハ每常必ラスシモ精神ノ錯誤ヲ將來スルモノニアラサルナリ

又タ毫モ精神ノ錯誤ヲ發スルヿナク知力衰耗シテ漸々痴獣狀ニ陷ルヿアリ

本症ノ經過中偶マ弛期ヲ將來シテ記憶力及ヒ判斷力共ニ廻復シテ自ツカラ其病狀ヲ覺悟スルニアラサレハ終ニ知力衰弱ヲ起コスヲ以テ最モ明亮ナル精神上ノ症候トス

諸症候共ニ增進ノ極度ニ達スルヒハ縱令ヒ麻痺ヲ起スモ尚ホ患者ノ勢力頗フル強悍トナリ平素ニアリテハ榮養不全ナルカ爲メニ忽チ虛脫スルカ如キ症狀ニ陷ルモ毫モ苦悶ヲ感ルコトナク却テ磊落粗暴トナルヲ見ルヘシ

運動機ニ於テハ最モ重要ナル症候ヲ發スヘシ當初下肢ニ於テ協同作用ノ變調ヲ起コシ兩眼ヲ閉鎖シテ歩行セシムルヒハ屢々蹉跌シ易ク終ニ上肢ニ蔓延スルモノ多シ

初起ニアリテハ患者ヲシテ筆記セシムルヒハ運用揮畫頗フル不正トナリ文字其形ヲナサス或ヒハ手指震戰シテ自在ナラス終ニ執筆ヲ廢スルニ至ルモノアリ

運動機ノ神經變調ニ基因スル所ノ症候ハ一層強劇ニシテ重視症、弱視症又タハ失明ノ如キ諸般ノ視力變常ヲ起コシ軀幹ノ周圍ニアリテハ處々ニ知覺脫失或ヒハ變常ノ点ヲ現出シ又タ便秘、尿閉或ヒハ失禁ヲ將來スヘシ

吾人カ想像スル所ヲ以テスレハ斯ノ如キ神經變調ハ脊椎後柱ニ沈着シタル硬結性小結

節ニ基因スルカ如シト雖ヒ歩行蹣跚トシテ保分ヲ要シ又タ知覺脫失ヲ將來スルモノニアリテハ少數ノ患者ニ於テ顆粒狀脊髓炎ニ因テ側柱ヲ侵カスコトアリ

患者ノ過半數ニアリテハ顏面神經ノ羸弱ヲ起コシ終ニ麻痺狀ニ陷ルノミナラス全身ノ諸筋ヲ侵襲スルニ至ルコトアリ

卒中狀ノ發作ヲ將來スルノ後屢々運動機ノ半身不遂ヲ發スルカ爲メニ其症候ヲ証知スルコトアリ或ヒハ本症ノ經過中其晴期ヲ問ハスシテ來ルコトアリ

又タ運動機ノ半身不遂ヲ起コスヿナク特リ知覺機ノ半身不遂ヲ現出スルモノニアリテハ俄然知覺脫失ノ發作ヲ將來スヘシ

運動機及ヒ知覺機ノ半身不遂症ハ共ニ速ヤカニ退消スト雖ヒ既發ノ症候ニ因テ精神上ノ變調ヲ貽コスモノ多シ

本症ノ經過中癲癇狀ノ發作ヲ將來スルコトアリ而シテ其症狀一樣ナラス故ニ或ヒハ半身ヲ侵カスモノアリ或ハ全身ヲ襲フモノアリ或ヒハ輕症ナルアリ或ヒハ重症ナルモノアリ

偶マ搐搦狀ノ症候ヲ發スルヿナク唯タ知覺脫失シテ輕微ノ疼痛ヲ發スルモノアリ之レヲ小癲癇ト稱セリ

發作症候退消スルノ後昏瞶ニ陷ヰリテ斃ルヽモノアリ或ヒハ精神上ノ症候漸々回復シ全然輕快ニ趣クモノアリ

經過、時期及轉歸

麻痺狂ハ元ト慢性病ナリト雖ヒ病初ノ徴候ヲ發現スルノ期ヲ撿出スルヿ能ハサルヲ以テ其時期ヲ確定スルヿ頗フル困難ナリ

偶マ本症ノ時期ヲ以テ一年乃至十年ノ間ニアリト云フモノアリ或ヒハ一年以内若シクハ數月間ニシテ斃レタル報告ヲ見ルヿアリト雖ヒ吾人ハ其診斷ニ於テ疑ヲ容レサルヘカラス

卒中狀ノ症候ヲ以テ起コルモノニアリテハ病機增進スルコト頗フル迅速ナリ而シテ極期ニ達シテ更ニ發作ヲ將來スル時ハ當初被ムル所ノ障碍ハ殆ント回復スルモ全体ノ病機ハ益々增劇スルヲ常トス

普通ノ經過ヲ取ルモノニアリテハ萎弱ノ症候益々增劇シ面貌慘憺トシテ言語ヲ好マス全身ノ筋力弛緩スルコト甚タシク殊ニ談話若シクハ感動ヲ起コスヒハ顏面筋ノ運動不整トナルヲ見ルヘシ

言語益々訖訥シテ流暢自在ナラス加之ノミナラス記憶力モ亦タ衰耗スルカ爲メニ談論說話ニ於テ充分ニ言語ヲ使用スルコト能ハサルニ至ル

隨意筋ノ作用頗フル衰耗スルヲ以テ患者毫モ運動ヲ營ムコト能ハス故ニ常ニ椅坐シテ歩行ニ懶ウク或ヒハ病蓐ニ卧シテ放尿便通ニモ起ツコト能ハサルニ至ル

末期ニ迫ル時ハ全身ノ榮養益々缺乏シ筋肉羸瘦シテ虚脱スルコト最モ甚タシ

偶マ顏面廓大シテ桑軟トナリ肚腹モ亦タ突隆スルコトアリ

舌体ニ萎弱ヲ起コシ益々增劇スルヲ以テ嚥下困難トナリ偶マ食物ノ喉頭ニ流泄スルコトアルヒハ忽チ窒息狀ノ發作ヲ將來スヘシ

本症ニ於テ肺炎ヲ誘發スルカ爲メニ死ヲ致スコトアリ或ヒハ卒中狀ノ發作ニ因テ斃ルヽモノアリ或ヒハ發作後ニ至リ昏瞶ニ陷テ死スルモノアリ或ヒハ蓐瘡ニ基因スル所ノ虚脱ヲ將來スルモノアリ

肺勞ヲ繼發スルカ爲メニ不幸ニ陷ヰルモノモ亦タ鮮ナカラサルモノトス

偶マ重症ニシテ殆ント回復ノ望ナキモノニ於テ全身麻痺ノ症狀大ニ輕減スルヿアリ言語ノ作用自在トナリ諸筋ノ萎弱モ亦タ順テ退消シ体力殆ント健態ニ復シ而シテ理會及ヒ判斷ノ力モ亦タ整復スルノミナラス絶エテ精神錯誤又ハ失常ノ症候ヲ呈セサルニ至ルアリ斯ノ如キ輕減ノ症狀ヲ呈スルコト暫時ニシテ更ニ再ヒ增惡シテ重症ニ陷ヰルコト頗フル迅速ナリ

症ニヨリテハ大ヒニ其狀ヲ異ニシテ殆ント健全ノ人トナリ朋友知己ノ交際及ヒ平素ノ職業ニ至ルマテ毫モ障碍ナキニ至ルモノアリ然リト雖ヒ斯ノ如キ好結果ヲ見ルハ頗フル望外ノ僥倖ト云フヘキノミ故ニ病初ヨリ或心注意シテ其治法ヲ怠ラサルモノニアラサレハ敢テ望ムヘカラサルナリ

本症ハ元ト欝憂狀ノ疾患ニシテ其經過及ヒ結局ニ至テハ保証スルヿ能ハサルモノ多シ

診斷

麻痺狂ハ其症候ヲ審査スルヒハ容易ニ鑑別スルヲ得ヘシ假令ヘハ患者ノ思慮茫乎トシテ確實ナラス全身ニ麻痺ヲ起コシ記憶力欠乏スルノミナラス諸機ノ感動ヲ起コスヿナキヲ以テ判然認定スルヲ得ヘシ然リト雖ヒ諸症候共ニ未タ充分ノ度ニ達セサルヒハ診斷ニ困シムコト鮮ナカラサルナリ

脊髓後柱硬結症トヲ區別スルニハ言語及ヒ知力ノ障碍ヲ起コシ神經變調ノ症候ト共ニ麻痺ヲ將來スルニアリ

老耄ト本症トノ差異ハ思慮茫然トメ動作ニ懶ウク言語ニ際シ特異ノ變調ヲ起コシ神經變狀及ヒ麻痺ヲ發スルノミナラス年齡ニ依テ區別スルヲ得ヘシ

治則

本症ノ治法ニ於テハ未タ滿足スルコト能ハサルモノ多シ

普通ノ醫家ニシテ本症ノ患者ニ遭遇スルヒハ其精神症狀ノ特異ナルカ爲メニ頗フル治

術ニ困ルシムコトアリ

本症ニ於テ急性ノ癲狂トナリ自殺セントスルモノニアラサレハ癲狂院ノ方法ニヨリテ一室内ニ鎖錮スルノ外他ニ良法アルコトナシ

病初ニ於テ癲狂院ニ投セントスルモ其外貌ノ健態ヲ失スルヿナク精神ノ錯誤スルコトナキヲ以テ屢々其説諭ニ服セサルコトアリ

斯ノ如キ患者ニアリテハ諸般ノ療法ヲ試ミンヨリハ寧ロ身体及ヒ精神ノ安靜ヲ專ラトシ滋養易化ノ食品ヲ撰フヲ以テ優レリトス

最モ適當ナル療法ハ腦ノ榮養ヲ整復スルカ爲メニ發尼涅及ヒ莫爾比涅ヲ投スルニアリ

姑息療法ノ最モ顯著ナルモノハ「ハイソスチグマ」(カラバル豆ノ効分ナリ)ヲ用フルニ若クハナシ煩悶ヲ鎮靜シ安眠ヲ得セシムルニハ非沃斯元三十分ノ一瓦(〇、〇〇二ガラム)乃至十分ノ一瓦(〇、〇〇六ガラム)ヲ取リ皮下ニ注射スルヒハ偉効ヲ奏スヘシ而レヒ此時ニアリテハ格魯剌兒及ヒ莫爾比涅ヲ用ヒサルヲ得サルノミナラス大量ヲ投セサレハ効驗ヲ現ハサヽルコトアリ

本症ノ治法ニ於テ欲クヘカラサルモノハ身体ヲ安靜ナラシメ睡眠ヲ妨クルヿナク且ツ

榮養ニ注意シテ怠ラサルニアリ

○神經系之黴毒症 原名 レヒリス オフ ヂルヅオース レステム SYPHILIS OF NERVOUS SYSTEM.

釋義

神經系ノ黴毒症トハ腦膜、腦體及ヒ脊髓ノ實質又タハ末梢神經ニ於テ第二期及ヒ第三期黴毒ノ沈着スルモノヲ云フ

原因

神經系ハ他ノ臟器ト同時ニ黴毒ノ爲メニ襲ハルヽモノナリ

整然タル經過ヲ取ル所ノ黴毒ハ當初皮膚及ヒ粘膜ヲ侵カシ尋テ深部ノ機関及ヒ組織ニ達スルモノナリ

神經系ニ於テ黴毒沈着ノ症候ヲ現出スルノ期ハ一定セサルモノトス故ニ毒質曼延ノ度ニ依テ大ニ感受性ヲ增加スルヲ見ルヘシ而シテ其輕重ノ度モ亦タ一定セサルヲ以テ内臟ヲ侵襲スルノ多少モ亦タ一樣ナラス

世人カ一般ニ信認スル所ヲ以テスレハ黴毒ノ神經系ニ感染スルハ第二期ノ終リ又タハ第三期ニアリ而シテ時日ヲ以テ算スルトキハ通常一年乃至三年ノ間ニアリト雖トモ偶マ一年未滿若シクハ二十年餘ヲ經ルノ後ニ來ルコトアリ

予カ屢々實驗セシ所ノ患者ニ於テ其大數ハ第二期ニ發現セリ而レトモ多クハ他ノ疾患ヲ併發シ又タ其三分ノ一ハ再感ニ基因スルモノナリ

全身中特ニ感深シ易キ部位ヲ侵カスモノハ既發ノ創傷若シクハ疾患ニ因リ或ヒハ遺傳又ハ体質ニ據テ判斷スヘシ而テ神經系ニ來ル所ノ黴毒ハ專ハラ此性ヲ有スルモノナリ

是故ニ神經系ノ變調ヲ將來スル所ノ諸臟ノ原因ハ黴毒腫ノ侵襲ヲトスルニ足ルヘシ

○腦内黴毒 原名 セレブラル レヒリス CEREBRAL SYPHILIS.

病理的解剖

護謨腫ト稱スル所ノ黴毒性硬結ハ蜘蛛網膜下腔或ヒハ硬腦膜内面ニ發生シテ腦髓ニ向テ發育スルモノナリ

又タ黴毒性硬腦膜炎ト名クルモノハ腦半球ノ凸隆面殊ニ前葉ノ前面ニアル基底部及ヒ都兒格鞍ノ周圍ノ基底ニ於テ發スルモノナリ

本症ハ体表ニ現ルヽモノ多クシテ屢々骨質ノ疾患ヲ併發シ又タハ二種ノ護謨腫ト共ニ來ルコトアリ

硬腦膜ノ内面及ヒ蜘蛛網膜下腔ヨリ發生スル所ノモノハ殊ニ新生黴毒中最モ緊要ナル

モノトス

護謨腫ニ二種アリ左ニ其大略ヲ區別シテ以テ診斷ノ便ニ供スヘシ

第一種ハ柔軟ニシテ帶赤半透明ノ凝塊ヲナシ圓形細肥及ヒ核質又タハ紡錘狀及ヒ星芒狀細肥ヨリナリ患部ノ組織内ニ瀰蔓スルモノナリ故ニ發生シタル凝塊ノ粗密ニ因テ患部ニ沈着シタル細肥体ノ多少ト組織ノ性狀トヲ判知スルヲ得ヘシ

巨大ナル空隙ニ於テ數多ノ細肥体凝集シテ蜂窠狀ヲ呈スルコトアリ又タ微細ナル網絡狀ノ組織内ニ滲入スルヒハ其形狀ヲ異ニスヘシ

新生シタル組織内ニハ數多ノ毛細管ヲ含有シ其破綻ニ因テ血液ノ滲漏ヲ起コスヘシ

本症ニアリテハ判然タル分界線ヲ以テ健康組織ト區畫スルヿナク周圍ノ組織内ニ細肥体ノ壓出スルヲ見ルヘシ

第二種ハ半透明ナリト雖ヒ柔軟ナラス稍々硬固ニシテ黄色ヲ呈シ又タ乾燥スルヲ常トス故ニ偶マ脂肪腫ト誤認スルコトアリト雖ヒ其真性ハ乾酪樣ノ變形物ナリ

本症ノ發生ニ於テ一般ノ變狀アリ一ハ瀰蔓性ニシテ一ハ限界性ナリ

限界性ノモノハ其容積大抵豆大ヨリ鳩卵大ニ至ルノ差アリ而シテ多々發生スル所ノ部位ハ硬腦膜内外二層ノ間隙ニシテ殊ニ著ルシキ容積ニ達スルモノナリ

腦ノ凸隆面ニ發生スルモノニアリテハ顆粒狀ノ組織互ヒニ密着シテ膜質ニ達シ終ニ其分界ヲ撿出スルヿ能ハサルニ至ル又タ帶赤灰白色ノ護謨腫ヲ生シ其基底ニ於テ黄色ノ凝塊ヲ沈着スルヿアリ而シテ其凝塊ノ周圍ニ於テ新生シタル成形質ノ突出スル所ノ腦質ハ白色或ヒハ赤色軟化ノ狀ヲ呈スヘシ

基底面ニアリテハ護謨腫ノ發育ニ因テ視神經交叉、大腦脚及ヒ華魯里氏橋ノ周圍ノ如キ間隙ニ充滿スルヲ以テ此部位ニ於テ帶赤灰白色ノ發生物ヲ撿出スヘシ又タ近傍ノ腦質ニ發育スルヒハ終ニ軟化スヘシ

腦底ノ脈管ニ於テモ又タ微毒性ノ新生物ヲ現出スルコトアリ而シテ被患ノ脈管ハ沈着物ニ因テ圓筒狀ヲナシ肥厚シテ灰白色トナルノミナラス硬變スルヲ見ルヘシ

脈管ノ内面モ亦タ侵蝕セラルヽヲ以テ其容積ヲ減シ通過スル所ノ血量ハ健態ニ比スレハ四分ノ一若シクハ半ハニ過キサルヘシ

數多ノ脈管ニ斯ノ如キ變狀ヲ起スヒハ腦内ノ循環ヲ障碍スヘシ而シテ其變狀ハ脈管ノ内膜ヨリ始ムルカ故ニ脈管ノ諸層共ニ顆粒狀組織ヲ構生スルヲ知ルヘシ

護謨腫ヲ發スルコトナク腦膜ニ於テ微毒性ノ炎症ヲ起コシ肥厚シテ硬結シタル班点ヲ現出スルヒハ其造構ハ護謨腫ト異ナルコトナシ

腦質ニ於テモ亦タ炎症ヲ起コシ終ニ軟化スルヲ見ルヘシ

徴候

當初現ハルヽ所ノ症候ハ頭痛ナリ而シテ通常頗フル急劇ナルノミナラス一種特殊ナルハ夜間ニ增劇シ又タハ夜間ニノミ發作スルヲ以テ知ルヘシ

頭痛ハ突然消退シテ忽チ再發スルアリ或ヒハ其間歇時ノ長キモノアリ或ヒハ依然トシテ持續スルコトアリ

頭痛ハ輕微ノ打撲ニ因テ增劇スヘシ故ニ大家「ランセローキス」氏ノ説ニ據レハ其位置ニ依テ疾患ノ所在ヲ指定スルヲ得ヘシト云フ

夜間ニ於テ屢々強劇ナル疼痛ヲ發スルトキハ全身ノ衰耗ヲ將來スヘシ而レトモ毫モ疼痛ナキモノニ於テ往々衰耗ヲ起スコト甚タシキコトアリ

腦内新生物ノ發育ヲ始ムルトキハ眩暈、精神錯雜及ヒ刺衝ヲ起コシ偶マ人事ヲ省セントスルモ思慮ヲ運ラスヿ能ハス欝憂病ノ症狀ニ陷ヰリ甚タシキハ自盡セントスルモノアリ

「ランセローキス」氏ノ臆想ニ據レハ充血ニ基因スルモノヽ如シト雖トモ一ハ頭蓋内ニ含有スル組織ノ壓迫セラルヽカ爲メニ來ルモノナランカ

暫時ニシテ他ニ原因ナク卒倒ノ發作ヲ起コシ兩脚ニ萎弱ヲ覺エ屢々蹉跌スヘシ又タ言語ノ官能ヲ妨クルコトアリ或ヒハ通常用フル所ノ言語ヲ忘却シテ譫語頗フル徐長トナ

リ弱視症、復視症、瞳孔不等又ハ斜視眼ノ如キ變狀ヲ現出スヘシ

瞼眼鏡ヲ以テ窺フトキハ視力板廓大シテ脈管怒脹シ恰カモ動脈瘤ノ狀ヲ呈スルヲ見ル

聽官ニアリテハ耳鳴又タハ音響ノ曇濁スルヲ覺エ或ヒハ顛狂狀ノ症候ヲ發スルコトアリ而レトモ上記ノ知力欽乏ノ諸症候ヲ呈スルモノニ比スレハ極メテ鮮ナシトス

卒倒ノ症候ヲ呈スルノ後癲癇狀ノ發作ヲ將來スルコトアリ

又タ精神ヲ侵カスコトナク依然トシテ辨識ノ機能ヲ有シ一肢ヲ限局シテ來ルコトアリ

或ヒハ辨識ノ力ヲ失スルノミナラス全身ヲ襲フモノアリ

腦ノ基底ニ於テ微毒ノ沈着ヲ起コストキハ諸筋ノ協同作用ニ於テ欽乏ヲ起コシ歩行蹣跚トシテ劇烈ナル眩暈、惡心及ヒ嘔吐ヲ發シ視力衰弱スルコト頗フル迅速ニシテ眼瞼腫脹シ且鼻血ヲ來タスヘシ

症ニヨリテハ諸筋ノ協同作用ニ於テ欽乏ヲ起コシ歩行自在ナラサルノミナラス他ニ運動機ノ障碍スルモノアリ假令ヘハ卒中狀ノ發作ヲ將來スルヿナク軀幹ノ一側ニ於テ萎弱ヲ起コシ延イテ顔面ニ及ホスカ如シ或ヒハ唯タ一肢ヲ限リテ萎弱ヲ起コシ之レカ爲メニ患足ノ攣縮ヲ起コシ或ヒハ一臂ノ作用自在ナラサルコトアリ而レトモ其運動ニ於テハ障害ヲ起スヿナク或ヒハ顔面ノ一側ニ限局スルコトアリ

患者ノ大數ニアリテハ運動機ノ變調ヲ起スノミナラス知覺機ニ於テ一側ノ障害ヲ將來シ又タ神經痛(假令ヘハ顔面神經痛或ヒハ薦座神經痛)ヲ發スルコトアリト雖ヒ多クハ知覺機ヲ侵カスモノニ比スレハ稍ヤ少ナキモノトス

知覺機ノ抑壓ヲ來スヒハ兩側共ニ巨大ナル部位ヲ侵カシ疼痛不感トナリ又タハ知覺脫失ヲ起コスヘシ

又タ症ニヨリテハ新生物ノ發生ヲ徵知スヘキ症候ヲ現出スヘシト雖ヒ必發ノ徵証ト見做スヿ能ハサルナリ其症狀タルヤ俄然卒中狀ノ發作ヲ將來スルニアリ而レヒ輕重ノ度ニ至テハ一樣ナラス甚タシキ重症ニアリテハ全然感覺閉止スト雖ヒ輕症ナルヒハ暫時眩暈ヲ起スニ過キサルモノトス大家「ハイブナル」氏ノ說ニ據レハ斯ノ如キ發作後ニ半身不遂ヲ將來スルヲ見ルヿアリト云フ

又普通ノ症ニ於テ當初斯ノ如キ發作ヲ起コシ治術ニ因テ大ヒニ其病勢ヲ挫折スルコトアリ而レヒ偶マ精神恍惚トシテ人事ヲ省セス喚呼スルニ從テ醒覺スルモノアリ而レヒ直チニ退消スヘシ

當初頭痛或ヒハ虛脆ノ感覺アリテ後チ發作ヲ將來シ精神痴凱狀トナリ毫モ知力ノ操作ヲ營ムヿナク漸々感覺閉止ノ狀ニ陷ルモノアリ

此期ニ際シ夜間尿通ノ爲メニ醒覺スルカ如キコトアルヒハ患者ノ行爲ハ殆ント夜遊病ヲ發シタルカ如ク臥床ヲ出テ、欠伸シ或ヒハ步行スヘシト雖ヒ忽チニシテ再ヒ感覺閉止ノ狀ニ陷ヰルモノ多シ

斯ノ如ク精神恍惚トナルノ期ハ一定スルヿナク夜間ニ發作シテ翌日ノ午後ニ達スルヲ常トス而シテ頃日予カ實見セシ一患者ハ每夜睡眠ノ時間中強劇ナル頭痛ニ困ルシメリ又タ間歇性ノ熱症ヲ發スルノ後ニ至リ始メテ精神恍惚トナルコト鮮ナカラス

昏迷ヲ將來スルノ期ハ數日若シクハ數週ニ渉リ終ニ昏睡ニ陷リテ死スルヿアリ或ヒハ感覺閉止ノ症狀甚タシカラスシテ醒覺スルノ時間稍々長ク終ニ回復ニ趨クヿアリ

腦內ノ微毒腫ニ於テ一種特異ナル症狀ヲ呈スルヿアリ即チ麻痺狂ヲ發スルモノ是ナリ知力才能ニ於テ諸般ノ刺衝性ノ症候ヲ以テ起コリ精神混亂シテ強劇ナル鬱憂狀ノ症狀ヲ呈シ恰モ大膽トナリタルモノヽ如シ斯ノ症狀ハ隱顯常ナキヿアリ或ヒハ持續スルノ後終ニ全身ノ衰弱ヲ起コシ知覺失亡、震顫及ヒ蟻痒ノ感覺ヲ起コシ尋イテ操作ニ懶ウク協同作用ノ變調及ヒ麻痺ノ如キ諸症候ヲ現出スヘシ

末期ニ至リ現ハルヽ所ノ知力ノ變調ハ即チ麻痺狂ヲ發スルニアリ

經過時期及轉歸

治術ノ適否ニ依テ効驗ヲ現ハスコト斯ノ如ク著ルシキ疾患ヲ

見ルコト未タ嘗テアラサルナリ故ニ其經過時期及ヒ轉歸共ニ治法ノ如何ニ據テ甚タシキ差アルモノトス

大家「ハイプヲル」氏カ第二種ト稱スル所ノモノハ即チ當初卒中狀ノ症候ヲ呈シ尋イテ半身不遂ヲ將來スル所ノ一症ニシテ其時期最モ短少ナリ

縱令ヒ全治ヲ期スルコト能ハサルモノト雖ヒ治法ニ依テ大ヒニ輕快スルモノナリ而シテ四年以内ニシテ終ルモノ極メテ稀レナリ

第二種ニアリテハ適宜ノ治法ニ據テ全治スルモノ頗フル多シ故ニ其治驗ヲ報告スルモノ亦タ鮮ナカラス

竟モ治法ヲ施サヽルヒハ數週若シクハ數月ニシテ極期ニ達スルモノアリ

麻痺狂ノ如キ症候ヲ呈スルモノハ其時期遲延スルコト多ク屢々淆沈アリテ數年間ニ涉ルコトアリ

數多ノ患者ニ於テ治法ノ如何ニ係ハラス半身不遂或ヒハ局處麻痺ヲ起コシ終ニ屢々癲癇狀ノ發作ヲ反復スヘシ而レヒ多クハ譫語腫ヲ發スルヒハ其壓迫ニ因テ軟化及ヒ破壞ヲ起スモノナリ

病理的解剖

○脊髓之微毒症　原名 シヒリス オフ チルウス SYPHILIS OF NERVES.

腦神經ハ脊髓神經ト共ニ微毒ノ爲メニ襲ハルヽコトアルモ多クハ腦ヲ侵カスヿ強劇ナリ否レハ專ハラ腦神經ノミヲ限局スルモノトス

偶マ神經ノ外膜ニ微毒ノ沈着ヲ起コスヒハ神經幹ヲ壓迫シテ神經炎ヲ誘起シ終ニ萎縮性ノ變狀及ヒ脂變ヲ發スヘシ

鞘膜ヲ有セサル神經幹ノ周圍ニ發スル所ノ譫語腫ハ漸々神經ノ組織内ニ侵入シテ處々ニ微毒性顆粒組織ノ沈着ヲ生シテ益々發育スルヲ見ルヘシ

徵候

神經幹ニ於テ疾患ヲ被ムルヒハ神經固有ノ官能ニ因テ諸般ノ症候ヲ現出スヘシ故ニ知覺神經ノ刺衝ヲ起スヒハ其末梢ノ分布スル部位ニ於テ疼痛ヲ感スヘシ而レヒ既ニ神經ノ組織ヲ破壞スルニ至ルヒハ知覺脫失及ヒ疼痛不感ヲ將來スヘシ

運動神經ニ刺衝ヲ起スヒハ其神經ノ分布スル諸筋ニ於テ痙攣或ヒハ強直ヲ起スヘシ而レヒ既ニ其組織ヲ破壞スルヒハ麻痺ヲ將來スヘシ

普通ノ症ニ於テ腦神經ヲ侵カスヒハ腦内ニ發シタル他ノ新生物或ヒハ腫瘤ノ條下ニ於テ記載スル所ノ症候ト異ナルコトナシ

診斷

診斷上第一ノ要点ハ微毒感染ノ有無ヲ探知スルニアリ

腦内ニ發シタル黴毒ニ基因スル特徴ハ病毒蔓延及ヒ刺衝及ヒ抑壓ノ症狀ヲ呈スルノミナラス沃度加里或ヒハ汞劑ヲ投シテ効驗アルカ如キ景況ニ據テ診斷スヘシ

治則 多量ノ沃度加里ヲ投スルトキハ奇効ヲ奏スヘシ又タ偶マ汞劑ニ因テ良蹟ヲ備ムルコトアリ

○腦脊髓神經諸病

○癲癇（原名 エピレプシー）EPILEPSY.

釋義 爰ニ應用シタル癲癇ナル文字ハ真正ノ癲癇症ニシテ腦内ニ發シタル囊腫及ヒ腫瘍ノ如キ原因ニ依テ來ル所ノ急癇若クハ搐搦ノ如キ疾患トハ特殊ナルモノトス

原因 病原論上ノ範圍内ニ於テハ最第一ノ地位ヲ占ムルモノハ遺傳素因ナリ

大家「エチワルリヤ」氏ノ說ニ據レハ遺傳ニ基因スルモノ百分ノ二十五ナリト云フ而レ氏「レーノルト」氏ハ百分ノ三十トナセリ

是故ニ神經病ノ体質ヲ有スルモノニ多ク又其血族ニアリテハ諸種ノ變狀ヲ現出スヘシ

初代ニアリテハ神經痛、神經症及ヒ麻痺ヲ起コシ二代ニ至リ癲癇トナリ三代ニ至リテ終ニ發狂スルモノアリ

重要ナル諸原因中神經症ノ遺傳ニ次クモノハ酒類ヲ貪ホルモノヽ兒ニ於テ本症ヲ現出スルニアリ

房事過度及ヒ手淫モ亦タ屢々其原因トナルコトアリト雖ヒ殊ニ飲酒家ノ子女ニアリテハ最モ著ルシキ感動ヲ有スルモノナリ

本症ハ癇癲ヲ誘起スル所ノ原因ニ依テ來ルコト多シ

年齡ニ於テハ七歲ヨリ十七歲ニ至ルノ間ニ發スルモノ最モ多數ヲ占ムルカ如シ

男女ノ性ニ就テハ共ニ同一ノ感受性ヲ有スルモノナリ

大家「レーノルド」氏ノ統計ヲ見ルニ遺傳性ノモノニアリテハ未タ嘗テ二十年以上ノ人ヲ侵カスヿナク遺傳性ニアラサルモノニシテ十年以上ノ人ヲ襲フモノ殆ント百分ノ二十六ニ居ルト云フ

偶發性ノ原因ハ末梢神經ノ刺衝、齒牙發生及ヒ頭蓋骨ノ創傷ノ如キモノ是レナリ

癲癇狀ノ發作ハ恐駭、鬱憂、悲哀其他ノ感動ニ因テ誘起セラルヽコトアリ

病理的解剖

癲癇ニ基因スル所ノ特徴ト稱スヘキ變狀ヲ現スコトナシ

最モ重要ナルモノハ眞正ノ癲癇ト他ノ疾患ニ依テ起ル所ノ癲癇狀ノ發作トヲ鑑別スルニアリ

縱令ヒ特徴ト見做スヘキ變狀ヲ呈セサルモ頭蓋腔ニ於テ諸徴ノ頓發性ノ病的變狀ヲ現出スヘシ

頭蓋骨ノ外圓及ヒ造構ニ於テ變狀ヲ起コシ腦膜ニアリテハ變硬シテ石灰様沈着ヲ起コシ又肥厚スルヲ見ルヘシ又タ「エチワルリヤ」氏ノ説ニ據レハ腦質ノ重量ヲ增加スト云フト雖ヒ他ノ學士輩ハ皆ナ減少スルノ説ヲ主張セリ

「メーチルト」氏ハ大小兩部ノ海馬足ニ於テ變狀ヲ見ルト云フ又タハ皮質ニ腫瘤ヲ發スルモノアリ其他灰白質ニ於テモ亦タ變狀ヲ起コスヘシ

數年前有名ナル「スコイデル、ワンデルコルク」氏ハ延髓ニ於テ變狀ヲ起コシ其部ノ脈管廓大シテ脂肪變質ヲ誘發セリト云フ

「エチワルリヤ」氏ハ大ヒニ其説ヲ贊成シ之レニ自己ノ實驗説ヲ加エテ曰ク本症ニ於テハ毫ニ脈管ノ廓大スルノミナラス神經節ノ成形機充盛ヲ起コシ延髓ノ細胞体ニ於テ萎縮症ヲ發スルハ最モ疑フヘカラサル所ノ徴証トナセリ

又同氏ノ説ニ據レハ交感神經節ニ於テ硬結性ノ變狀ヲ現出スト雖ヒ癲癇症ノ發生ニ於テ斯ノ如キ變狀ヲ起スヒハ其關係ノ如何ヲ詳知スルコト能ハサルナリ

徴候

癲癇ノ發作時ニ於テ現ル、所ノ症候ニ數アリ而シテ擯斥(即感覺閉止)ノ發作間ニ於テ現ハル、所ノ患者ノ症狀モ亦タ二種アリ

癲癇ノ發作ハ強弱ノ二症アリ一ハ強剛ナル癲癇ノ發作ヲ將來スルモノニシテ佛人ハ之レヲ大癲癇ト稱シ一ハ稍々輕微ノ發作ヲ現出スルモノニシテ之レヲ小癲癇ト云フ

「ヂャックコード」氏カ解釋スル所ニ據レハ大癲癇ニ二種アリ一ハ普通ノ癲癇症ニシテ一ハ卒中狀ノ癲癇症ナリト云フ又タ小癲癇ヲ分チテ二種トシ一ヲ癲癇性眩暈ト云ヒ一ヲ癲癇性失神ト稱ス

普通ノ症ニアリテハ發作時ニ迫ルモ其前徴ヲ呈スルヿナク突然發作スト雖ヒ偶マ判然五管及ヒ前驅症ニ依テ豫知スルコトアリ

覺風癲ナルモノハ發作ニ先タチテ現ハル、所ノ感覺ニシテ徴風ノ四肢ニ起リテ腦ニ達スルカ如キヲ知ルヒハ既ニ發作ノ近接シタルヲ証知スヘシ

此症ニアリテハ發作ヲ豫知スヘキ知覺運動及ヒ精神上ノ症候ヲ呈スルコトナク唯タ徴風ノ軀幹ヲ通過スルカ如キモノアリ或ヒハ温湯若シクハ冷水ノ流ル、カ如キモノア

リ或ヒハ末梢神經ヨリ劇痛ヲ發シテ腦ニ達スルカ如キモノアリ

又タ覺風癲ニ於テ眼華閃發、異臭若シクハ耳鳴ノ如キ五官ノ一器ニ於テ異常ノ感覺ヲ起コスヿアリ或ヒハ一局處ノ筋肉ニ於テ搐搦或ヒハ痙攣ヲ起コスヿアリ或ヒハ精神錯雜若シクハ奇怪ヲ感スルヿアリ

發作前數日間精神及ヒ動作共ニ混亂錯雜スルコトアリ故ニ時トシテ啼泣悲哀シテ齧屑ニ沈ムコトアリ又タ時トシテハ沈黙シテ猜疑ノ念ヲ抱クモノアリ又タ心神常ニ刺衝シテ爭鬪ヲ好ミ奸惡トナルコトアルカ如シ

最モ普通ノモノニアリテハ發作前數時間若シクハ一二日間頭痛眩暈及ヒ精神ノ錯雜ヲ將來スヘシ

予カ實驗セシ患者ノ大數ニ於テ現ハルヽ所ノ前驅症ハ心臟部ニ抑壓ヲ覺エ上腹部ニ苦悶及ヒ惡心ヲ發シ尋テ發作時ニ達スルトキハ上腹部ヨリ腦ニ至ルマテ上行スルカ如キ特異ノ感覺ヲ起スヘシ

癲癇症ノ發作ハ覺風ノ有無ニ拘ハラス突然ニ來ルモノ多ク其時期ヲ區別シテ四段トナス第一段ニハ俄然轉倒シ第二段ニハ感覺閉止シテ顏面蒼白色トナリ第三段ニハ特異ノ呼聲ヲ放チ第四段ニハ全身ノ搐搦ヲ發スルニアリ

既ニ發作時ニ迫マルトキハ自己ノ身体ヲ措ク所ノ地位ヲ撰フヿナク卒倒シテ人事ヲ省セス故ニ階段ノ中途ヨリ墜落スルアリ或ヒハ火爐ノ内ニ投スルアリ或ヒハ室内ノ器物ニ觸レテ挫傷ヲ被ムルモノアリ偶マ發作時ニ達スルモ稍々知覺ヲ存スルモノニアリテハ安全ノ地位ヲ撰ンテ倒ルヽモノアリ

患者ニアリテハ必ラス身体ノ一側ヲ限リテ横轉スルモノアリ故ニ屢々發作スルモノニ於テハ轉倒ノ際挫傷ヲ被ムルカ爲メニ瘢痕ヲ貽コシ是レニ由テ其方向ヲ知ルコトアリ

癲癇ノ發作ニ於テ俄然轉倒スルハ患者辨識ノ力ヲ失スルカ爲メニ隨意筋ノ作用ヲ制御スルコト能ハサルニ依ルモノナリ

此時期ニ達スルトキハ知覺、運動、理會及ヒ五官ノ機能其他反射的作用モ皆ナ悉トク廢絶スルモノナリ

面貌慘憺トシテ蒼白色ヲ呈シ恰モ屍体ノ如シ是レ即チ頭部ノ細動脈ニ攣縮ヲ起コシ之レカ爲メニ腦内ニ通過スル血量ヲ減スルコト甚タシキニ由ルモノナリ

大家「ロンベルグ」氏ノ説ニ曰ク本症ノ發作ニ際シ將サニ感覺閉止セントスルニ當リ一種特別ナル叫號ヲ發スヘシ其聲調殆ント鹿鳴ニ類スルアリ或ヒハ其音響特異ニシテ之レカ比譬ヲ舉クルコト能ハサルモノアリ或ハ毫モ發聲セサルモノアリ

忽チニシテ顔面蒼白色トナリ全身ノ諸筋悉トク梗直性痙攣ノ狀ヲ呈シ頭顱ヲ後方ニ屈シ或ハ横屈シテ動カスヿナク牙関緊急シテ口角ヲ閉チ或ヒハ口唇ヲ攣縮シテ齒槽ヲ暴露スルアリ眼球固定シテ眉額ニ皺襞ヲ生シ手指及ヒ足趾共ニ開放シテ把握スルヿナク呼吸筋ニモ亦タ強直ヲ起コシテ呼吸ノ作用ヲ歇止シ脈搏細實ニシテ不整トナリ暫時ニシテ靜脈ノ溢血ヲ將來シテ顔面蒼白色トナリ口唇モ亦タ赤色ヲ失シテ暗紫色トナルハ專ラ呼吸ヲ歇止スルノミナラス頸筋ノ攣縮ニ因テ大靜脈幹ヲ壓排スルニ因ルモノナリ梗直期ニ達スレハ吸氣ニ於テ變狀ヲ呈シ頗フル遲延シテ高調トナリ且徐長ニシテ吹笛ヲ弄スルカ如シ尋テ呼吸筋ノ強直ヲ將來スヘシ

梗直ノ症狀ハ全身ニ波及スルヿナク頭顱及ヒ眼球諸筋ノ如キ部位ニノミ限局スルコトアリ又タ一頓ニ間代性ノ痙攣ヲ起スヿアリ又タ毫モ梗直ノ症候ヲ呈スルヿナク俄カニ痙攣ヲ發スルヿアリ或ヒハ隨意筋ニ於テ轉移性ノ梗直ヲ發スルノ外他ニ變狀ヲ現ハサヽルコトアリ

梗直期ハ一分時乃至一分時半ニシテ終ルノ後間代性搐掣ノ期ニ達スヘシ

間代搐掣ノ初起ニ於テハ顔面、口唇、舌体、咽頭及ヒ喉頭ノ諸筋ニ搐掣ヲ起コシ顔貌變常シテ駭クヘキ異想ヲ現ハシ眼球ハ視軸ニ因テ旋轉スルヲ見ル

顔面暗青色ニシテ口唇モ亦タ蒼白色ヲ呈スヘシ而レ𪜈既ニ呼吸ヲ營ム𪜈ハ帶赤色トナリ皮下靜脈怒脹シテ呼氣ト共ニ唇緣ヲ突出シテ泡沫痰又タハ血痰ヲ咯出スヘシ

呼吸ニ笛聲又ハ鼻聲ヲ放チ吸氣ヲ營ムルヿ因難ナルヲ以テ高調トナリ齦齒ヲ發シ屢々頰肉ノ筋肉及ヒ舌体ヲ咬傷シテ血痰ヲ吐出スルコトアリ

四肢ノ諸筋ニ強激ナル震戦ヲ起コシ甚タシキニ至テハ長骨ノ斷骨症或ヒハ脫臼ノ如キ危篤ナル創傷ヲ被ムルモノアリ

眼瞼ノ周圍又タハ舌体及ヒ口唇ノ粘膜ニ於ケル脈管ノ破綻ヲ起コスヿハ多少ノ膜下溢血ヲ將來スヘシ故ニ既發ノ癲癇症ヲ撿出スルコトアリ

間代ノ期ハ二三分時間持續シ搐掣ノ退消スルカ爲メニ其近接シタルヲ知ルヘシ故ニ搐掣ノ症候漸々減少シ終ニ口圍ノ諸筋ニ於テ攣縮ヲ起コシ暫時ニシテ鎮靜スヘシ

患者沈睡シテ當初散大シタル瞳孔ノ縮少ヲ起コシ呼吸平等ニシテ深ク諸筋肉弛緩シテ皮膚濕潤トナリ且發汗スヘシ

搐掣ノ期ヲ終ハルヿハ昏睡ノ狀ニ陷ヰリ數時間持續スルモノナリ此時ニアリテハ大便及ヒ精液共ニ隨意ニ制止スルコト能ハサルモノ多シ

昏睡ノ期ハ二三分時間乃至數時間ニ達スルモノナリ而シテ患者恐駭シテ醒覺スルアリ

或ヒハ差明スルモノアリ又タ咬傷シタル舌体若シクハ頰内ノ筋肉ヲ撩出シテ之レヲ患者ニ知ラシムルニアラサレハ毫モ發作時ノ事情ヲ辨セサルモノトス

通常ノ症ニアリテハ精神及ヒ動作共ニ漸々輕快シ患者モ亦タ自ツカラ回復ニ趣キタルヲ知ルヘシ

偶マ發作後ニ間歇時ヲ有スルヿナク直チニ次回ノ發作ヲ將来スルコトアリ

當初摘掣ヲ發シ尋テ昏睡ノ狀ニ陷ルヿナク更ニ再ヒ摘掣ヲ起コスコトアリ

又症ニヨリテハ一回ノ發作ヲ終ハルトキハ全然健態ニ復スルコトアリ而シテ其間歇時ニ於テハ毫モ苦悶ヲ感フルヿナキノミナラス患者モ亦タ全治シタルモノト思考スレトモ突然第二ノ發作ヲ將来スルコトアリ

偶マ二十四時間内ニ一回乃至五十回以上ノ發作ヲ將来スルコトアリ

癲癇患者ニ於テ摘掣ヲ發スルノ後直チニ譫語或ヒハ精神錯雜ヲ起コスモノアリ或ヒハ精神ニ刺衝ヲ起コシテ爭鬪ヲ好ミ又タハ人ヲ弑逆センヿヲ企ツルモノアリ

古来數多ノ學醫ハ摘掣後来ル所ノ癲狂症ニ於テ患者ノ行爲ヲ試驗シテ以テ癲癇症ノ爲メニ起コル所ノ精神上ノ作用ヲ穿鑿セシモノ鮮ナカラス

大家「ヂヤクコード」氏カ第一症即チ卒中狀癲癇ト稱スルモノハ左ノ諸徴ヲ有スルヲ以

テ普通ノ癲癇症ト異ナルヲ知ルヘシ

昏睡ノ時期及ヒ其症狀ノ強劇ナルト腦充血ノ諸徴アルノミナラス間代性摘掣ニ繼發スル半身不遂ノ症狀ニ於テ多少ノ麻痺ヲ將来スルモ頑固ニシテ容易ニ治セサルヲ以テ判斷スヘシ

第二症即チ小癲癇若シクハ輕症癲癇ト稱スルモノハ二種ノ症候ヲ呈スルモノトス一ハ癲癇性眩暈ト云ヒ一ハ癲癇性失神ト稱ス

癲癇性眩暈ハ強劇ナル眩暈ヲ以テ發作シ之レカ爲メニ患者ノ眼ニ觸ルヽ所ノ物体ハ皆ナ旋轉スルカ如ク自己ノ身体ヲ直立スルコト能ハサルノミナラス保分ヲ有セサルトキハ忽チ轉什スヘシ

發作時ニ達スルトキハ眩暈ノ症候ト共ニ感覺ヲ失シ數秒時間ニシテ健態ニ復スルモノナリ

普通ノ症ニ於テハ眩暈及ヒ失神ノ症候ニ尋テ局處ノ摘掣ヲ將来スヘシ故ニ顔面諸筋ノ攣縮、齦齒、一肢ノ旋回運動若シクハ突然疾歩スルカ如キ症候ヲ現出スヽ

暫時ニシテ精神平常ニ復シ茫然トシテ周圍ヲ望ミ恰カモ痴呆シタルカ如クニシテ其發作ヲ終ハルモノナリ

癲癇性失神トハ神識ヲ失スルノ義ニシテ俗間ノ通語ニアラスシテ學者ノ應用ニ係ハルモノナリ而シテ最モ重要ノ点ハ暫時間全然神識ノ機能ヲ廢絶スルニアリ

卒然時期ヲ定メスシテ發作スルモノニアリテハ文章ヲ讀ミ或ヒハ裁縫ニ從事シ或ヒハ運動歩行シ或ヒハ筆ヲ執リ文字ヲ書スルノ際半途ニシテ精神ノ作用ヲ廢絶シ諸般ノ思考力ヲ歇止スルカ爲メニ其事業ヲ廢シ暫時ニシテ回復シ恰カモ瞑眠後ニ醒覺シタル如ク一タヒ欠伸スルヒハ毫モ意ニ介セサルニ至ル

發作時ニ至リ患者ノ症狀ヲ窺フヒハ顔面蒼白色トナリ瞳孔散大スト雖ヒ他ニ障碍ヲ見サルヘシ

當初小癲癇ノ症狀ヲ呈シ久シキヲ經テ大癲癇ノ發作ヲ將来スルコトアリ或ヒハ同時ニ二症ヲ發スルコトアリ

俗間ニアリテハ斯ノ如キ發作ヲ以テ患者ノ轉歸ニ於テ重要ナル關係ヲ及ホサヽルモノト見做スモノ鮮ナカラスト雖ヒ癲癇性失神ノ如キハ殊ニ精神ノ機能ヲ害スルモノナリ

總テ斯ノ如キ癲癇症ニ於テ樞要ナル原因ハ神識ヲ失スルニアリ故ニ本症ニシテ神識ヲ失セサルヒハ癲癇ノ名稱ヲ與フルヿ能ハサルモノト云フヘシ

然リト雖ヒ神識ヲ失スルコトナクシテ一局處若シクハ全身ノ搐搦ヲ發シタル例証モ亦

タ鮮ナカラサルナリ

大家「ヒウリングス、ヂャクソン」氏カ癲癇症ヲ解釋シテ曰ク本症ハ腦ノ一部ニ於テ灰白質ヲ使用スルコト急劇過甚ニシテ之レヲ筋肉ノ上ニ波及セシムルニ依ルモノナリ而レヒ敢テ神識ノ失亡ヲ以テ必要ナル徴候ト見做サヽルカ如シ

同氏ノ意見ニ據レハ偶マ灰白質ノ一部ニ於テ刺戟ヲ被ムリ強劇ナル刺衝ヲ起ストキハ緊張スルコト甚タシク之レカ爲メニ平衡力ヲ失スルノミナラス終ニ破裂スルモノトナセリ

灰白質ノ一部ニ於テ刺衝ヲ起コスヒハ患側ノ諸部ニ於テ搐搦ヲ起スヘシ既ニ其組織ヲ破壞スルヒハ半身不遂ヲ將来スヘシ是故ニ刺衝ヲ起シタル灰白質ノ一部ニ疾患アルヒハ一臂ヲ限局シテ搐搦ヲ現出スルコトアリ

陰性癲癇ト稱スルモノハ顔面神經痛即チ第五對神經痛又タハ遊走性痙攣及ヒ心臟神經痛ノ如キ症候ヲ呈スル所ノ一症ナリ

此症ニ於テ發作ヲ終ハルノ後暫時ニシテ固有ノ癲癇症狀トナリ或ヒハ交互ニ其症候ヲ現出スルコトアリ

又タ癲癇症ニ於テ急劇ナル譫語ヲ發スルコトアリ「フアルレツト」氏ハ之レヲ癲癇性譫

語ト稱セリ

本症ニ於テ特異ノ症狀ト見做スヘキモノハ其發作頗フル急激ニシテ豫想スルコト能ハサルノミナラス其退消スルニ當テモ亦タ頗フル迅速ナルモノトス

譫語ノ症狀恰カモ癲癇者ノ叫號スルカ如キ聲音ヲ發シ暴劇ナル行爲ヲナスモノアリ或ヒハ妄誕激論スルアリ或ヒハ毫モ意識ノ作用ヲ現ハサヽルモノアリ

是故ニ頗フル暴激ナルモノニアリテハ殘忍獰惡トナリ人ヲ殺スモ尚ホ其罪ヲ恐レサルニ至ル而レモ斯ノ如キ精神ノ症狀ハ屢々轉移スルヲ以テ二三時間或ヒハ一二日ニシテ消退シテ醒覺スルモノアリ

經過、時期及轉歸

癲癇ハ慢性諸病中最モ緩徐ナル經過ヲ取ルモノナリ是故ニ本症ノ時期ハ數年ヲ以テ算スルモノ多シ

病初ニアリテハ發作後數月ノ間歇時ヲ有スルモノアリ而レモ病機增進スルモハ益々發作ノ度數ヲ增加シ間歇時モ亦タ短縮スヘシ

發作反復ノ期ハ頗フル不正ナルモノニシテ毫モ發作時ノ症候ヲ呈セサルアリ或ヒハ月經ノ機能ト共ニ發作ヲ將來スルモノアリ

發作時ニ先タチテ豫防スルヲ得ヘキ原因ノ爲メニ來ルコトアリ而シテ不攝生ナルモノ

ニアリテハ益々其度數ヲ增加スヘシ

是故ニ酒類ヲ暴飲スルモノ房事過度ナルモノ又タハ食物ヲ過食スルモノヽ如キハ最モ其發作ヲ招クモノナリ殊ニ食物誤用ノ如キハ最モ重要ナル關係ヲ有スルモノトス

夜間ニ於テ發作ヲ將來スルモノニアリテハ久シク其症狀ヲ檢出スルコト能ハサルコトアリ故ニ偶マ晝間ノ發作ヲ現出シ或ヒハ舌体ノ咬傷、溢血及ヒ全身諸筋ノ銳痛ニ因テ始メテ疾患ノ本性ヲ徵知スルニ足ルヘシ

偶然精神上ノ疲耗ヲ起コシ全ク其本心ヲ變シテ平素ノ行爲ト異ナリ又タ徵知スヘキ原因ナクシテ一部ノ健康ヲ害スルカ如キ症狀ニ據テ前夜癲癇ヲ發シタルモノト認定スルコトアリ

全然健康ノ狀態ヲ存スルモノニアリテハ未タ嘗テ癲癇症ヲ發セサルモノナリ

病機增進シタルモノニ於テ其間歇時ニ達シ運動、知覺及ヒ精神共ニ諸般ノ變狀ヲ將來スヘシ故ニ運動機ニアリテハ一肢若クハ一簇ノ諸筋ニ於テ間代性ノ痙攣及ヒ搐搦ヲ發シ或ヒハ強直性ノ痙攣ヲ起スヘシ又知覺機ニアリテハ四肢ノ一部ニ於テ知覺脫失ヲ起コシ或ヒハ頭痛及ヒ神經痛ノ如キ症候ヲ呈スヘシ

癲癇ノ發作ヲ將來シ屢々反復スルモノニ於テ最モ重要ナル結果ハ知力ノ變狀ヲ來タシ

記憶力モ亦タ漸々衰耗シ判斷力ノ如キモ益々遲鈍トナリ終ニ痴獣ノ狀ニ陷ルモノナリ

突然癲癇ノ發作ヲ將來スルモノハ精神ノ作用ニ於テ甚タシキ感動ヲ有セサルニ似タリ

故ニ此說ヲ明瞭ナラシメント欲スルニ當テハ人皆ナ「シーザル」(羅馬時代ノ猛將ナリ)「ナポレオン」及ヒ「ペトラルク」(以太利亞ノ有名ナル詩人ナリ)ノ如キ俊傑ヲ以テ例証トナセリ

大家「レーノルド」氏ノ統計ニ據レハ知力ノ作用ニ依テ發作ノ度數ヲ變スルコトナシト雖モ精神ヲ勞スルコト甚タシキモハ次回ノ發作ヲ將來スルコト迅速ナルモノトナセリ

癲癇患者ノ初期ニ於テ未タ知力ノ衰耗ヲ攝セサルノ時ニ於テ既ニ行爲、動作、素質及ヒ感動共ニ異常ヲ呈スヘシ

本症ノ豫后ハ治術ノ点ニ於テ頗フル不良ナリト雖モ大數ノ比例ヲ以テ算スルモハ治効ヲ奏シタルモノモ亦タ鮮ナカラサルナリ

偶マ全治スルコトアリト雖モ其數ハ專ハラ治術ノ適否ニ関スルモノナリ是故ニ發病後治術ヲ施コスヿ迅ヤカナルモハ其轉歸モ亦タ順テ佳良ナリトス

一定ノ時期ニ於テ發作ヲ將來スルモノニ於テ漸々其度數ヲ減スルモハ豫后ノ佳良ナルモノト見做スヘシ

一部ノ神經ヲ傷害シ或ヒハ絲蟲ヲ發生スルカ如キ末梢神經ノ原因ニ依テ來ルモノハ必

ラス快復スヘシ而レモ純然タル癲癇症ニアリテハ其原因ヲ除却スルモ尚ホ治セサルモノ多シ

腦中樞ノ疾患ヲ有スルモハ全然回復ノ轉歸ヲ望ムヘカラス

遺傳素因ヲ有スルモノハ極メテ頑固ナルモノトス而レモ間マ破格ノ症ヲ見ルコトアリ

夜間ノ發作ヲ將來スルモノハ晝間ノ發作ヲ現出スルモノニ比スレハ治効ヲ奏スルコト頗フル困難ナリ

一般ノ規則トシテ小癲癇ハ大癲癇ニ比スレハ治癒ニ趣クコト鮮ナシ

癲癇性失神ハ精神ニ於テ駭クヘキ作用ヲ起スモノナリ

諸種ノ癲癇症ニ於テ其經過時期及ヒ轉歸共ニ治術ノ巧拙適否ニ因テ著ルシキ感動ヲ有スルモノトス

治則

癲癇症ノ治法ニ於テ其効驗ヲ見ント欲セハ末梢神經ノ刺衝ヲ起ス所ノ諸般ノ原因ヲ除却スルヲ以テ最第一ノ要務トス是故ニ各一ノ患者ニ就テ審査熟考シテ以テ精確ナル診斷ヲ下タサヽルヘカラス今マ其要点ヲ擧クレハ左ノ如シ

本症ハ創傷ニ因スルヤ否ヤヲ撿セサルヘカラス

本症ハ頭蓋内ノ疾患ニ因スルヤ或ヒハ末梢神經ノ疾患ヨリ來ルヤ否ヤヲ撿スヘシ

穿顱術ヲ施コシテ治効ヲ奏スルモノ鮮ナカラサルノミナラス現今ニ至リ漸々増加スルノ勢アリ斯ノ如ク此術ヲ施コスモノニ於テ好結果ヲ得ルモノ鮮ナカラサルヲ以テ頭蓋骨ノ創傷ニ基因スル癲癇症ニシテ骨質ノ挫傷アルヲ撿スルトキハ直チニ其法ヲ試ムヘシ瘢痕組織ニ因テ神經ヲ壓迫スルカ爲メニ發スルトキハ直チニ其部ヲ截開スヘシ殊ニ覺風癲又ハ患部ニ於テ特異ナル苦悶ノ感覺ヲ起スモノニアリテハ須臾モ忽セニスヘカラス

一局處ノ覺風癲ニ於テ腦ニ達スル中途ニ於テ其通路ヲ遮斷スルヲ得ルモノニアリテハ股部、脛部或ヒハ上膊部ニ於テ結紮ヲ施コシ或ヒハ患部ノ周圍ニ發泡ヲ貼シ或ヒハ硝酸銀ヲ以テ腐蝕スルカ如キ療法ニ依テ良蹟ヲ脩ムルヿアリ

永遠ノ治効ヲ得ント欲セハ覺風ノ進行スル方向ニ於テ截開法ヲ施コシ曾ニ刺戟ノ原因ヲ除却スルノミナラス神經幹ヲ分裂シ或ヒハ之レヲ伸展スルコトアリ

上腹部ニ於テ感覺ヲ起コシ尋テ腦ニ達スルモノハ最モ普通ノ前驅徴ナリ而シテ此症ニアリテハ食物ニ最モ注意セサルヘカラス故ニ予ハ藥劑ヲ以テ治術ニ力ヲ盡サンヨリハ寧ロ食物ノ攝生法ヲ守ラシムルトキハ必ラス効驗アルモノヲ實見セリ

癲癇症ニアリテハ暴食ノ後屢々其食物ヲ吐逆スルコトアリ

胃症ノ徴候アルトキハ數週日間牛乳ノミヲ與ヒ他ノ食物ヲ禁シ漸々之ヲ伍用セシムヘシ

然リト雖ヒ常ニ食用品トナスヘキモノハ牛乳、鷄卵ヲ專ラトシ少量ノ獸肉ヲ加エ其他野菜、少量ノ麵包、牛酪及ヒ果物ヲ除クノ外妄リニ他ノ食品ヲ攝ラシムヘカラス

斯ノ如キ食物ノ節制法ヲ守ラシムルトキハ著ルシキ効驗ヲ現ハスヿ鮮カラサルモノトス

若シ腸管内ニ寄生蟲ノ存スルヲ認ムルトキハ直チニ之レヲ驅逐スヘシ

胃症ヲ有スルモノニ於テ酸化銀或ヒハ硝酸銀ヲ取リ半瓦（〇、〇三グラム）宛ヲ投シ或ヒハ酸化亞鉛ノ少量ヲ用ヒ或ヒハ「ホーホーレル」氏水ヲ一二滴宛毎日三回内服セシムルトキハ良効ヲ奏スルヿアリ殊ニ胃ノ變調ニ基因スル所ノ癲癇症ニ於テハ欲クヘカラサルモノトス

磷酸銀ヲ投スルニ當テハ豫シメ銀中毒ヲ發セサランヿヲ勉メサルヘカラス

癲癇症ニアリテハ其種類ノ何タルヲ問ハス珈琲、茶、煙艸及ヒ諸穀ノ酒數ヲ禁セサルヘカラス

癲癇ノ發作ニ於テ機械的作用ニ因テ慣習トナルモノ鮮ナカラサルヲ以テ豫シメ其發作ヲ鎮靜スルコト最モ緊要タリ

「ブラオン、セクアルド」氏ハ諸穀ノ末梢神經ニ於テ刺戟ヲ起サシムルヿヲ按出シ踝趾ヲ伸展シ少量ノ石炭酸左斯ヲ吸入セシムルカ如キ法ヲ發明セリ

亞的兒及ヒ「コロ、ホルム」ノ吸引法ハ發作症ヲ輕減セシムルノ力アリト雖ヒ未タ卓効

ヲ保スルコト能ハサルナリ

夜間ニ發作ヲ將來スルモノニアリテハ臨卧ニ際シ把水格魯剌兒ノ多量ヲ内服セシメ又タハ莫爾比涅ノ皮下注射法ヲ施コスヒキハ其發作ヲ豫防スルコトアリ

瑣酸「アーミル」ノ吸引法モ亦タ屢々發作ヲ鎮靜スルコト鮮ナカラス殊ニ此療法ハ頗フル簡便ナルヲ以テ稱用スルモノ多シ

瑣酸「アーミル」三滴乃至五滴ヲ含有スル所ノ少球ヲ破壞シテ手巾ニ醮シ直チニ吸引セシムヘシ

發作時ニアリテハ何等ノ療法ヲ施コスヿナク身体ヲ安靜ニシテ諸般ノ壓迫ヲ防キ捲縛スル所ノ衣服及ヒ帶束ヲ解キ安全ナル地位ヲ撰ランテ横卧セシムヘシ

本症ノ治法ニ於テハ從雜ナル藥品ヲ投スルモ決シテ効驗ナキモノナリ

吾人カ最モ稱用スル所ノモノハ臭素加里ノ一品アルノミ加之ノミナラス之レヲ持長スルモ患害ヲ起スヿ鮮ナク精神ノ症狀ノ如キハ益々整復スルモノ多シ

常ニ稱用スル所ノモノハ臭素加里及ヒ臭素曹達ノ二品ニ過キスト雖モ殊ニ臭素加里ヲ以テ優レリトス

臭素加里ヲ持長スルノ極点ハ口峽ニ於テ知覺脱失ノ症候ヲ現出スルノ時ニアリ是レ即

大家「ウオルシン」氏カ專ラ主張セシ所ノ要点ナリ

口峽ニ於テ反射的知覺力ヲ減スルヒキハ口蓋、舌体ノ基底若シクハ喉頭ノ諸部ニ指觸スルモ其刺戟ニ因テ運動ヲ起サヽルニ至ルヘシ

斯ノ如キ中毒ノ症候ヲ發スルモノニ於テ使用シタル臭素加里ノ量ハ患者ノ感受性ニ依テ一様ナラス故ニ症ニヨリテハ僅カニ一日三十瓦宛（二、〇〇〇ガラム）ヲ投スルモ忽チ其症狀ヲ現出スルモノアリ又タ大量ニシテ毎日殆ント二瓩（八、〇〇〇ガラム）ニ達スルモ尚ホ中毒ヲ起サヽルヿアルカ如シ然リト雖モ醫家常ニ胸臆ニ藏メ忘ルヘカラサルモノハ藥品ノ多寡ニアラスシテ効力ノ如何ヲ鑒察スルニアリ

臭素加里ノ中毒症ヲ豫防スルニハ下劑ヲ頻服セシメ腎臓ノ排泄ヲ自在ナラシメ朝夕二回「ホーレル」氏水二三滴宛ヲ伍用スルニアリ

臭素加里ノ効力ニ次ク所ノ藥品ハ斯篤利義涅尼ノ一品ナリ

予ハ虚弱ニシテ貧血性ノ患者ニ於テ癲癇ヲ發シタルモノニ臭素加里ト斯篤利義尼涅ノ合劑ヲ投シテ屢々偉効ヲ奏セリ殊ニ貧血症ニ基因スル所ノ神經實質ノ虚衰シタルモノニ適當スルモノナリ

末梢神經ノ刺衝ヲ伴フ所ノ反射機ノ亢盛シタルモノニアリテハ斯篤利義尼涅ヲ用フル

コトナカレ

癲癇症ノ治法ニ於テ臭素加里ヲ投スルモ其用法ノ當ヲ得サルトキハ真ニ徒勞ニ過キサルモノナリ故ニ平等ニ其量ヲ用ヒスシテ屢々之レヲ増減シ或ヒハ斷續極リナキカ如キハ寧ロ之レヲ投セサルニ若カサルナリ

臭素加里ノ卓効ヲ得ント欲セハ縱令ヒ中毒症ヲ發スルモ之レヲ歇止スルコトナク唯タ其量ヲ減シテ有力ナル下劑ヲ投シ而ル後チ再ヒ前量ニ復スヘシ

既ニ搐搦ヲ發セサルニ至ルモ尚ホ之レヲ持長セシメ少ナクモ治後二年以上ノ時日ヲ經サレハ之レヲ廢止スルコト勿レ

釋義

○帶斯埃利亞　原名 ヒーステリヤ HYSTERIA.

帶斯埃利亞トハ官能的神經ノ疾患ニシテ諸種ノ運動機、知覺機及ヒ精神系ノ變調ヲ起スモノナリ而シテ其部位及ヒ發現ノ症狀ニ至テハ千差万別ナルモノトス

原因

本症ハ大抵婦人ニ限局スル所ノ疾患ニシテ古來男子ヲ侵シタル例証ハ極メテ鮮ナシトス

婦人ニ於テ本症ヲ誘起スヘキ重要ノ因由ト見做ス所ノモノハ交接器ノ景況及ヒ社會ノ慣習ニ因テ活潑ナル作用ヲ營ム所ノ行爲ヲ抑制シ又タハ神經系ノ操作過度ナルカ如キハ皆ナ然ラサルナシ

帶斯埃利亞ノ現症ヲ呈スルニ當テハ患者ノ年齡ニ據テ一定ノ制限アルコトナシ故ニ平常嫁婚期ヨリ始メテ十有年間ニ發スルモノ最モ多シト雖ヒ又タ偶マ小兒ヲ侵カスコトアリ

大家「ブライケツト」氏ノ統計ニ據レハ本症ノ患者四百二十六名中二十歲乃至二十五歲ノ間ニ發シタルモノ二百二十一名ノ多キニ達セリ

母体ニ於テ神經系ノ變動ヲ起コシ又タハ帶埃利症ヲ發スルトキハ其女子ニモ亦タ本症ヲ遺傳スルコトアルハ疑フヘカラサル所ナリ

天稟躰質ニ於テ神經症ヲ有スル所ノ血族ニアリテハ一代ニ於テハ幣斯垤利亞ノ症候ヲ現出シ二代ニ至リ癲癇症トナリ三代ニ達シテ癲狂患者ノ子孫ヲ生スルコトアリ

然リト雖ドモ斯ノ如キ遺傳性ノモノハ他ノ神經症ヨリ來ルヿナク直チニ幣斯垤利亞ヲ繼續スルモノ多シ

婦人生殖器殊ニ子宮及ヒ卵巣ノ變調ハ幣斯垤利亞ノ重要ナル一原因タルハ古來唱道スル所ノ一說ナリ然リト雖ドモ先天若シクハ後天ノ神經系ニ於ケル特異ノ病的變狀アルヿヲ主張スルヿ能ハサルノミナラス諸般ノ變調アルモノハ皆ナ悉トク本症ノ症候ヲ現出スルモノト斷定スルヿ能ハサルナリ

神經ノ變調ハ生殖系ニ於テ現ハルヽヿアリ或ヒハ消化系ニ來リ或ヒハ循環系ニ發シ或ヒハ神經系ニ起ルコトアリ

神經系ニ於テ特異ノ症狀ヲ呈スルハ往時神經ノ馴習ニ於テ其當ヲ失スルカ爲メニ來ルヿアリ或ヒハ体育ノ法ヲ怠ルカ爲メニ起ルヿアリ或ヒハ屢々精神ノ感動ヲ變スルニ由ルモノアリ或ハヒ鬱屈憂愁其他精神ノ感動ニ歸スルコトアリ

偶マ幣斯垤利亞症ハ全ク交接器ノ原因ニ關セスシテ來ルヿアルハ最モ確實ナル所ノ說ニシテ吾人ハ其例証ヲ見ルヿ鮮ナカラス是故ニ先天畸形ノ婦人ニシテ子宮及ヒ卵巣ヲ

缺如シ又タハ生殖器ニ基因スル症徵ヲ有セサルモノニ於テ強劇ナル幣斯垤利亞症ヲ發スルヲ見ルヘシ

幣斯垤利亞ニ因テ來ル所ノ神經系ノ症候ハ貧血症ノ如キ理學的原因ノ爲メニ增劇スルコト殊ニ著ルシキモノナリ

血液ノ成分ニ於テ榮養分ノ缺乏ヲ起ストキハ神經組織ノ刺戟ヲ起コシ易キヲ以テ神經ノ作用頻數不整トナリ其保持スル所ノ力ハ却テ減少スルヲ見ルヘシ

病原論及徵候

官能的ノ錯雜ヲ發スル所ノ神經中樞ヲ撿スルニ毫モ造構上ノ變狀ヲ證明スルコト能ハサルナリ是故ニ幣斯垤利症ハ官能的變調ニ基因スル所ノ神經病ノ一種ト見做ヲ以テ適當トス

幣斯垤利亞ナル文字ハ元ト希臘國ノ子宮ノ義ニシテ此名稱ヲ用ヒタルハ本症ノ重要ナル原因ハ子宮病ナリトノ臆斷ヨリ出タルモノナリ

幣斯垤利症ニ於テ現ハルヽ所ノ病初ノ症候ハ輕微ナルモノニシテ唯タ僅カニ精神ノ刺衝及ヒ變動ヲ呈スルニ過キス暫時ニシテ著ルシキ變動ナキモ感動ノ狀ヲ變換スルヿ急劇トナリ或ヒハ悲シミ或ヒハ悅ヒ忽チニシテ泣哭シ忽チニシテ嗤笑スヘシ

本症ノ經過ニ於テ病機增進スルニ從テ啻ニ精神上ノ變症ヲ呈スルノミナラス理學的ノ

証徴ヲ現出スヘシ假令ヘハ患者頻カニ寒冷及ヒ温煖ノ變換スルヲ覺エ其部位ハ多ク四肢ニアリ又タ知覺遲鈍、震戰其他ノ感覺變狀ヲ起コシ其浮沈スルコト頗フル不整ニシテ時トシテハ強劇ナル麻痺ノ症狀トナリ忽チニシテ輕減スルトキハ他ノ事物ニ注意シテ其苦悶ヲ忘ル、ニ至ル又タ窒息狀ノ感覺ヲ將來セントスルニ當テハ心臟部ノ周圍ニ疼痛ヲ發シ心悸亢進シテ呼吸疾數トナリ胃部膨滿及ヒ噯氣ヲ起スヘシ

又タ一種ノ球狀物アリテ喉頭ニ向テ逼迫シ殆ント喉頭ヲ絞窄セントスルモノヽ如シ吾人ハ之レヲ帝斯埃利球ト稱ス

顔面潮紅シ忽チニシテ蒼白色トナリ忽チニシテ再ヒ赤色トナリ交互變換シテ定リナク精神常ニ安ンスルコトナク偶マ末期ニ際シ大笑シテ殆ント願ヲ解クモノアリ然リト雖ヒ普通ノ症ニアリテハ泣哭悲哀ニ沈ムモノ多ク稀薄水樣ノ尿液ヲ排泄スルコト頗フル多量ナリ

斯ノ如キ發作ヲ將來スルハ平素健康ナル若年ノ婦人ニ於テ發スル丁多ク他ニ危篤ナル症候ヲ呈セサルモノナリ

又タ上記ノ症候ヲ發スルノミナラス間代性及ヒ強直性ノ痙攣ヲ將來スルコトアリ一層強劇ナル發作ヲ將來スルモノニアリテハ其發病ニ先タチテ戰慄及ヒ温煖ノ症候ヲ

現出シ尋テ屢々欠伸及ヒ吃逆ヲ發シ四肢ニ倦怠不安ヲ覺エ又タ理由ナクシテ妄リニ嘲笑或ヒハ泣哭ヲ發シ放尿頗フル頻數ナリ

心悸亢進シテ球狀物ノ喉頭ニ逼迫スルヲ覺エ呼吸及ヒ嚥下ニ際シ吃逆ヲ起シ高調ナル鑛屬性ノ咬嗽ヲ發シ顔部固定シテ穿鬚緊緊シ顔面ニ皺襞ヲ生シ又タ齦齒ヲ聽クアリ兩手ヲ把握シ下肢ニ梗直ヲ發スヘシ

上記ノ症候ハ強直性痙攣ヲ發シタル時期ニ於テ現出スル所ナリ

二三分時間乃至一二時間ヲ過クルトキハ發作症狀退消シ泣涕漏淋トシテ流ル、カ如ク清澄ナル尿ノ利スル丁多量トナリ終ニ虛脱シテ睡リニ就クモノ多シ

症ニヨリテハ強直性痙攣ヲ發スルノ期少馬ニシテ不整ナル間代性ノ搐掣ヲ發シ四肢ヲ放開シテ呼號ヲ發シ泣哭咽啞シテ涙涕ノ喉頭ニ流ル、ニ當テ絞窄ノ感覺モ又タ鎮靜シ高調ナル吃逆ヲ發シ腹肚膨滿シテ雷鳴ヲ聽キ偶マ骨盤ニ於テ一種ノ運動ヲ起コシ四肢ヲ固定シテ靜置スルヲ見ルアリ

患者毫モ神識ヲ失スル丁ナク瞳孔及ヒ眼瞼ノ反射的運動共ニ依然トシテ健態ヲ失スル丁ナク牙関緊急スト雖ヒ液体ノ喉頭ニ達スルヤ否ヤ之レヲ嚥下スルヲ得ヘシ又タ目ニ觸ル、所ノ事物ヲ誤認スル丁ナシ

筋肉ノ搔作顫フル強劇ナルヲ以テ全身ノ皮膚ハ當初厥冷シタルモノ温煖トナリ終ニ發汗スルニ至ルモノ多シ

斯ノ如キ搐搦ノ症狀ハ數分時乃至數時間持續スヘシ而シテ涙涕ノ流洩スルニ當テ退消シ患者全然虛衰シテ昏瞶ニ陷ヰルヲ常トス

普通ノ症ニアリテハ發作時ニ於テ反射機能增進シ顏面頭顱、脊椎或ヒハ卵巢部ヲ壓排スルトキハ益々強直性ノ運動ヲ起コスヘシ

「チヤーコツト」氏ノ說ニ據レハ卵巢ヲ壓排スルトキハ本症ノ發作ヲ將來スヘシト雖ヒ之レヲ固定シテ強壓スルトキハ幣斯垤性癲癇症ヲ鎭靜スルコトアリト云フ

症ニヨリテハ毫モ搐搦ヲ發セサルコトアリト雖ヒ忽チ五官閉止ノ狀ニ陷ヰル患者其身体ヲ動カスコトナク顏面蒼白色トナリ眼球ヲ閉鎖シ殆ント呼吸ヲ廢絕シ脈搏頗フル幽微ニシテ其外觀屍体ノ如シ

又タ症ニヨリテハ五官閉止ノ症狀ヲ呈スルノミナラス強梗症ヲ併發シ毫モ四肢ノ運動ヲ營ムコト能ハサルモノアリ

本症ノ時期ハ一樣ナラサルモノトス

本症ノ轉歸ハ其少數ニ於テハ諸症候共ニ輕快スト雖ヒ其發作數日間ニ涉ルモノアリ

發作症ノ末期ニ於テ分利性排泄ヲ將來スト雖ヒ弛期ニアリテハ之レヲ見ルコトナシ

月經時ニ發スルモノ又タハ夜間ニ發作セサルモノニアリテハ一定シタル發作反復ノ期ヲ檢出スルコト能ハサルナリ

身体、精神及ヒ行爲ニ於テ發作ヲ誘起スヘキ症狀ノ退消セサルトキハ次回ノ發作ヲ將來スルコト容易ナルハ素ヨリ論ヲ俟タス

幣斯垤利症ハ知覺、運動、精神及ヒ脈管運動神經ノ諸系統ニ於テ其發病ノ初起若シクハ發作間歇時ニ現ハルヽ所ノ汎發性ノ變調ヲ併發スヘシ

網膜ニ於テ感受力頗フル銳敏トナリ最モ輕微ナル光線ニ觸ルヽモ忽チ羞明スルヲ以テ多クハ暗室内ニ靜臥スヘシ

眼華閃發又タハ物体ノ浮遊スルカ如キヲ覺エ或ヒハ遠景ヲ眺望シ或ヒハ行人ノ顏貌ヲ見ルモ復雜混亂シテ辨別スルヿ難ク精神モ又タ錯亂スルモノアリ

又タ聽官ノ知覺亢進シテ私語スルモ疼痛ヲ發シ常ニ高調ナル音響又タハ雷鳴スルカ如キヲ覺ユヘシ偶マ聽官ノ機能頗フル銳敏トナルコトアリ

幣斯垤利症ニ於テハ癲狂患者ノ如ク諸般ノ音響ヲ聽取スト雖ヒ其最モ主要ナル点ハ音響ノ原因ヲ判別スルヲ得ルモノトス

嗅官ニ於テモ亦タ甚タシキ錯誤ヲ將來シ或ヒハ顔フル鋭敏トナリ輕微ノ香臭モ之レヲ感得スルニ至ルヘシ

味官モ亦タ頗フル鋭敏トナルモノナリ故ニ幣斯埜剥性偏癖ト稱スルモノニアリテハ嗜好スル所ノモノ殆ント平素ト異ナリ白堊、石筆若シクハ封蠟ヲ食スルモノ鮮ナカラス

全身ノ知覺機ニ於テハ多少亢盛シテ諸部ニ知覺過敏ノ点ヲ現出シ其間隙ニアリテハ却テ知覺脱失スルヲ見ルヘシ

疼痛ハ幣斯埜症ニ於テ現ハル、所ノ知覺機ノ變調ノ最モ重要ナルモノニシテ就中普通ノモノハ頭痛ナリ

頭痛ハ頭蓋全部ニ渉ルモノアリ甚シキハ毛髮ヲ梳ルニ當テ非常ノ疼痛ヲ懇ルモノアリ或ヒハ顱頂部ノ嶺頂ニ限局シテ頭痛ヲ發スルヿアリ或ヒハ顳顬骨ノ部ニ感スルヿアリ或ヒハ上眼窠突起ノ部ニ發スルヿアリ而シテ惡寒、戰慄、熱症、惡心、嘔吐及ヒ便秘ノ如キ諸症候ヲ誘發スヘシ吾人ハ此症ヲ斥シテ幣斯埜剥性頭痛ト云フ

此症ハ多ク月經時ノ前後ニ發作スルモノナリ

乳房ニ神經痛ヲ發スルモノニアリテハ刺衝及ヒ疼痛ノ感覺アリ或ヒハ心臟部ニ神經痛ヲ起シ或ヒハ左側第六及ヒ第七肋間隙ニ疼痛ヲ發スルコトアリ

日常肋間神經痛ヲ發スルモノ最モ多ク其數殆ント頭痛ヲ發スルモノヽ右ニ出ルカ如シ

幣斯埜剥性ノ婦人ハ腸管内ニ尾斯ノ膨滿ヲ起スヿ甚タシキヲ以テ屢々痛ニ因シムモノヲ見ルコトアリ

又タ肚腹ニ於テ知覺過敏ノ症候ヲ現出スルノミナラス殆ント腹膜炎ニ類スルヿアリ然リト雖モ本症ニアリテハ患部ノ皮膚ニ觸レサルモ強劇ナル疼痛ヲ懇エ患者其疼痛ヲ感セサル時ニ於テハ肚腹ヲ壓排スルモ苦悶ヲ覺エサルモノトス

胃痛ハ最モ普通ノ一症候ナリ又タ反對ノ感覺ヲ起スモノニアリテハ肚腹空虛トナリ或ヒハ非常ニ膨滿ヲ起コシ雷鳴ヲ發シ食物ヲ嫌忌スルコトアリ

寄生物ノ發現及ヒ運動ヲ撿出スルコトアリ

膀胱ノ刺衝モ亦タ普通ノ一症候タリ

第一産ノ後若シクハ打撲症ニ罹ルノ後尾骶骨ノ末端ニ疼痛ヲ發スルコトアリ是レ即チ一種ノ尾骶骨痛ニシテ容易ニ治セサル所ノ一症ナリ

脊椎ノ刺衝モ亦タ屢々懇フル所ノ一症候ニシテ一二ノ脊椎ニ於テ棘狀突起若シクハ其近傍ヲ壓排スルトキハ鈍痛及ヒ苦悶ヲ發スルモノナリ然リト雖モ脊椎ノ刺衝ニ基因スル所ノ症候ハ本症ノ經過中現ハル、所ノ他ノ疼痛ニ比スレハ敢テ重要ナル関係ヲ有セサ

ルモノトス

諸関節モ亦タ侵カサル、コトアリト雖ドモ特ニ膝関節ヲ襲フモノ多ク疼痛及ヒ緊張ヲ發スルモノナリ當初此症ヲ撿出シタルハ大家「ビンヂヤミン、ブロヂー」君ニシテ同氏ハ之レヲ幣斯垤利性関節症ト稱セリ

本症ニ於テ現ルヽ所ノ関節症ノ特異ナル徴証ハ直チニ関節ヲ侵カスヿナク其周圍ノ部位ニ於テ疼痛及ヒ腫脹ヲ發スルニアリ又タ屢々関節ヲ屈曲スルノ時ニノミ梗強ノ感覺ヲ起スニ過キサルヿアリ

本症ノ患者ニ於テ身体ノ一部ニ知覺脫失ノ症候ヲ發スルヿ鮮ナカラス又タ疼痛不感ノ症狀ヲ呈スルモノニアリテハ巨大ナル創傷ヲ被ムルモ疼痛ヲ感セサルモノアリ

又タ半身ヲ限局スル所ノ知覺脫失ヲ發スルコトアリ之レヲ半身知覺脫失ト稱ス

筋肉ノ知覺及ヒ重量ヲ舉揚スルノ力ヲ脫失スルコトアリ而レドモ觸覺及ヒ温煖ノ感受力ハ依然トシテ健態ヲ失ハス

網膜ノ知覺脫失ヲ將來スルモノニアリテハ終ニ弱視症ヲ發スヘシ

幣斯垤利症ノ經過中麻痺ヲ發スルモノ頗フル多ク且從雜ノ症狀ヲ呈スルモノ鮮ナカラサルモノトス

是故ニ咽頭ノ麻痺ニ因テ嚥下困難ヲ來タシ又タ膣門幣ノ麻痺ニ據テ瘖啞ヲ發シ或ヒハ此二症ヲ併發スルコトアリ或ヒハ突然消退スルコトアリ

膀胱ノ麻痺ニ據テ尿閉ヲ將來スルハ幣斯垤症ニ於テ屢々現ハル、所ノ症候ナリ此時ニ於テ通利ヲ得ント欲スルニハ「カテーテル」ヲ用ヒサルヘカラス

吾人カ幣斯垤利性麻痺ト稱スルモノハ一肢若シクハ數肢ヲ侵カシ或ヒハ一簇ノ諸筋ヲ襲フノミナラス其症狀モ亦タ一樣ナラサルモノトス故ニ或ヒハ一肢ヲ限リテ侵カスモノアリ或ヒハ一側ノ上肢ヲ襲ヒ同時ニ其反對側ノ下肢ニ發スルコトアリ或ヒハ半身不遂ノ症狀ニ類シ或ヒハ截癱ト誤認シ或ヒハ同時ニ四肢共ニ麻痺スルヿアルカ如シ

麻痺ノ症狀ハ輕重一樣ナラス或ヒハ徐發スルアリ或ヒハ發作後突然ニ來ルコトアリ或ヒハ毫モ其原因ノ徴知スヘキモノナクシテ發スルコトアリ

偶マ四肢ニ於テ久シク其操作ヲ廢絶スルカ爲メニ衰耗ヲ將來スルモノニアラサレハ電氣ノ反働力ヲ減スルコトナシ

麻痺ト共ニ知覺脫失ノ症候ヲ併發スルヿアリト雖ドモ敢テ緊要ナルモノニアラス此時ニ於テ電氣ノ感受力ヲ失スルモノナリ故ニ大家「ダチン子」氏ハ此徴候ニ據テ幣斯垤利性ノ麻痺ト他ノ疾患ニ因テ來ル麻痺トヲ鑑別セリ而レドモ症ニヨリテハ感受力ノ健全ナル

ノミナラス却テ增進スルヲ見ルヿアルカ故ニ敢テ確實ナルモノト見做スヿ能ハサルモノナリ

幣斯垤利性麻痺ノ時期一樣ナラス或ヒハ二三時間ニシテ歇ムモノアリ或ヒハ二三日乃至數月ニ達スルモノアリ甚タシキハ數年間依然トシテ退消セサルモノアリ而シテ一部ヨリ他部ニ轉スルノ際卒然消退スルコトアリ

麻痺ト共ニ攣縮ヲ發スルコトアリ或ヒハ麻痺ヲ發スルノ後ニ來ルコトアリ

上肢ニアリテハ前腂、手腕若シクハ諸指ノ痙攣性攣屈症ヲ發スルコトアリ

下肢ニアリテハ股部、脛部及ヒ膝関節ノ痙攣性緊張ヲ將來スヘシ

攣縮症ノ治癒ハ麻痺ノ症候ト其轉歸ヲ同フスルモノナリ故ニ其時期一定セサルノミナラス行爲上ノ感動ニ因テ俄然轉化スルコト鮮ナカラス

脈管運動神經ノ統系ニ於テモ亦タ諸般ノ變調ヲ現出スヘシ假令ヘハ心臟ノ作用不整ニシテ微弱トナリ月經不調及ヒ經閉、衂血、咯血、吐血及ヒ卵巣出血ノ如キ諸症候ヲ現出スルコトアリ

知力ヲ使用スルコト非常ナルモノ、又タハ忍耐力及ヒ自節ノ精神ニ富メルモノニシテ本症ヲ發シタルカ如キ症狀ヲ呈シ醫家屢々誤診スルコトアリ最モ戒心セサルヘカラス

重創若シクハ挫傷ニ因テ精神ノ恐駭ヲ起コシ之レカ爲メニ本症ノ徵候ヲ呈スルヿアリ

幣斯垤利性ノ處女ニ於テ異常ノ刺戟ニ因テ病的ノ熱望心ヲ起コシ自己レカ保育スル所ノ小兒ヲ傷ツケ或ヒハ人家ニ火ヲ放チ或ヒハ自己ノ身体ニ於テ皮下ニ縫針ヲ刺スモノアリ或ヒハ自己レカ排泄シタル尿液ヲ飲ミ或ヒハ縫針ヲ他人ニ示シテ膀胱ヨリ排出シタリト云ヒ或ヒハ陰腔内ヨリ動物ノ屍体ヲ摘出シタリト云フモノアリ

幣斯垤利症ニ於テ現ハルヽ所ノ患者ノ想像及ヒ行爲ハ實ニ千狀万態ニシテ殆ント限界ナキカ如シ故ニ德義上ニ於テ背戻スル所ノ所爲ヲ顧ミサルノミナラス精神錯誤ノ症狀トナリ頑固ナルモノニアリテハ數日間癲狂院ニ投セサルヘカラス

症ニヨリテハ精神ノ變調殆ント鬱憂病ニ類シ其鬱屈ヲ慰スルカ爲メニ或ヒハ他人ヲ傷害セントスルモノアリ或ヒハ自殺ヲ謀ルモノアリ

又症ニヨリテハ德義上ノ癲狂ニ類スルモノアリ假令ヘハ他人ノ財物ヲ盜ミ或ヒハ衣服ヲ破壞シ或ヒハ人家ニ放火スルモノアリ又タ淫欲ヲ恣マヽニシ或ヒハ暴食、多飲スルモノアリ

又タ妄誕濟說ヲ信シテ他人ノ說諭ニ服スルヿナク恰モ自己レ獨リ世教ノ盜與ヲ究メタルカ如キモノアリ

經過時期及轉歸

最トモ幼年ノ際ニ發スルモノニアリテハ春機發動期ヨリ三十五歳ノ間ニ於テ其極度ニ達シ年ヲ經ルニ從テ漸々輕減シ老年ニ至リ終ニ全治スルモノナリ

遺傳性ノモノニアリテハ諸症候ノ增進スルコト頗フル緩慢ニシテ治効ヲ奏スルコト亦タ頗フル困難ナリ

大家「ミツチエル」氏ハ人体ノ脂肪及ヒ血液論ト題スル一小冊ヲ著ハシ其中ニ本症ノ徵候ヲ詳說セリ爰ニ其概略ヲ抄録スヘシ

幣斯垤利症ハ其發病ノ原因ノ何タルヲ問ハス患者ノ身体漸々蒼白色トナリ羸瘦シテ食思減少シ偶マ食物ヲ嗜好スルヿアルモ榮養ノ効ヲ奏スルヿナク何等ノ事業ヲ執ラシムルモ忽チ衰耗ヲ來タスヘシ故ニ裁縫、習字、讀書及ヒ運動ノ如キハ皆ナ之レヲ嫌忌シ唯タ臥床ニ入リ或ヒハ椅子ニ坐スルヲ以テ最モ幸福ナリトスヘシ

諸般ノ操作ニ懶ウク毫モ疾患ヲ徵スヘキモノナクシテ自ツカラ疼痛及ヒ苦悶ヲ懇ヒ夜間安眠スルヿナク常ニ衝動及ヒ強壯ノ療法ヲ要スルモノヽ如シ

此期ニ際シ屢々其素加里、阿片、格魯刺兒及ヒ武爾泥ノ如キ藥劑ヲ誤用スルモノ鮮ナカラス當初子宮ノ變症ヲ呈セサルモノニアリテハ此期ニ至リ現出スルモノニシテ全身ノ

健康ヲ保持スルノ策ヲ運ラシ傍ハラ子宮ノ症候ヲ治セントスルモ皆ナ徒勞ニ屬シ毫モ其効驗ヲ見サルモノ多シ

又タ消食不良及ヒ便秘ヲ起コシ屢々治術ヲ試ムルモ其効驗ナキニ因シムヿアリ

斯ノ如キ患者ニシテ平素精神ノ感動ヲ起シ易キモノニアリテハ最モ自治ノ力ニ富メル所ノ婦人ト雖モ非常ノ虛脫ヲ起コシ毫モ自カラ其心ヲ制スルヿ能ハサルニ至ル

此時ニ際シ治法ヲ施サヽルヿハ終ニ再ヒ病蓐ヲ離ルヽコト能ハサルモノ多シ

脊椎ニ疼痛ヲ起スノミナラス幣斯垤利症ノ本徵タル諸般ノ怪異ナル變症ヲ現出スヘシ

以上述フル所ハ「ミツチエル」氏ノ所論中最モ緊要ナル部ヲ抄出シタルモノナリ讀者其詳ヲ知ラント欲セハ其原書ニ就テ講究スヘシ

婚姻及ヒ分娩ノ如キ感動ニ因テ全然幣斯垤利亞ノ症候ヲ消滅スルコトアリ或ヒハ久シク其症候ヲ反復スルモ漸々輕減スルモノ多シ

普通ノ症ニアリテハ輕重ノ差アリテ一定スルヿナシ而レヒ最モ強劇ナル症候ヲ呈スルヒハ其時期最モ短少ナリ

生命ノ危殆ニ迫マルカ如キモノハ頗フル稀レナリ

知力ノ變調ヲ將來スルコトアルモ輕微ナルモノトス而レヒ經久ノ症ニアリテハ治効ヲ

奏スルコト確實ナラス屢々療法ヲ變換シ百方治癒ヲ促スモ全然健態ニ復スルモノ最モ鮮ナシトス

診斷

幣斯垤利症ノ診斷ハ年齢、男女及ヒ症候ノ變換シ易キト全身ノ諸部ニ瀰蔓スルトヲ以テ明亮ナリトス

癲癇症ハ發作ノ時期ヲ區別スルヲ得ヘク又タ感覺閉止及ヒ反射的運動ノ廢絶ヲ現出シ舌体或ヒハ頰内ノ咬傷及ヒ發作後ノ昏睡ヲ將來スルノミナラス其間歇時ニアリテハ毫モ幣斯垤利亞ノ症狀ヲ呈セサルモノナリ

幣斯垤利性ノ婦人ニシテ癲癇症ヲ併發スルモノニアリテハ毫モ其差異ヲ撿出スルコト能ハサルヲ以テ此二症ハ同時ニ現出シタルモノト見做スヘシ殊ニ幣斯垤利性癲癇症ニ於テハ強直性痙攣ノ如キ特殊ナル容貌ヲ呈スルカ故ニ容易ニ之レヲ診斷スヘシ

卵巣ヲ按壓シ又タハ患者ノ病歴ヲ撿スルトキハ診斷上ノ裨益トナルモノ鮮ナカラス

諸般ノ幣斯垤利性麻痺ハ他ノ原因ニ依テ來ルモノト異ナリ依然トシテ電氣ノ収縮力ヲ保有スルモノナリ又タ俄然電氣ノ感受力ヲ消失シ毫モ榮養上ノ變症ヲ呈スルコトナシ而レ𪜈幣斯垤利亞ニ基因スル諸般ノ病歴ヲ有スヘシ

幣斯垤利性ノ半身不遂ニアリテハ毫モ顔面ノ麻痺ヲ發スルヿナク又タ半身不遂ノ症ニ

候ニ先タチテ卒中狀ノ發作ヲ將來スルコトナシ

治則

本症ニアリテハ他ノ疾患ニ比スレハ行爲上及ヒ衛生上ノ規制ヲ守ラシムルコト最モ緊要タリ

幣斯垤利性ノ体質ヲ遺傳スルモノニアリテハ幼稚ノ時ヨリ最モ攝生法ニ注意セサルヘカラス而シテ知力發達ノ期ニ達スルトキハ勉メテ自ツカラ節制スルノ精神ヲ馴致セシメ体育及ヒ消化機ノ作用ヲ發達セシメ特リ神經系ヲシテ從順ナラシムルヲ要スヘシ

毎日早晨ニ臥床ヲ離レ滋養易化ノ食品ヲ擇ミ身体ノ保護ニ適スル所ノ衣服ヲ着セシメ妄リニ社會ノ習俗ニ拘泥シテ華美ニ趨ルコトナカレ

幼年ノ處女ニアリテハ購讀スル所ノ書籍ニ最モ注意セサルヘカラス何ントナレハ近世發兌スル所ノ裨史小説ノ如キハ概子皆ナ男女ノ関係ヲ説話スルモノニシテ却テ病的ノ忘想及ヒ架空ノ説ヲ信セシムルモノ鮮ナカラサルヲ以テ其害モ亦タ淺小ナラサルモノトス

房事過度ハ縱ヒ世人一般ニ想像スルカ如ク甚シキ感動ヲ有セサルモノアリト雖𪜈神經系ニ於テ發分ノ障害ヲ誘起スヘキハ素ヨリ論ヲ俟タス

發病前豫防ノ如何ニ係ハラス既ニ幣斯垤利亞症狀ヲ現出スルトキハ須臾モ其治法ヲ怠ル

ヘカラス

貧血ノ症狀ヲ呈スルモノニアリテハ鐵劑ヲ投シ滋養易化ノ食物ヲ撰ミ適宜ノ運動ヲ命シテ以テ其症狀ヲ整從スヘシ

亞砒酸鐵、斯篤利幾尼涅及ヒ燐酸鹽類ノ如キ神經系ニ特異ノ効驗ヲ現ハス所ノ藥品ハ最モ適當ナリ

又タ全ク反對ノ症狀ニシテ肥滿セル患者ニアリテハ鐵、砒石及ヒ斯篤利機尼涅ヲ禁シ臭素加里「ゲルセミユーム」及ヒ舛麻ノ如キモノヲ投セサルヘカラス

通常ノ幣斯埜利症ニシテ搐掣ヲ發セサルモノニアリテハ纈草酸安謨亞尼越幾斯、龍腦舍利別、纈草流動越幾斯少量或ヒハ「ホフマン」鎮彌液二三滴ヲ取リ數分時毎ニ反復スルヒハ發作ヲ鎮靜スヘシ

搐掣ヲ將來スルモノニ於テハ牙関緊急ヲ豫解スルコト頗フル困難ナルヲ以テ亞的兒或ヒハ硝酸亞彌兒ノ吸引法ヲ施コシ「テレビン」油、纈草酸「アンモニヤ」阿蘭丁幾ヲ直腸ニ注射スヘシ

刷症ニアリテハ莫爾比涅十六分ノ一氏(〇、〇〇〇四ガラム)ヲ皮下ニ注射スヘシ

幣斯埜利症ニ於テ諸瘢ノ疾患ヲ併發スルモノニアリテハ最モ注意シテ其治術ヲ施コサ

ヽルヘカラス

偏頭痛若シクハ強刷ナル頭痛ヲ發スルヒハ勉メテ全身ノ健康ヲ保護シ「ガラナ」(強壯藥ノ一種)番木鼈、砒石、双鸞菊ノ如キ藥劑ヲ投シ傍ハラ電氣療法ヲ施コスヘシ

偶マ幣斯利利性ノ嚥嚥及ヒ嚥下困難ヲ將來スルモノニ於テ摩擦電氣ヲ通シテ頻挫スルコトアリ

知覺脫失ヲ將來スルモノニアリテハ患部ヲ乾燥ナラシメ之レニ電氣性ノ刷毛ヲ外用スルヒハ最モ良効ヲ奏スヘシ

諸瘢ノ幣斯埜利性麻痺ニハ摩擦電氣ヲ以テ最良トス

醫家ノ熟練ニ依テ電氣ノ感受力ヲ補佐スルヒハ唯タ一回ノ電氣ヲ通スルモ能ク經久ノ麻痺症ヲ治スルコトアリ

大家「ミツチエル」氏カ發明シタル療法ハ頑固ナル幣斯埜利症ニ向テ偉効ヲ奏スルコト最モ多シト云フ其法タルヤ摩擦法ト摩擦電氣ト食物ノ節制ヲ守ラシムルニアリ

摩擦法ハ顏面ヲ除クノ外全身諸部ノ筋肉ヲ摩擦シ諸関節ヲ運轉シ又タ摩擦電氣ヲ通スルニアリ又タ同時ニ豚脂若シクハ「カヽオ」酪ヲ塗擦スヘシ

食物ノ節制法ハ當初專ハラ牛乳ノミヲ飲用セシメ漸々他ノ食品ヲ配伍スヘシ

諸般ノ運動ヲ禁シ毫モ患者自ツカラ隨意ノ操作ヲ營ムヿナク唯タ外部ヨリ摩擦及ヒ運動ヲ催進スヘシ

此療法ニ依テ体重ヲ増加スルノミナラス漸々快復ニ赴クノ確徴ヲ呈スルトキハ隨意筋ノ運動ヲ營マシムヘシ

「ミツチエル」氏ノ療法ニ於テ重要ナル点ハ患者ヲシテ發病前ノ社會ヨリ離隔セシメ又タ其生活ノ狀態ヲ改良セシムルニアリ

常ニ看病婦ノ保護ニ依頼シ食物ハ專ラ牛乳ヲ飲マシメ飢餓ノ感覺アルトキハ必ラス之レヲ與フヘシ

又病蓐中ニ横臥セシメ妄リニ行歩スルヿナク諸般ノ操作ヲ禁スヘシ

電氣療法ヲ怠ルヿナク又タ教育法ニ注意シテ知力ノ發達ヲ促カスヘシ斯ノ如キ療法ハ鋭敏ナル醫家ノ熟慮ニ依ラサルヘカラス

釋義

○神經刺衝（原名ニウラスセニヤ NEURASTHENIA.）

神經刺衝ナル文字ハ元ト大家「ボーシヤツト」氏カ神經ノ症狀ヲ解釋スルカ爲メニ應用シタル名稱ナリ

醫士「ジヨージ、エム、ベヤド」氏ハ更ニ此用法ヲ改正シ大ニ其意義ヲ布演セリ

近世ニアリテハ神經質ト稱スル所ノ特異ナル体質ニ於テ現ハル、神經系ノ虚脱ヲ徴スルカ爲メニ通用セリ

原因

最モ重要ナル病原ハ神經系ニ於ケル特異ノ体質ニシテ多クハ遺傳ニ係ルセノナリ或ヒハ又タ神經系ノ過敏ナル父母ノ結婚ニ因テ來ルヿアリ

本症ニ罹ルモノニ於テ其体質ノ特徴ト見做スヘキモノハ精神ノ發育ニ於テ知力ノ發達スルコト早ク又神經系ニ於テ諸般ノ事物ニ關レテ感動シ易ク、消化機能微弱ニシテ第二ノ同化作用充分ナラス其他排泄ノ作用モ亦タ活潑ナラサルニアリ

修身及ヒ知識ノ教育ニ於テ其當ヲ得サルトキハ却テ神經系ノ感受力及ヒ變動力ヲ増進スヘシ故ニ事物ノ理義判斷ノ作用ヲ發達セシムルヿナク妄リニ五官及ヒ感動ノ機能ヲ錬習セシムルカ如キハ殊ニ有害ナリトス

斯ノ如ク不幸ニシテ教育ノ方ヲ誤マルトキハ其諸機関ノ馴習ニ於テ疑惑ヲ起コシ終ニ全

身ノ知覺悉トク鋭敏トナリ一部ノ神經ニ於テ變調ヲ呈セサルモ自ツカラ病者トナリタルカ如キ感情ヲ起スヘシ

斯ノ如キ患者ハ平素神經系ノ刺衝ヲ起シ易ク常ニ身体ノ感覺ヲ忘ルヽヿナク一局處ノ疼痛若シクハ神經變調ヲ發シタルモノト臆斷ヲ下タシ戰々兢々トシテ安ンスルヿナシ屢々神經質ノ處女ニシテ其實母ノ愚鈍ナルアリ或ヒハ其近親若シクハ友人ノ爲メニ常ニ恐駭、感動及ヒ心痛ヲ起コシ又タハ之レヲ憐レミ之レヲ慰セント欲シテ終ニ自己レノ神經ニ於テ變調ヲ誘起スルコトアリ

以上述ル所ハ婦人ニ於テ現ハルヽ神經刺衝ノ症候ヲ發スル所ノ普通ノ原因ナリ

男子ニアリテハ神經病ノ症狀ヲ有スルヿハ諸般ノ行爲ニ依テ神經ノ刺衝ヲ起スヘシ春機發動期ヨリ二十五歲ニ達スルノ間ニアリテハ手淫ヲ恣マヽニシ結婚ノ後ニアリテハ房事過度ナルニヨリ或ヒハ春心發動スルコト過盛ナルニヨルヿアリ其他消食不良ニ因スルアリ或ヒハ學業若シクハ事務ニ勉勵スルコト過度ナルカ爲メニ來ルコトアリ知力作用過度ナルモノ或ヒハ事務ニ勉勵スルカ如キモ亦タ神經變調ノ一原因ナリト雖ヒ、他ノ諸原因ニ比スレハ唯タ瑣少ノ障碍ヲ起コスニ過キサルナリ

神經系ニ於ケル諸般ノ病的變狀モ亦タ其一原因トナルカ如シ

往昔ニアリテハ脊椎ノ疼痛及ヒ苦悶ヲ以テ充血ニ基因スルモノト見做シ背部ニ吸角發泡或ヒハ腐蝕藥ノ如キ療法ヲ施コセリ

爾後大家「ハンモンド」氏ハ脊椎ノ貧血ニ因テ起ルヿヲ檢出シ其療法ノ如キハ全ク反對ノ方法ヲ用ヒタリ

近世「チカゴー」府ノ醫士「ゼウエル」氏ハ斷然動カスヘカラサル所ノ說ナリトシテ論スルヲ見ルニ本症ニ罹ルトキハ知覺神經根ノ榮養缺乏ニ因テ末梢神經元質ノ質間物質ノ消滅スルモノトナセリ而シテ此症狀ヲ呈スルハ專ハラ脊髓索ノ地平線ヲナス所ノ一局部ヲ限ルモノトナセリ

然リ而シテ同氏ハ重要ナル病理的變狀ノ證徵ヲ檢出スルヿ能ハサルノミナラス脊椎ニ於ケル局處ノ變調ヲ發スルニ先タチテ現出スル所ノ精神ノ症狀ノ如キハ毫モ論及セサルナリ又タ同氏ノ想像スル所ニ據レハ脊髓索ノ榮養缺乏ヲ將來スルハ操作過度及ヒ刺衝過度ニ基因スルモノトナセリ

脊椎ノ操作過度ナルトキハ腰椎部或ヒハ背腰關節若シクハ頸椎ノ部ニ於テ脊髓實質ノ榮養變狀ヲ誘發スヘシ斯ノ如キ妄想ニ據テ同氏ハ神經刺衝ヲ以テ專ハラ力役者ヲ侵カス所ノ疾患トナセリ然リト雖ヒ吾人カ日常實驗スル所ヲ以テスレハ此特殊ナル疾患ヲ發

スルハ却テ怠惰放逸ナルモノニ多シ故ニ世人ハ皆ナ特ニ上等社會ノ人ヲ憂フ所ノ疾病ト見做セリ

本症ニ脊髄索ニ變狀ヲ呈セサルノミナラス精密ニ檢査スルモ健態ト異ナル所ナキヲ見ルヘシ

有機的官能ニ於テハ明カニ其變狀ヲ見ルノミナラス最モ重要ナル變狀ハ精神感受力ノ中樞ニアルヲ以テ腦内ノ此部ニ於テ諸般ノ末梢機ニ刺戟ヲ起ストキハ精神ニ感動ヲ起スヘシ

徴候

全身ノ諸部或ヒハ諸機関ニ於テ一モ健全ナルモノナシ是故ニ食思欲乏シテ食物ヲ嚥下スルトキハ忽チ苦悶ヲ惹エ劇症ニアリテハ最モ輕軟淡泊ニシテ消化シ易キモノヲ食スルモ疼痛及ヒ惡心ヲ起スヘシ

疼痛ハ胸部ノ左側又タハ左季肋下部ニ發シ或ヒハ屢々心尖部ニ感スルコトアリ

胃中ニ瓦斯ヲ醸成シテ緊滿鼓脹シ又タ噯氣ヲ發シ偶マ其瓦斯ノ量頗フル多量トナリ其成分ハ空氣及ヒ炭酸瓦斯ナリ

腸管ノ知覺鈍麻シテ其作用活潑ナラス故ニ大便堆積シテ球狀ノ塊トナリ粘液ヲ以テ之レヲ被包シ泥軟ニシテ灰白色ヲ呈シ常ニ疝痛ヲ起コシ且風氣ヲ釀スヘシ

榮養欠乏シテ皮下脂肪減少シ筋肉衰耗シテ体力ノ減損スルコト甚タシキヲ見ルヘシ

脈搏疾數ニシテ張力弱ク心臟ニ刺衝ヲ起コシ屢々心悸亢進ノ發作ヲ將來スヘシ

脈管運動神經ノ系統ニ於テ運動機亢盛シテ戰慄ヲ發シ且厥冷シテ手足共ニ蒼白色トナリ粘汗ヲ流シ顔面潮紅シ或ヒハ蒼白色トナリテ屢々變換シ動脈管ノ張力ノ如キハ俄然甚タシキ變化ヲ呈ヘシ

五官ニ於テモ亦タ種々ノ變症ヲ呈スヘシ

眼球ニアリテハ通常甚タシキ差明ヲ來タシ病初ニアリテハ讀書ニ際シ稍々困難ヲ覺エ卷ヲ蓋フテ休憩シ爾後數分時間ト雖モ讀書スルトキハ忽チ前額頭痛ヲ發スルニ至ル

瞬時ニシテ光線ヨリ頭顱ヲ回轉スレハ忽チ曇暗トナリ終ニ人工ノ光線(即チ燈火)ニ依テ讀書スルコト能ハサルニ至ル

忽チニシテ眼球ノ生理的作用ヲ廢絶シ常ニ病室内ヲ暗黑ナラシメサレハ輕微ノ光線ニ觸ルヽモ劇痛ヲ發シ且頭痛眩暈ヲ將來スヘシ

聽官ニ於テモ亦タ非常ニ鋭敏トナルコト多シ故ニ輕微ニシテ粗礪ナル聲音ヲ聽クモ苦悶ヲ起コシ偶マ強劇ナル音響ニ觸ルヽトキハ腦ヲ貫ヌキ破壞スルカ如キ感覺ヲ起コシ眩暈及ヒ卒倒ヲ將來スヘシ是故ニ本症ノ患者ニアリテハ病室内ニ諸般ノ音響及ヒ光線ノ

進入スルヲ豫防スルコト最モ緊要ナリ

食物ニ於テ膏味ノモノハ之レヲ嫌忌シ不快ノ香氣アルモノヲ食スルトキハ惡心及ヒ卒倒ヲ起スヘシ

男子ニ於テ病初現ハル、所ノ神經虚衰ノ症狀及ヒ緊要ナル證徴ト見做スヘキモノハ精神ノ作用ニ於テ刺衝(即チ虚衰)ヲ發スルニアリ

文學、工藝、商業或ヒハ日常ノ職業ヲ營爲スルカ爲メニ若干ノ操作ヲ終ハルノ後事物ヲ熟慮シ或ヒハ注意スルコト稍々過久ナルトキハ忽チ眩暈、頭痛或ヒハ非常ノ衰耗ヲ起シ又タ頑固ナル不眠症ヲ發シ頭蓋内ニ充血、空虚、寒冷、震戰若シクハ蟻走ノ感覺ヲ生シ又タ頭蓋内ノ深部ニ於テ俄然衝突シタルカ如キヿアリ又タハ諸緩ノ不快ナル感情ヲ起ニスヿアリ

本症ニ於テハ通常發病前精神ノ症狀自ツカラ平素ト異ナリ或ヒハ卒中癲癇ノ如キ疾患ノ侵襲ヲ待ツカ如キモノアリ或ヒハ漸々神識ノ衰耗ヲ將來スルモノアリ

斯ノ如キ患者ニアリテハ前頭若シクハ後頭部ニ疼痛ノ發作ヲ來タシ尋イテ惡心及ヒ心臟ノ鼓動ヲ起シ皮膚厥冷シ暫時ニシテ退消スヘシ

精神常ニ怯懦トナリ瑣少ノ不滿アルモ忽チ悲泣シ殆ント依ト昆垤兒及ヒ幣斯垤利症ニ

類スヘシ

婦人ニ於テ本症ヲ發スルトキハ脊椎部ニ鈍痛ヲ起スヿ甚タシク常ニ脊椎刺衝ノ現症ヲ有スルモノナリ

男子ニ於テモ亦タ脊椎ノ諸突起ニ疼痛ヲ發スレ𪜈殊ニ婦人ニ於テハ其苦悶一層強劇ナリトス是故ニ脊椎諸突起ノ一部ニ於テ輕微ノ壓迫ヲ被ムルモ忽チ恐駭シテ叫喚スヘシ

扣鈕若シクハ衣服ノ壓迫ノ如キモ皆ナ患トク之レヲ嫌忌シ重量ヲ保持スルノ外患部ノ諸筋ヲ操作スルコト能ハサルヘシ

軀幹ヲ一側ニ彎曲シ其部ノ諸筋ハ突隆シテ梗強トナリ摩擦電氣ノ刺戟ニ應スルコト頗フル銳敏ナリ然レ𪜈其反對側ノ諸筋ハ衰耗シテ菲薄トナリ且萎弱ヲ起スヘシ

下肢ニアリテハ疼痛、萎弱及ヒ異常ノ感覺ヲ起コスヘシ故ニ病初ニ於テ歩行ニ際シ疲勞シ易ク尋テ下肢諸筋及ヒ背部ノ疼痛ヲ現出スヘシ

暫時ニシテ運動ヲ嫌忌シ患者戸外ニ出ルコトナキノミナラス室内ニ閉居シテ椅子ニ坐シ或ヒハ卧臺ニ仰卧スヘシ

光線若シクハ音響ヲ感傳ヲ恐レテ室内ヲ密閉シ常ニ卧臺若シクハ卧床ニアリテ輕軟粗ナル衾ヲ擁シ全身ノ諸機関皆ナ悉トク其健態ヲ失スルカ如シ

末期ニ至ルトキハ腰部ノ作用ヲ失シ最モ強力ナル摩擦電氣ヲ通スルトキハ實性ノ攣縮ヲ起スモ疼痛ヲ感スルヿナシ

常ニ交接機能ニ於テ變調ヲ起スヘシ故ニ男子ニアリテハ陰莖ノ勃起スルヿナク快樂ノ情モ亦タ充分ナラス斯ノ如キ症候ヲ呈スルノ後患者諸般ノ妄想ヲ起シテ心神安ンスルヿナク終ニ人事ヲ省セサル二至ル

婦人ニアリテハ月經不調トナリ或ハ偶マ經血不等トナリ或ハ月經過溢トナルヿアリ

又タ神經刺衝ノ体質ヲ有スル婦人ニ於テ屢々子宮ノ疾患ヲ發スルノ後終ニ本症ノ徴候ヲ現出スルコトアリ

經過、時期及轉歸

病機增進ノ度或ヒハ疾患ノ症狀ノ如何ニ係ハラス本症ノ經過ハ頗フル遷延スルモノ多シ、

神經系ノ官能ニ於テ抑壓ノ症狀ヲ呈スルモノニアリテハ強壯、衝動及ヒ營養ノ一般療法ニ依テ大ヒニ輕快スヘシ

其藥劑ハ鐵、斯篤利幾尼涅、滋養食品ヲ與ヒ戸外ノ運動ヲ命スルトキハ漸々恢復スヘシ

心神常ニ鬱屈シ妄想ヲ起コシテ止マサルモノハ暗室内ニ幽居セシメ實母若シクハ親族ノ看護ニ任シテ毫モ他人ノ保管ヲ要セサルヘシ

依ト昆垤兒性ノ男子ニシテ本症ニ罹リ恢復ノ望アルモノハ悲哀ノ情ヲ起コシ或ヒハ無益ノ空想ヲ戒シメ專ハラ自己レカ意ニ適スル事業ヲ執ラシメ適宜ノ療法ヲ施コストキハ必ラス全治スヘシ

治則

品行上及ヒ衛生上ノ感動ハ最モ重要ナルモノトス

何レノ社會ニアリテモ數多ノ神經病患者ニ諸般ノ療法ヲ試ムルモ効驗ヲ現ハスヿ尠ナキハ吾人カ屢々實驗スル所ナリ

前章幣斯垤利症ノ條下ニ掲載セシ「ミツチエル」氏ノ療法ハ此症ニアリテモ亦タ能ク適當スヘシ然リト雖ヒ治後發病前ノ原因ニ暴鬱シ又タハ其感動ヲ起ストキハ再ヒ其症狀ヲ現出スルモノ鮮ナカラス是故ニ本症ノ患者ニアリテハ永遠根治シタルモノト雖ヒ勉メテ其社會ノ狀態ヲ變換セシムルコト最モ緊要ナリ

全身ニ摩擦電氣ヲ通シ或ヒハ平流電氣ヲ用ヒ電氣浴及ヒ電氣焔ヲ發セシムルカ如キハ最モ要用ナリ之レト同時ニ豚脂ノ塗擦劑ヲ施コストキハ殊ニ良驗アリ而レヒ之レヲ施用スルノミナラス一定ノ時期ヲ以テ運動ヲ命スヘシ

屢々水治法ヲ施コシ殊ニ高燥ノ地ニ轉居セシムルトキハ大ヒニ治効ヲ扶クヘシ

藥劑ニ於テハ肝油及ヒ鉄鍛ノ強壯劑ヲ取リ又タ脊椎ノ衝動藥トシテ斯篤利幾尼涅及ヒ

「ピクロトキシン」(植物強壯藥ノ一種)ヲ授スヘシ

胃弱ノ症候ヲ有スルモノニアリテハ砒石及ヒ番木鼈ヲ以テ特効藥トス

神經強壯藥トシテハ燐酸鹽及ヒ次燐酸鹽類ヲ内服セシムヘシ

総テ藥劑ノ療法ハ精神上及ヒ衛生上ノ馴習治法ニ比スレハ迂遠ナルモノトス

○ 強梗 原名 カタレプシー CATALEPSY.

釋義

強梗トハ神識ヲ失シ或ヒハ失スルヿナクシテ腦ノ諸官能共ニ一時其作用ヲ廢絶シ隨意筋ノ系統ニ於テ強梗ヲ發スル所ノ一症ヲ斥ス

病原論及徵候

強梗ハ偶マ特發病トナリテ來ルコトアリト雖モ多クハ五官閉止幣斯埃利亞及ヒ夜遊病ノ如キ精神病ニ併發スルモノナリ

幼年ニシテ精神ノ感動ヲ起シ易キモノ及ヒ神經質ノモノハ殊ニ本症ノ侵襲ヲ被ムルヿ多シトス

本症ノ發作ハ突然ニ來リ毫モ徵知スヘキ前驅症ヲ發スルコトナシ偶マ見ル所ノ前徵ハ唯タ感覺ノ變動ヲ起コシ精神悲歎ニ沈ミ或ヒハ非常ノ愉快ヲ覺エ或ヒハ恐懼ノ念ヲ生

シ或ヒハ又タ嘗性ノ疼痛、頭痛ヲ發シ全身ノ諸筋ニ鈍痛ヲ感スルヿアリ或ヒハ瞑暈、欠伸、吃逆及ヒ全身違和ノ症狀ヲ發スルコトアリ然リト雖モ此ノ如キ症候ハ敢テ必要ナラサルノミナラス每常必ラスシモ現出スルモノニアラサルナリ

本症ノ發作ヲ將來スルトキハ全身ノ諸筋梗強トナリ恰カモ木偶人ノ如ク毫モ筋力ノ弛緩ヲ有スルヿナシ又タ是レニ反シテ強直性痙攣ノ症狀トナリ反動ヲ司ドル所ノ諸筋モ亦タ同一ノ張力ヲ起コスコトアリ

五官ニ於テモ亦タ感受力ヲ失スルトキハ総テ外物ノ刺戟ニ應スルヿナシ縱令ヒ感受力ヲ有スルモ之レニ依テ反動力ヲ起スヿナシ

精神ニ於テハ殆ント其官能ヲ廢絶スト雖モ筋肉ノ系統ニアリテハ強直性痙攣ノ症狀ヲ呈シ外部ノ運動ニ抵抗シ毫モ隨意ノ作用ヲ起スヿナシ而シテ發作ノ初起ニ於テ現ハルヽ所ノ強梗ノ症狀ヲ失スルヿナク恰カモ石造ノ基礎ヲ以テ固定シタルカ如シ

暫時ニシテ意識ヲ以テ筋肉ノ作用ヲ起スヿ能ハサルモ外來ノ運動ニ應スルヲ得ヘシ而レモ其外因ノ歇止スルトキハ直チニ梗強ノ狀ニ復スヘシ

外來ノ運動ヲ與フルトキハ多少ノ抵抗力ヲ起シ四肢ニアリテハ屈曲自在トナルモ部位ニヨリテハ尚ホ運動ヲ起スヿ能ハス而レモ震戰若シクハ波動ヲ發セサルモノ多シ

諸関節ハ梗強ヲ發シテ操作ニ因テ屈伸ヲ營ムヿ難ク偶マ重力ノ定則ニ戻リ攣屈スルコトアリ然リト雖モ筋肉ニアリテハ震戦ヲ起コシ終ニ重力ノ定則ニ從フヘシ

患者ノ外貌一種特異ニシテ起坐共ニ強梗ノ症狀ヲ失スルヿナク軀幹直立シテ前方ニ傾キ或ヒハ後方ヲ仰クモノアリ顔面蒼白色ニシテ呼吸頗フル幽微トナリ脈搏モ亦タ細弱不整トナルヘシ

結膜ヲ指觸スルモ眼瞼ノ反射運動頗フル輕微トナリ食物ヲ咽頭ニ置クトキハ嚥下ノ作用ヲ起スヘシト雖モ其作用隨意ナラス

觸覺、疼痛及ヒ反射運動共ニ全然廢絶スルモノ多シ又タ症ニヨリテハ發作時中ニ現出シタル事物ヲ記憶スルモノアリ又タ稀有ノ症ニアリテハ知覺過敏ノ症狀ヲ呈スルコトアリ

發作時ニアリテハ皮膚厥冷シテ体温モ亦タ降下スルヲ常トス

發作ノ末期ニ際スルトキハ患者微然醒覺シテ頗フル深長ナル吸氣ヲ營ミ或ヒハ欠伸ヲ發シ恰カモ熟睡ノ後ニ醒覺シタルカ如シ

經過時期及轉歸

強梗ノ發作症ニ於テハ其度數及ヒ強弱共ニ一定セサルモノ多シ故ニ數分時ニメ終ハルモノアリ或ヒハ數時若シクハ數日間ニ渉ルモノアリ

發作間歇時ニ於テ殆ント健全ノ狀態ヲ有スルモノアリト雖モ多クハ幣斯陸剌亞ノ症狀ヲ現出スルモノナリ

第一回ノ發作ヲ終ハルヤ否ヤ患者直チニ其常職ニ復スヿアリ然リト雖モ數回反復スルトキハ神經系ニ於テ病理的ノ變狀ヲ誘發シ神經衰弱ニ基因スル所ノ諸種ノ症候ヲ現出スルモノ多シ

強硬症ニ於テ精神ノ變調ヲ呈スル所ノ疾患ヲ併發スルトキハ其現症ニ依テ精神病ト見做スコトアリ

治則

特リ經久ノ症ニアリテハ發作時ニ於テ最モ注意セサルヘカラス

發作數日ニ渉ルトキハ勉メテ滋養食物ヲ與ヒサルヘカラス此時ニアリテハ食物ヲ咽頭ニ置クトキハ嚥下ノ作用ヲ起スヘク又タ飲料ハ鼻竅ヨリ食道管ヲ挿入シテ注射スヘシ

發作ヲ鎮靜スルニハ瑣酸「アーミル」二三滴ヲ吸入セシムルヲ以テ足ルヿアリ或ヒハ莫爾比涅ノ皮下注射法ヲ施コスモ可ナリ

内服若シクハ灌腸劑トシテ通常用フル所ノ藥劑ハ阿蘭、纈草、龍腦及ヒ「テレヒン」油ナリ最モ重要ナル治術ハ神經系ノ調節ヲ整役シテ以テ發作症ノ反復ヲ豫防スルニアリ

是故ニ貧血症ノ患者ニアリテハ鐵、幾尼涅及ヒ燐酸塩類ヲ以テ最モ必要トス

患者ノ神識及ヒ行爲共ニ屢々變換セシムルヲ要スルカ故ニ景色、眺望若シクハ精神ヲ樂シマシムル所ノ事物ニ至ルマテ新奇ナラシムルコト最モ緊要ナリ

電氣療法ハ嘗タニ強梗ヲ緩解スルノミナラス神經系ノ調節ヲ整頓スルノ効アリ

總テ幣斯垤剎症ニ於テ用フル所ノ療法ハ本症ニアリテモ亦タ欲クヘカラサルモノナリ

釋義

○震戰麻痺（原名 パラリレス アジタンス） PARALYSIS AGITANS.

震戰麻痺トハ筋肉ノ震戰ニシテ脆力ヲ以テ起コリ年齢ノ增進スルニ從テ其症狀モ亦タ危篤ナルモノナリ

原因

四十歲以下ノ人ヲ襲フ勘シト雖トモ偶マ若年ノモノヲ見ルコトアリ既ニ「ダチン子」氏カ實驗セシ一患者ノ如キハ二十歲ニシテ本症ニ罹レリト云フ

男女ノ性ニ就テハ共ニ同一ノ比例ナリ

特ニ重要ナル原因ハ神經系ノ特異性ナリト雖ヒ強劇ナル感動、驚愕、心痛及ヒ諸般ノ行爲上ノ感覺モ亦タ有力ナル原因トナルモノナリ

遺傳ハ敢テ重要ナル感受力ヲ有セサルモノトス

偶マ寒冷及ヒ濕潤ニ暴露スル丁過久ナルモノ及ヒ刺衝性末梢神經ニ傷害ヲ被ムルカ如キモ亦タ本症ヲ誘起スルモノノ如シ

「チヤーコツト」氏ノ說ニ據レハ他ノ人種ニ比スレハ「アンダロ、サクソン」ノ種族ニ於テ發スルコト多シトナセリ

病理的解剖

患者ノ少數ニアリテハ屍體剖驗ニ於テ確然タル疾患ノ變狀ヲ檢出スルコト能ハサルモノトス

又タ症ニヨリテハ華魯里氏橋、延髓、四疊体及ヒ頸髓ノ側柱ニ於テ硬結ヲ見ルヘシ

又タ症ニヨリテハ震戰麻痺ノ症候ト瀰蔓性ノ硬結症トヲ誤認スル丁アリ

以上ノ諸變徵ニ據テ參考スル氏ハ本症ハ官能的ノ變徵ニ基因スル所ノ一種ノ神經病タルヲ證スルニ足ルヘシ

徵候

患者ノ大數ニアリテハ徐發スルモノニシテ初起ニ於テハ拇指及ヒ諸指ヲ屈シ又タハ前膊ヲ回轉スルニ當テ拇指、手腕或ヒハ足部ニ輕微ノ築動ヲ起スヘシ

手指ヲ把握シ華ヲ執リ或ヒハ步行スルカ如キ意識ニ因テ操作ヲ營爲スル氏ハ不整ナル築動ヲ歇止スヘシ

震戰ノ症候ハ當初發現シタル部位ヲ本據トナシ漸々下部ニ蔓延スルヲ常トス假令ヘハ當初右側ノ手腕ヲ侵カスヒハ數月若シクハ數年ヲ經ルノ後右側ノ足部ニ波及シ尋テ左側ノ手腕ニ來リ終ニ左足ニ達スルカ如シ

偶マ其順序ヲ亂ルコトアリ假令ハ當初右側ノ手腕ヲ侵カシ直チニ左側ノ足部ニ蔓延スルカ如キヿアリ

震戰ノ症狀ハ屢々身体ノ一側ニノミ限局シテ經久其反側ニ波及スルヿナク恰カモ半身不遂ニ類スルモノナリ然リト雖ヒ兩側ノ下肢ヲ侵カシ截癱ノ如キ症候ヲ呈スルモノニ至テハ頗フル稀ルナリ

普通ノ症ニ於テハ頭顱ヲ侵カスヿナシ然リト雖ヒ破格ノ症ニアリテハ震戰ノ症狀ニ先タチテ疲勞或ヒハ神經痛ヲ起コシ尋テ四肢ニ達スルヿアリ

偶マ急劇ノ震盪症ヲ發スルモノニ於テ本症ヲ頻發スルコトアリ而シテ後一肢ヲ侵カシ或ヒハ同時ニ四肢ヲ襲フヿアリ

本症ニアリテハ發病ノ症狀ノ如何ヲ問ハス病初ノ徵候ヲ呈スルノ時期ハ大抵一年乃至三年ノ間ニアリ而ル後其極期ニ達シ其病勢一定シテ變動ヲ起サヽルヘシ

病機增進ノ極度ニ達スルヒハ四肢共ニ侵襲ヲ被ムリ震戰ノ症狀歇止スルヿナシ而レヒ

輕重ノ度ハ必ラスシモ一樣ナラサルモノトス

精神ノ感動及ヒ身体ノ運動ヲ起スヒハ震戰ノ症狀益々增劇スヘシ又タ徵知スヘキ原因ナクシテ屢々增進ノ期ヲ有スルヿアリ而シテ睡眠若シクハ「コロヽホルム」ノ麻醉法ヲ施コスヒハ鎭靜スヘシ

震戰ノ症狀ハ當初築動ヲ起コシ筋肉ノ攣縮及ヒ弛緩ヨリ成ルモノトス而シテ手指ニアリテハ丸劑ヲ調製スル時ノ如キ感覺ヲ起コスヘシ

頭顱及ヒ頸部ハ健態ヲ失スルコトナシ而レヒ顏面ノ諸筋ハ運動ノ機能ヲ失シ容貌ヲ見ルニ感動ニ依テ喜怒ノ狀ヲ現出スルヿナク恰カモ痴呆ノ如シ

下肢ノ諸筋モ亦タ健態ヲ失スルコトナク眼球ニ於テモ亦タ横轉若シクハ縱轉症ノ如キ變徵ヲ見ルヿナシ

舌体ニハ輕徵ノ震戰ヲ起コシ唇緣収縮シテ言語徐長トナリ或ヒハ吃訥シ或ヒハ斷續不等トナリ一言ヲ發スル每ニ非常ノ勢力ヲ要スルモノヽ如シ

手掌頸部、軀幹及ヒ四肢ノ諸筋共ニ當初疼痛及ヒ痙攣ヲ發シ恰カモ僂麻質斯ニ類シ漸當初侵カス所ノ部位ハ屈筋ニシテ其症候モ亦タ此部ニ於テ最モ強劇ナリ

既ニ此期ニ達スルトキハ判然タル震戦麻痺ノ症狀ヲ呈シ軀幹ヲ前方ニ屈シ頸部梗強トナリ脊椎ノ諸突起ハ益々隆出シ手掌攣曲シテ畸形ヲ現ハシ殊ニ指端ニ於テ最モ明亮ナリトス故ニ全体ノ症狀ハ頗フル慢性関節僂麻質斯ニ類スヘシ

下肢ニ於テモ亦タ同一ノ變狀ヲ呈スヘシ

偶マ梗強及ヒ畸形ノ症狀共ニ震戦麻痺ノ初起ニ頻發スルコトアリ

大家「チャーコット」氏ノ説ニ據レハ震戦ノ症候ノ有無ニ関セス運動作用ハ其健態ヲ失スルコトナク唯タ遲徐トナルヲ見ルヘシト云フ

筋肉ハ容易ニ疲勞ヲ起コシ輕微ノ操作ヲ營ムモ非常ノ疲倦ヲ覺ユヘシ

筋系統ニ於テ特ニ著ルシキ症徴ト見做スヘキモノハ歩行ニ際シ一種特別ナル變狀ヲ呈スルニアリ

身体ヲ起立スルニ當テ其作用頗フル緩徐ニシテ漸々直立スルモ容易ニ歩ヲ進ムルコト能ハス偶マ歩行スルトキハ頭顱及ヒ軀幹ヲ前方ニ屈シテ進行スルコト頗フル困難ナリ偶マ軀幹ヲ後方ニ屈シ歩行モ亦タ前方ニ進マスシテ後方ニ逆歩スルコトアリ加之ノミナラス後方ヲ仰キ終ニ背面ニ倒ルヽコトアリ

全身ノ疲倦ヲ感フルノミナラス心身共ニ諸般ノ不快ナル感覺ヲ起スモノ鮮ナカラス

本症ニ於テ常ニ最モ苦悶スル所ノモノハ運動ニ際シ抗抵力ノ充分ナラサルノミナラス四肢ニ於テ倦怠不安ノ感覺ヲ現出スルニアリ

「チャーコット」氏ノ説ニ據レハ疼痛、鈍覺及ヒ寒暖ノ知覺ハ健態ヲ失スルヿナシ然レトモ屢々温熱ノ感覺ヲ起スコトアリト云フ

經過、時期及轉歸

本症ハ頗フル經久緩慢ナル疾患ニシテ殆ント三十年ニ達スルコトアリ

第一期即チ外觀ニ於テ其症候ヲ呈スルノ期ハ大抵一年乃至三四年ノ間ニアリ

病機增進ノ極度ニ達シタルノ期ハ二三年乃至二十年ノ間ニアリ而シテ此期ニ於テ諸症候漸々增劇シ終ニ全然不隨トナリ椅子ニ倚リ或ヒハ病褥ニ臥シテ毫モ身体ヲ運動スル能ハサルニ至ル

筋系統ニ於テモ亦タ多少脂肪變質ヲ起スノミナラス消削ヲ來タスヘシ

末期ニ至ルトキハ非常ノ虚衰ヲ來タシ尿通及ヒ糞屎ノ排泄共ニ不遂意トナリ精神恍惚トシテ迷瞶シタルモノヽ如シ

將サニ死ニ瀕セントスルトキハ震戦ノ症狀全ク歇止スルコトアリ

診斷

往時ニアリテハ震戦麻痺及ヒ瀰蔓性硬結症ハ屢々混亂シテ辨別スルヿ能

ハサリシト雖モ大家「チヤーコツト」氏ノ鑑識法ニ依テ創メテ其差異ヲ撿出スルニ至レリ其説ニ據レハ震戦麻痺ハ常時間斷ナシト雖モ瀰蔓性硬結症ハ唯タ隨意ノ運動ヲ營マントスルノ時ニノミ現ハルヽモノトス

老人震戦ニアリテハ頭部ヲ侵カスモノ多ク又タ運動ニ際シ震戦麻痺ノ確徴タル築動ヲ起スヿナク唯タ震戦ノ症候ヲ呈スルニ過キス其他諸筋ノ萎弱四肢ノ梗直及ヒ畸形ヲ發スルヿナキノミナラス老人震戦ニアリテハ軀幹ヲ前方ニ屈シ震戦麻痺ニアリテハ後方ニ彎曲スヘシ

乘姦ニ基因スル震戦ハ發病前必ラス水銀ノ蒸氣ニ暴露スルカ如キ職業ニ從事シタル履歴ヲ有シ協同作用ノ變調ヲ伴ヒ又意識ニ因テ發現スルモノナリ其他視力ノ變狀ヲ呈シ齒齦ノ外緣ニ灰白青色ノ線ヲ畫シ呼吸ニ惡臭ヲ放チ流涎ヲ起スヘシ

治則

・ 醫藥上ノ効驗ハ實ニ迂遠ナルモノヽ如シ

震戦ヲ鎮靜スルノ藥劑夥多ニメ「チヤーコツト」氏ノ如キハ殊ニ菲沃斯元ヲ賞讃セリ而レモ予カ實驗スル所ヲ以テスレハ其効力「ゲルセミユーム」(素馨ノ類)ノ右ニ出ルモノナシ其用法ハ一日三回「ゲルセミユーム」流動越幾斯十滴宛ヲ内服セシムルニアリ

退却變化ヲ整復スル爲メニ隔週ニ幾尼涅ノ頓服ヲ命シ爾後數月間酪酸加燐酸石灰ニ砒

石ヲ配伍シ持長セシムルヿハ必ラス良驗ヲ奏スヘシ

大家「イウレンベルグ」氏ハ砒石ノ皮下注射法ニ依テ偉効ヲ奏セリ又タ「オーグル」氏ハ「ハイソスチグマ」(カラバル豆ノ効分ナリ)ヲ賞用セリ

又症ニヨリテハ第一臭素化瓏腦ヲ以テ必要トナスコトアリ

偶マ緩和ナル水治法ニ依テ偉効ヲ奏スルコトアリ

古來諸家ノ稱用セシ療法數種ニシテ殆ント屈指ニ遑マアラスト雖モ吾人ハ未タ一モ滿足スルコト能ハサルナリ

尾爾華尼電氣ノ無効ナルハ世人ノ一般ニ信用スル所ナルヲ以テ絶テ之レヲ用フルモノナシ大家「イウレンベルグ」氏ノ説ヲ見ルニ毫モ其効力ヲ現スヿナシト云フ其他「エルプ」氏及ヒ「ワセンタール」氏ノ如キモ亦タ其實驗上同一ノ報告ヲナセリ

○舞踏病（原名コレア）CHOREA.

舞踏病トハ官能的神經ノ變調ナリ而シテ其主要ノ徴候ハ隨意筋ノ協同作用欠損シテ一簇若シクハ數簇ノ諸筋ニ於テ不整ナル痙攣性ノ運動ヲ發起スルニアリ

協同作用ノ中樞ニ於テ特異ノ變動及ヒ感受力ヲ有スルハ遺傳ニ歸スルヿ素ヨリ疑ヲ容レサルナリ

釋義

衣食住、教育及ヒ馴習ノ方法ニ依テ斯ノ如キ異常ノ變動ヲ誘起スルコトアリ

原因

本症ハ通例第二生齒期或ヒハ春機發動期ニ於テ其症候ヲ現出スルモノ多シ

遺傳ノ体質ヲ賦有スルモノニアリテハ諸般ノ原因ニ依テ本症ヲ併發スヘシ

僂麻質斯或ヒハ僂麻質斯性心内膜炎及ヒ外膜炎モ亦タ其原因ニ於テ重要ナル感動ヲ有スルモノナリ故ニ此症ニ於テハ密接ノ関係ヲ論スルモノ鮮ナカラス

今マ爰ニ其説ノ極端ニ趨リタルモノヲ擧クレハ積極ノ点ニ於テハ博士「セイ」氏ノ統計ニシテ同氏ハ舞踏病患者一百二十八名中急性僂麻質斯ヨリ來ルモノ六十四名ノ大數ヲ得タリ又タ是レニ反シテ消極ノ点ニ於テハ「ステーナル」氏ノ試驗ニシテ同氏ハ舞踏病患者二百五十人中急性僂麻質斯ヨリ來ルモノ四人ニ過キサリシト云フ

予カ實驗セシ所ノモノハ舞踏病患者八人中僂麻質ニ罹レルモノ一人ノ比例ナリ

腸内ノ寄生蟲、房事過度、月經不調、貧血及ヒ強劇ナル德義上ノ感動ノ如キハ屢々誘因トナルコトアリ其他妊娠モ亦タ之レニ加フヘシ

病理的解剖

解剖的元質ニ於テハ常ニ其變狀ヲ見ルヿナシ、

患者ノ大數ハ回復ノ轉歸ヲ取ルカ故ニ本症ニ於テ現ハル、所ノ變調ハ唯タ官能上ニアリテ解剖的ノ組織ヲ害セサルカ如シ

又タ心内膜ノ變狀ヲ併發スルモノ多キヲ以テ顧レハ綿條體或ヒハ視神經床ノ微細ナル脈管ニ於テ栓塞性ノ障碍モ亦タ病的變狀ノ諸因中ニ算入スルモ敢テ不當ナラサルカ如シ殊ニ「ヒウリングス、ヂヤクソン」氏ノ如キハ此説ヲ維持セリ

偶マ本症ノ患者ニ於テ栓塞症ヲ發見スルヿアルカ故ニ此解釋モ亦タ時ニ其正鵠ヲ得ルヿナキニアラサルナリ

然リト雖モ近世ニ至リ諸般ノ變狀ヲ發見セリ假令ヘハ「メーチルト」氏ハ腦ノ皮質ニ於テ變狀ヲ檢出シ又タ「エリスチユル」氏ノ如キハ細脈管ノ外膜ニ於ケル檢質ノ繁殖スルノミナラス肥厚スルヲ見ルヘシト云ヒ又綿條體ニ於テ神經結締織ノ成形機充盛ヲ起スモノトナセリ

腦脊椎軸ノ諸部ニ於テハ處々ニ軟化スルヲ見ルヘシ然リト雖モ綿條體ニ於テ軟化ヲ起